

新しい家庭科

アト

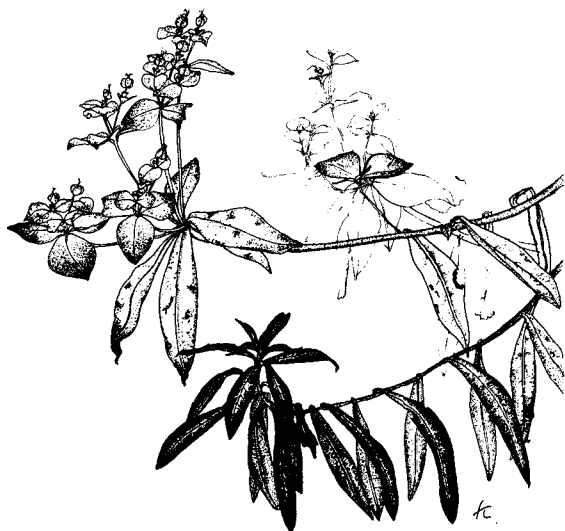
つきあいを考える



1984 12

野の花をたずねて のうるし

逐次刊行物
昭 59.11.19 和
国立婦人教育会館
情報図書室



栃木県の水産試験場跡は、田畑に囲まれた一角にあり、整地されていない所が実に気に入って、実家に帰るたび足しげく訪れていました。秋の真盛りには、ツリガネニンジンやワレモコウ、キンエノコロ、ヒガンバナと、雑多な野草たちが伸び伸びと生い茂り、蛹で冬を越す幼虫たちは、たっぷりとご馳走にありついでいました。

初冬に再度訪れた時、あれ程生氣に満ちていた草たちは、既に色を失い、男体おろしの寒風に、乾いた音をたてていました。羽がすり切れ、全身が赤くなつたイナゴが、鈍い動きで枯草にとりすがっています。すべての生き物は、確実に近づいて来る嚴冬の足音に、震え上がっているようにも見えました。そんな灰色の中で、鮮かな紅葉を見せているひと叢の草があり、目をみはって近づくと、それはノウルシで何回かの霜に耐えて色濃く染め上げた紅葉は、光琳の絵を見る程の美しさでした。

(大室君子)

巻 頭 言

つきあいを考える

酒井 章一

エディター〔雑誌などの編集人〕志望という女子学生相手の講話で——「先輩顔をしていろいろおしゃべりしてきたが、一つ二つ付け加えて終りにしよう。辞書をいつも手元にとやったが、例えば、その“帰省届”の省の字が気にならないかね。辞書には『キセイ〔帰省〕①故郷に帰って親の安否を問うこと②郷里に帰ること、帰郷』（新潮国語辞典）とある。じつはばくもこの原義は知らなかった。親の安否を問う、ほんとうの“帰省”をした人、手を挙げてごらん。たいていはご両親のほうで、君たちの安否をたずねておられるんじゃないの？ 一人前の人間として恥ずかしいやね。どんな言葉が、ご両親を安心させ喜ばせるか。まじめに、一心に考えなければ、言葉なんて何一つ出てきはしない。いまさらてれくさい、なんて言うのは、未熟な、怠け者の逃げ口上だ。これが、人とのつきあいの始まりじゃないかと思う。」

「さっきも言った、いいエディターの条件である“話の上手な聞き方”も、この“人とのうまいつきあい方”も、君たちは教えられなかった。ばくも新聞記者になって勉強したんだ。聞くがね、君が、君のことばで人を喜ばせたという思い出が一つでもあるかね。」

「きょうはこの本（河盛好蔵『人とつき合う法』新潮文庫）に触れられなかったが、ぼくの座右の書だ。ぼくは河盛さんが大好きだからね。帰りに本屋をのぞいて、買ったまえ。一杯のコーヒー代より安い……」

（文化女子大教授）

つきあいを考える

へ巻頭言 つきあいを考える

酒井 章一

1

つきあいを考える

家族はつきあいの原点

高見澤たか子

4

中・高校生とつきあう

森口 秀志

9

連翹の花―若者とつきあう―

中谷 君恵

14

歌で世界とつきあう

菅原やすのり

19

オリンピックとつきあい

越村佳代子

24

新しい家庭科を創るために

小学校では

地域社会と積極的にかかわろう・中里 清志

29

中学校では

実践へのアイデア①

二年「絵本つくり」..... 榎田 真澄

33

高等学校では「住まい手」として 住生活を

どう創るか..... 福島 澄香

39

大学では、今 教育学部における

家政学・家庭科教育..... 壁谷澤万里子

45

発言

学習の主人公たち いま、私はここにいる..... 野田 薫

56

ユネスコと私..... 押切 郁

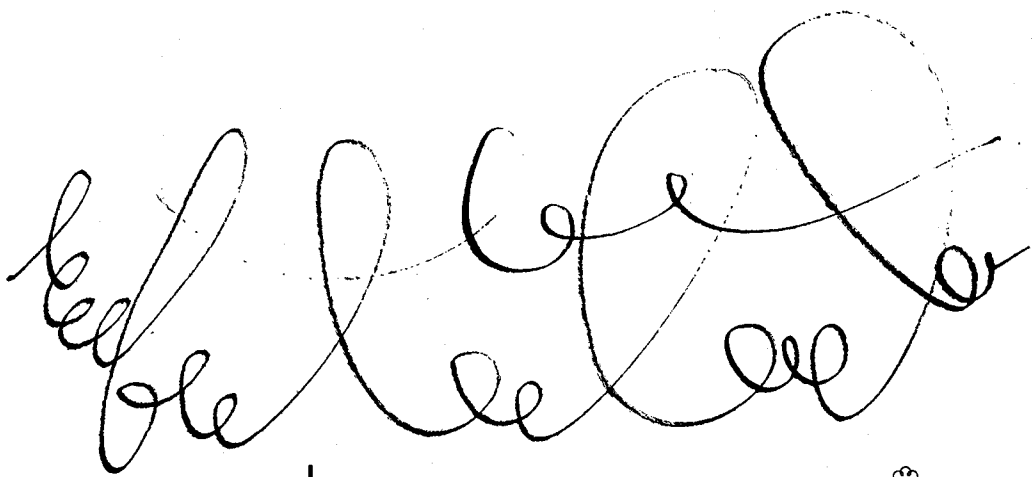
60

ことはー私のつきあい方..... 安島 里子

62

知縁を求めて..... 属 静

64



※連載※

『いんにちわ』—私のつきあい方……………水野 純子 66
 いづいろ SAY 差別……………鈴木みち子 68

野の花をたずねて……………大室 君子 50

視点……………長谷川 孝 52

counseling S応用……………児玉すみ子 54

現場から……………武田 秀夫 52

霞通信……………藤田 健次 49

ふじたけんじの……………井田 邦弘 73

生活マンガ……………増本 敏子 72

女の人生・男の人生……………渡辺 文恵 74

萬葉の男たち・女たち……………中嶋 里美 75

風に向かって……………遠藤 由紀 76

男女平等教育……………小田亜佐子 77

すすめてますか……………石川 由紀 79

シネマ……………中野 敬子 80

ほん……………小田亜佐子 77

We's report……………小田亜佐子 77

こんにちは！ 男女で学ぶ家庭科……………石川 由紀 79

—高槻市立第四中学校—……………中野 敬子 80

—NSって何？……………中野 敬子 80

〇波……………半田たつ子 84

〇ひと……………半田たつ子 84

〇四年目を飛躍の年に！ 読者参加の増刊号(夏)を企画……………78

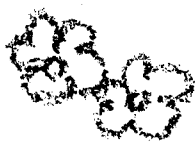
表紙デザイン 加藤由美子
 目次イラスト 馬場洋子
 本文イラスト 井田裕子／中野敬子／野中浩一／半田たつ子

○“We.” EDITOR'S NOTE 96 ○あんでな 94 ○十字路 92
 ○この号をよむために 82 ○情報 90

□つきあいを考える□

家族はつきあいの原点

高見澤 たか子



○互いの違いに気付くまで

この夏は暑かった。クーラー嫌いのわが家でも、クーラーをつけた放しにして寝た夜が幾日かあった。わたしたち夫婦と娘・息子の寝室はそれぞれドアで通じ、クーラーはわたしたちの仕事部屋についている。ドアを開けておけば、冷気は各寝室に入っていく。猛暑の夜、二人の子どもにドアを開けてやすむように勧めたが、二人とも「うん」と返事はするもの

の、いざ寝る段になると相変らずドアは閉めたままである。さぞかし暑かろうと思うが、本人たちがそれがいいというなら仕方がない。

ようやく秋風が立って、夜半から明け方、急に膚寒さを感じるようになった。タオルが一枚では寒くて目が覚めることがある。子どもたちにも毛布をかけるように言った。娘は素直に従ったが、息子は「窓を開めて寝れば寒くない」と言って、わたしが手渡そうとした毛布を受け取らない。二言、三言「寒い」、「寒くない」のやりとりをしたのち、わたしは息子の毛布をまた戸棚へ押し込んだ。それから一週間、二週間と日がたつにつれ、膚寒さは日増しである。ある日、息子の部屋をのぞいて見ると、厚手のトレーナーを着てタオルがけをひつかぶって寝ている。毛布一枚重ねれば寒い思いをしなくてすむものと思うが、向うが要求するまで毛布は出してやらないことに決めた。

こうした気候の不順な季節になると、老齢の父は一足とびに厳寒の身仕度をしたがる。下着、パジャマ、セーター、ガウン、それに靴下をはいてベッドに入る。その上からタオルがけ、毛布二枚、上がけをかけるから、夜中にはさすがにふ

とんをはいでしまふ。それが風邪ひきの原因になるからと、ガウンや靴下をぬいで寝るように勧めても、「おれのからだのことはいばんおれがよく知っている、余計なことはいうな」と言いはる。夫をのぞき、父と二人の子ども、そしてわたしは血縁で結ばれているが、しかしなんと人さまさまであることか。「家族は一心同体」などというが、とんでもない。暑さ、寒さの一事を例にとつても、この始末である。

顔かたちや性格や、あるいは食べものの好み、しぐさなどが少しずつ似通っているいろんな世代の人間が、それぞれ違つた感情を持ちながら一つ屋根の下に暮らす。家族とはなんと厄介なものだろうか。夫婦、親子、黙つていても心が通ひ合うことは確かである。しかし、時間をかけ話し合ひ、あるいは意思表示の努力をしなければ相手に伝えられないことのほうが、実はもっと多いのではなからうか。なんでもツーカーに通じらると思ふほうが間違ひなのだ。人それぞれ個があり、守るべきプライバシーがある。そういう認識は、まず家族のつきあひの中から学ぶべきものなのかもしれない。

○暴君の論理

わが家では長年の習慣で、食事はその場に居合わせた家族がみな席に着いてからはじめることにしている。あわただしい朝食は別として、夕飯は家族が帰つて来た順に台所に立つので、食卓に座るのもほぼ同時になる。たまたま主婦のわた

しが最後まで台所に残っているときには、「お先にどうぞ」と声をかけ、それを合図にみんなが箸を取る。

ただし、父だけは例外だ。だいたいわたしたちの夕食の支度は、父のお酒の燗をつけることから始まり、塩辛とか枝豆、せんべいなど、さつと出せるおつまみを二、三種出し、「用意ができました」と父に声をかける。ゆつくりと飲み始める父の前に、でき上がった順に料理を運び、それからわれわれが食卓につくというわけだ。家族が狭い台所の中で右往左往しているとき、父は悠然と「おい、次の酒の肴はまだか」などと言う。しかし六年間の同居の鍛練で、みんな「はい只今」といい返事をするようになった。

こういう父の殿様ぶりを、みんなが当然と思つてゐるわけでは決してない。「おじいちゃん」は昔の人だから仕方がない」とあきらめてゐるだけだ。父にとつては、家族は自分より目下のもので、たとえ娘の夫でも自分と同列という意識はまったくない。食事中の家族に向かつて、「おい、水」といつて席を立たせることは日常茶飯事だし、自分の好きなものは、ほかの人のことを考えずに食べてしまふ。こうしたことは、すべて亡くなつた母が長年の間に助長した悪習である。だが、八十六歳の老人に向かつていまさらなにが言えようか。ところが、戦後生まれの世代にも、父のような暴君が少なくないのに驚かされる。わたしの友人の夫は、家で飲むコー

ヒーや紅茶にはあらかじめ適量の砂糖が入っているものと思ひ込んでいた。ひと口飲んで「あれ、砂糖が入ってないじゃないか」と言つて妻を仰天させた。

わが家の大学生の娘が、この夏合宿に行つてすっかりくさつて帰つてきた。男も女も、若様姫様ばかりで、四泊五日の間炊事当番をしたのは娘を含めて三人だけ。台所で洗ひものをしてゐる友達に向かつて、トランプをしながら、「ちよつと、ぶどう食べるからお皿持つて来てえー」という男がいるかと思うと、朝、みそ汁の実をきざんでいる傍で、平然とマニキュアを塗り直している女もいる。

「あの人たちふだんはどんな生活してゐるんだろう、まったく感覚が狂つてゐるんだから」

娘の話を聞きながら、わたしは明治生まれの父と変わらぬ暴君が、着々と再生産されていることに暗たんたる思いであつた。すでに二〇歳を越えているというのに、この生活感覚の欠如はどうだろう。自分で米をとぎ、野菜の皮をむき、皿洗ひをするという下仕事の経験のないものは、家族であろうが友人であろうが、平気で人をあごで使う。自分の汚したものを人に始末させることに、なんのいたみも感じない。他人に對するいたわりの気持ちは、現在の学校の道徳の時間や口先のしつだけで養えるものだろうか。わたしにはとてもそうは思えない。

あるとき、仕事で仲間と旅行をした。中にお年寄りの婦人が一人いたので、道中わたしはその人の荷物を持つように心がけた。メンバーの中には男性が二人いたが、二人とも私が両肩に重いバッグをかけ、さらに両手に荷物をさげているのを見ても、一度も「持ちましょう」とは言わなかった。二人とも、エレベーターに乗るときや入室の際には女性を先へ通す紳士である。しかし、老人の重い荷物を代わつて持とうということには気がまわらない。その人たちが日常どんな家庭生活をしているか、のぞき見たような気がした。

○抜き難い男優位の習慣

ドイツ人の男性一人をまじえて、あとは日本人の男性数人、女性をわたし一人という食事の席に招ばれたことがあつた。料理を注文するとき、招待者はまず外国人男性に好みを聞いた。するとかれは、「ご婦人からどうぞ」とわたしにメニューを回した。次にお酒を選ぶときにも、招待者は、はじめに男性の意向を尋ねた。そのドイツ人は、「レディ・ファーストですよ」と、わたしを優先させるよう促した。料理が運ばれて、招待者が男性から取り分けるように言つたときにも、かれは、まずわたしに勧めた。あまり何度も「レディ・ファースト」とたしなめられるので、しまいに招待側もいやな顔をしていた。わたしとて、なにも昔ながらのレディ・ファーストのマナーを、そっくり日本の男性に望んでいるわけ

ではない。

だが、それほどしつこく外国人に注意されたにもかかわらず、その場の男性たちは女性の存在を意識することができなかったところに注目したい。

あるとき、わが家に男性のお客を大勢迎えたことがあった。息つく暇もなく台所と客間を往復するわたしに、「ちょっとひと休みして飲んだら」とビールを注いでくれたのは、わが夫。招かれた男性たちは、老いも若きも、主婦にねぎらいの言葉ひとつかけない。その人たちに人情がないわけではない。女が立ち働き、サービスするのを当たり前とする男上位の社会習慣が、感性を鈍らせているのだ。

娘が宿題のレポートが間に合わなかったとき、男の友達から、「どうしてゆうべのうちにできなかったの」と聞かれた。「だって、きのうはわたしが食事の支度をして、後片づけやなんかで時間がなかったんだもの」と言うと、「へえー、おまえんちのお母さんにしてんの」と、意外な顔をしたという。うちでは、母親も自分の用事があるから、食事がすんで後片づけの手伝いもせずにそのまま自分の部屋へ行くなどということはできないのだと説明をすると、「なーんだ。それじゃおまえ、おしんじやないか」と言われてしまったそう。

息子の態度を見ても、中学生になるかならずで、男の子はもう妙な特権意識を持つ。それまで、買い物も皿洗いもなん

の抵抗もなくしていたのに、中学生になった途端、憮然とした顔で「ぼくだけだよ、家でこんな手伝いするの」と言い出した。食後娘とわたしが食卓の上を片づけ始めても、新聞をひろげて知らん顔をしている。足もとの覺つかなかった老人のいるわが家では、日に何度もトイレの掃除をすることがある。その役目はわたし一人が引き受けていたが、あるとき息子に代りを頼んだ。すると息子は忽ちいやな顔をして、「えーっ、ぼくが、どうして」と言う。それを見ていた夫がすかさず、「よしぼくがする」と言ったので、しぶしぶ息子も腰を上げた。こんなとき、頼りになるのは夫の潔い協力である。

なぜ家の中の汚れ仕事は女の役目なのか。なぜお風呂の順番は男が先なのか。日常の生活習慣に根強く残っている性差別を、一つひとつ洗い直していく努力がなければ、男と女のほんとうに気持ちのよいつきあいなどできっこない。ましてや、人を差別することの誤りに気付くにはほど遠いと思う。

○いま、家族の中身は……

この夏休みの終わりに、娘の友達がやって来て、一緒に夏休みの課題をするという。仕事の邪魔をされたくないだろうと思って、簡単な夕飯を部屋に運んでやった。しばらくして台所で後片づけをしていると、玄関のほうで娘たちの声がする。挨拶をするつもりでわたしが玄関に出てみると、駅まで

送るらしい娘と友達は、もう道のほうへ歩きはじめている。

「遅いから氣を付けて」と声をかけると、ふり返って「さようなら」とひとと言いつたきり。格別のもてなしをしたわけはないが、帰りの挨拶ぐらいして欲しいと思った。

あとから娘にわたしの感想をもらすと、「きつと、ママがそう言うだろうと思った」と言う。娘の話によると、友達の家遊びに行っても、家の人が挨拶に出てくることはめつたにない。ことに父親は、姿を見かけて挨拶をしようとする、さつと隠れるようにして姿を消してしまうという。帰りしなに、「お母さんにご挨拶しなくていい？」と聞いても、「いいから、いいから」と押し出されてしまうとか。

わが家では、老齡の父を含めて、家族のだけれかのところへ来たお客は、一応みんなで出迎え、また見送る。ともに暮らす仲間であれば、それは当然のことではないだろうか。子どもたちが小学生の頃、低学年の父母会では、しばしば「挨拶がきちんとできるようにすること」というのが話題になった。子どもたちも親のしつけよろしく、帰りしなには「お邪魔しました」などと、こましゃくれた口調で挨拶をして帰る。黙つてのそつと帰る子など一人もいなかったように思う。大学生になって急に挨拶抜きとは、いったいどうしたわけだろう。

友人にジョギングに凝っている男性がいる。朝に夕にトレ

ーニングを欠かさない。どちらも食事の前に走る習慣だといふので、家族の食事時間をそれに合わせるのが大変ではないかと思つた。しかしかれの話によると、ふだんはめつたに家族と食事をするのではないという。子どもが大きくなつたので、ふだん揃つて食事をしなくても、週に一度外で食事をすることで、家族の団らんはことたりるといつてすましてゐる。

互いに挨拶を交わしたり、食事を大切にしたりすることが家族という仲間の約束ごととして根付いていないのだ。子どもは、親からしつけという形で強制されるから、きちんと挨拶もし、食事の時間も守る。しかし、親の手を離れたとたん、形だけのしつけはさつぱり用をなさなくなつてしまう。

老人でも、若い人でも、話をしていて、その人の向こう側に家庭とか家族の姿が、全く浮かんでこないことがよくある。なにげないしぐさや、とりとめのない世間話から、ひょいとその人の背後にある家庭の匂いが感じとれるものなのだ。ところが、全くそういうものがない妙に無機質な人間が増えた。いったいいま、家族の中身はどうなつてゐるのだろう。仲間同士氣持ちよく暮らそうではないかということから、人と人とのつきあいのルールもでき、生活にうるおいを持たせるための工夫も生まれる。そうしたものをそ家族の文化といふべきものであり、社会でのあらゆるつきあいの原点になるべきものなのだ。（たかみざわ たかこ・評論家）

□つきあいを考える□

中・高校生とつきあう

森口 秀志



僕が中学生・高校生といった若い世代の連中とつきあい始めたのはいつ頃のことだろうか？ 僕は今二四歳。僕が仲間たちと発刊し続けている『学校解放新聞』の事務所にはいつも中・高生たちがたむろして、雑談の花を咲かせている。中には僕と十歳も違うような子がいる。そんな子でも僕が事務所に現れると気安く、

「イエーイ、モーさん（僕の呼び名）元氣してるー？」

と声をかけてくる。僕も負けじに

「イエーイ、オジサンしてるぜバイビー！」と応えたりするのだ。こんな気安いつきあいができるのも僕がもう何年も前から中・高生たちや十代の若い連中に囲まれた生活をしているからだだろう。

僕は東京で生まれ小学校六年間を東京で過ごし、おやじの仕事の関係で小六の途中から宮城県石巻市に移り住んだ。東京で進学塾に通い、学習進度の進んでいた僕は、その地域の小・中学校で成績上位になるのは当然だった。

僕の進んだ中学はかなり規則の厳しい学校だったが（今でいえば管理教育の先進校だろう）、いい意味で田舎の中学らしく、みんな伸び伸びと中学生活を楽しんでいた。時代がそうだったのか、地域の特性なのか、その中学では成績上位者と、いわゆる「落ちこぼれ」と呼ばれる成績下位者の間には、それほど確執があるとは思われなかった。

成績上位者であった僕も、成績が悪く、時には教師たちか

ら「不良」のレッテルを張られていた連中とも気安くつき合っていた。それは僕だけでなく、僕よりも数段成績のいい連中も授業が終われば勉強のことなどすべて忘れて、クラスの仲間とわけへだてなくつきあっていた。

ところが、高校に入ると少々様相は異なってくる。僕が入学した県立の普通高校は、同じ中学から上位三十人位しか入学できない高校だった。僕もすべり込みでやっと入学することができた。そこには市内から僕と同程度からそれ以上の成績の連中が集まってくる。そのためか生徒同士も話がうまく合い、「非行」などもほとんどない。だが、市内中学の成績上位者を一つの学校に囲い込むことによって、僕らはかつての仲間たちの姿を見失ってしまったのだ。

中学卒業後に街で中学の同級生と会っても、高校が違っているとなかなか話がはずまなかった。しかも、「落ちこぼれ」の連中は中学の管理が厳しい分だけ、その反動が強く、高校で好き放題暴れまくる奴も多かった。バイク事故で半死半生の目にあい、長期の入院を強いられることになった奴もいた。僕の方はといえばその地域では「エリート」と呼ばれる高校に通うマジメな高校生の一人だった（少なくとも世間にはそう見えたはず）。「落ちこぼれ」の彼らとの間の距離はますます開いていった。時には「落ちこぼれ」の連中と話をすることが苦痛に感じられることさえあった。

その後、僕は東京に舞いもどり、一年間の浪人生活の後、都内の私立大学に入学した。まともな大学生になることをあきらめていた僕は浪人中からあちこちの集会や自主講座に顔を出すようになっていた。しばらくして僕はある自主講座の実行委員をするようになった。

その講座では週一回、実行委員が集まり、講座内容を練り、それを実行していった。公害、アジアの問題、都市問題など様々の講座を催した。中でも教育の講座は多く組まれた。教育問題は実行委員自身関心が高かったし、また人がよく集まった。村田栄一、遠藤豊、尾形憲、塚原雄太、渡部洋、西島健男、樋口恵子、若林繁太などの諸氏を招いた。

それは主に学校という組織・システムがいかに開かれていない、子どもの個性を殺す場であるかを解き明かしてゆく講座であったのではないかと思う。しかし、僕は講座を企画してゆくうちに「僕のやりたいもの」とちよつと違うんじゃないかな」というある種の違和感を感じるようになっていた。学校や教育の問題について考え、具体的にどうこちらが対処してゆくか話し合っているのに、その話の中にいっこうに学校の主人公である子どもが登場しないのだ。

子ども不在のところでは大人がワイワイと議論している。これでは自民党や文部省と同じではないか？ そんな気がしてならなかった。折しも実行委員会内部でも障害を持った子ど

もに絵を教えていた女性が、とかく理論で教育問題を片づけようとする若い男性の実行委員に対して、「なぜあなたは子どもと向き合おうとしないのか？」といった辛辣な問いかけを行っていた時だった。そして、その問いは僕にも向けられて当然のものだったのだ。

そんなある日、僕は内申書裁判を支援する人々でつくる「内申書裁判をささえる会」のシンポジウムにひょいと顔を出した。会は午後二時から延々九時まで続いた。壇上には管理教育批判の先がけをつくった愛知県東郷高校の生徒N君や「君が代ジャズ」で有名になった九州の若松高校のB君、それに武蔵高校の定時制の高校生たちが次々と上がり、生々しい報告をしてくれた。とても楽しいひと時だった。久しぶりにイキのいい中・高生と会えた気がした。

気がつくとい僕は第二回のシンポジウムの実行委員になっていて、内申書裁判原告の保坂展人が主宰する青生舎というスペースにひんばんに出入りするようになっていたのだ。青生舎は常に若い連中がたむろしていた。雑誌『80年代』（野草社刊）の中にある「90年代」というページを編集する高校生たちとも知り会えた。自分よりも年の若い連中が、世の中おかしい！と声を上げている姿を見てすごくうれしかった。

しかし、それでも青生舎に出入りする子はちよっと大人びた高校生であり、大学を受験することを当然と考えていた優等

生たちだった。だから僕は特に彼ら・彼女らと特別な“思い”を持つてつき合わなければならないわけではなかった。

学校から本当にはみ出さざるをえないような“ツツパリ”たちと出会うまでにはまだしばらく時間がかかった。’81年三月、僕は「アクション・ライン校内暴力」という電話相談を始めた。それまで学校内暴力と呼ばれていた生徒から教師への暴力が一躍脚光を浴び、校内暴力という言葉が定着しつつある時期だった。

新聞やテレビは全国各地の中学・高校で起こる校内暴力事件を連日のようにセンセーショナルに報道し続けた。僕らも「今、学校で大変なことが起こっている」と感じ始めていた。しかし、「大変なことが起こっている」割にはその実態は一向につかめないままだった。それはマスコミも含めて世間の大人たちもそうだったのではないだろうか？

なぜ実態がつかめないか？ それはマスコミの報道が、大人から大人への報道だからだ。大人の新聞記者たちが大人の校長・教師・父母たちを取材して、大人の読者に伝える。マスコミの伝えるものを見聞きするとどうもそんな気がしてならなかった。事実、子どもたちを直接取材して、彼らの生の声を聞くといった報道はほとんどみられなかった。

僕らは中・高生たちの生の声が聞きたかった。今、学校で一体何が起こっているのか彼らの口から直接に聞きたかつ

た。そこで僕らは中・高生たちから直接に話を聞く手段として、青生舎の電話を解放することを思いついたのだ。「とにかくみんなの声が聞きたいから電話して!」「今学校で何が起きているか教えて!」と僕らは新聞・雑誌・ラジオ・テレビを使って呼びかけた。

反響はすさまじかった。一カ月間に二百本の電話が鳴り続けた。そして、電話の本数以上に僕らを驚かせたのが電話の内容だった。

「僕たちの学校じゃ校内暴力なんてとても考えられません。僕ら毎日教師から殴られ続けているんです」

「先公に反抗すると体育館に連れて行かれて、十人位の先公に殴る蹴るの暴行を受けるんだ。もうたまんねえよ!。なんとかして下さい!」

「学校は規則、規則で私たちをがんじがらめにしているんです。もう私たちちっ息しそうです!」

てつきり教師を殴ったツツパリ君の武勇伝でも聞かされるかと思っていた僕らは、中・高生たちの救いを求めるような叫び声に面くらってしまった。そして、学校がおかしくなっているのは、生徒たちが悪いのではなく、教師や学校そのものがおかしいからなのだ、とそれから考えるようになった。「アクション・ライン」以来、僕らは急にツツパリ君たちとのつきあいが増えた。

中学卒業以来途絶えていたツツパリや「落ちこぼれ」とのつきあいがまた始まったのだ。「アクション・ライン」に連絡をくれた中・高生に会いに行ったり、校内暴力事件が起きた学校にはその当事者の生徒に話を聞きに行った。彼らと話をしていると本当にうれしくなってしまうことがしばしばだ。僕らが真剣に話を聞けば聞くほど彼らも真剣に話をしてくれる。今までこんなに自分たちの話を真面目に聞いてくれた大人はいなかった、というような顔をして自分たちの思いのたけを、一気にはきだすようにしゃべってくれたツツパリ（とは限らないが）がいかに多いことが。

確かに口ではいさまいことを言う。

「あの先公、ムカツクぜ。ブツ殺してやりてえな」

「あんなの先公じゃねーよ。本当ヒドインだから」

「先公なんか俺たちのこと、少しも考えていないんだぜ」

ところが実際に会ってみるとなんでこんなに大人しい子たちが教師を殴ったりするのだろうか、と不思議になってくる。僕らが様々なツツパリに会うようになって、しばしば聞かれたのが、「あんな格好したツツパリと会って怖いと思っただことはないんですか?」という質問。

確かに外見からすればとても中学生とは思えない連中もいた。教師が生徒をナイフで刺し、全国に名が知れ渡った東京・町田の忠生中学のツツパリもそんな中学生たちだった。髪

の毛にパーマをかけ、まるでアフロ・ヘアーのようになり、その上まっ赤に染色しているのだから、普通の大人だったらびっくりして眉をひそめるのは無理のないことかもしれない。

教師はもとよりテレビ局が取材に来ればテレビ・カメラに向かつてほえまくり、なぜツッパルのかと尋ねられれば、「ムカツクから」とはき捨てるように言う彼らの姿をブラウン管だけで見れば、たしかに得体のしれぬ宇宙人かもしれない。ところがさつきまで顔をまっ赤にして怒り、いまにも教師に殴りかかろうとしていた彼らが、僕らの前に来るとまるで借りてきた猫のように大人しくなってしまうのは一体どうしたことなのだろうか？

あるいは、ある週刊誌が彼らのツッパリ・グループの座談会を企画した。出てくる話は武勇伝ばかり、冗談で話したことでまですっかり活字になっていったという。たしかに僕らも彼らとつきあう時、「かったるい」と思うことがしばしばある。ほとんど無気力としか思えないような投げやりな態度、何をするにも「かったるい」とすぐしやがみ込んでしまう。こっちもつい「つきあいきれねえな」と心の中でつぶやいてしまう。

ところがもうちよつと時間をかけてつきあっていくと、彼らの態度も変わってくる。今まで「ムカツクぜ」しか言わな

かった彼らが、親のこと、家のこと、将来のことを語り出す。僕などは「ああ、雑誌記者はきつとここまで待てなかったのだな」と思ってしまう。

今の中・高生は分断され続けている。偏差値でふるい分けられ、大人になるにつれて経済力、階層によってふり分けられる。その意味では中・高生も大人と同じである。とりわけ中・高生は日頃接する大人といえれば親が教師である。両者とも彼らにとつて大人たちだ。彼らが僕らに会う時、目を輝かせるのはけつして「自分たちの言うことよく聞いてくれるお兄さん、お姉さん」だからではなく、自分たちが今まで知らなかった価値感を持った大人に出会った驚きなのだと思う。

そして、僕らも彼らと会う時に彼らの「かったるい」部分も含めて、僕らとは違う価値感、文化を持った素敵な人間であることを確認し、その新鮮な驚きにひたりたいがためにまた中・高生たちと会おうとするのだ。

中・高生たちを、自分と違った人間、自分と違った価値感を持った一人の独立した人間だ、と思えば中・高生たちとのつき合いもすごく楽しいものになるはずだ。世の大人たち（とりわけ教師や親）が、中・高生たちとの「つきあい」をうまくやっていないのだとしたら、きつとその部分が欠けているからではないかと僕は思う。

（もりぐち しゅうし・フリー・ライター）

□つきあいを考える□

連翹の花

れんぎょう

——若者つつきあう

中谷 君恵



私が一九七四年から、東京都立足立高等保育学院(非常勤)講師として、保育学生たちに「文学」と「言語」を教えるようになってちょうど満十年になります。本来児童福祉にはあまり関係のない学問をしましたが、縁あってその後、保育さんたちと深く長いつきあいをすることになりました。

もともとこの学院は児童福祉法による保育養成施設で、美

濃部革新都政下、保育要求の増大に伴って設置された若い学校です。最も古いのは練馬。

ほかに立川、足立、大田と四学院あり、毎年総数七〇〇人程度の卒業生を送りだし、その人たちは主として公立の保育園・施設・保育母になっています。本来なら江東方面にも設置される予定でしたが、赤字財政が云々されるようになって急激に様子が変わり、現在は保守都政下、民間委託。その上、就職難にもなって、保育学生も模擬テストを受けるやら、面接テストのほか作文の特訓を受けるやら、何かと切なくなりました。

いわゆる花嫁修行型の女子短大などに比べると目的意識もかなりあり、その上、地域的にも庶民的な学生が多いため、一味ちがうカラーがあります。それでも数年前までは成績はあまりよくないがなんでも福祉へという、八方破れの学生や、入学時付添とまちがえられた四十歳近い人がいたり、二児の母とか、離婚して人生を再出発するとか、看護婦をやっている小児保育の大切さを知って来たとか、キャリアの豊かな人がいて面白かったのですが、今はほとんど新卒の小じんまりした優等生(?)型で、それだけつまらなくな

りました。ただ一九七七年から男子学生が入って来たことで、活力が付きました。なにしろ今日のこのご時勢に、授業料はタダ、おまけに月一万円余の修学資金貸与制度もありますから、この学院の存在を知るにおよんで、ひたすらタダの恩恵に浴したい人たちが入って来るわけです。けれども総じてそれほど富裕でない、堅実な家庭の子が多いので、あまり華美な風潮は見られません。二部（夜間）は三年ですが、このごろは日中働きのながら保母資格をとというけなげ型は減り、二部らしい覇気は感じられなくなりました。

昔気質の、学徒動員派の私が、このようなふやけ族をだまして見すごすはずはありません。毎年々々、牙をむき、刀をといで、その切れ味をためすべく、舌なめずりをしてひよこたちを待ちかまえているというしだいです。なにしろあちら青春期、こちら更年期ともなれば、「トシハトリタクナイモノデス」と言われかねない。なにくそ!! とこのがんばり、実はくせもので、彼らとつきあうときはまずまず、こちらもぐうたらになって、という漂流の仕方もある。十年、リっぱに身につけたオバン教師であります。ときどき教室で、「ぶりっ子ってなに?」

などと言おうものなら、バカにすることすること。代わって、「みんなでつくろう友だちの輪!!」などという、「よく、知ってるーウ」とほめてくれます。

十年一昔といいますが、忘れがたいことが一杯あって、笑いやら涙やら怒りやら、それはもうさまざまです。若さはやはりすばらしい、いつの時代も変わりません。最初はピンチヒッターで二ヶ月教えました。その卒業生は、学校を去るとき私に表彰状をくれました。画用紙に金色の粉をまいただけの賞状ですが、わずかに数行の文に、誤字が五つもあるというシロモノ。それでも我が家では、厚生大臣渡辺美智雄、東京都知事美濃部亮吉等の賞状とならびその中で最も大切にされています。なぜって学生が先生にくれた表彰状ですもの。私にとつては最高の誇です。ときどきこの話を教室でしますと、

「ヨシ、待ッテオレ!!」

などと二番煎じをやりそうな顔をしますが、今の学生はすぐケロリ。その健忘症ぶりたるや年々ひどくなります。しみじみときいてみますと、昔、私が若かったころに比べ、今は若い人も忙しいのです。ほんとに、時がゆったりと流れていない、なんとなくあわただしくせこましく、今の学生たちの不幸といえそうです。あたりにあるのかもしれない。時として魯迅描くところの「藤村先生」などの話をして、たった一言でいいから、こんなになったのは中谷先生のおかげです、と言ってくれるようになれと笑わせますがニタニタと笑うだけ、やはり押しつけはいけませんね。

おまけに私にはたぐいまれなるぐうたら息子がひとりおりまして、それが今大学二年生、ちょうど教えている学生たちと同年齢ですから、内憂外患、彼女らはすぐドラ息子のお味方となり、この母親を白眼視します。卒業しても私の家におしかけ研究会を開く保母さんも多く、そのたびに、「アラ、先生、いい息子じゃないの」とけげんな顔です。人間、外から見てはいけませんね。という近況報告をした上で、編集部のご質問にこたえようと思います。

「付き合ふ」ということを辞書でひきますと、二つの意味があるようです。(一)交わる。交際する。(二)他人への義理を立てて、まげて事を共にする。

若者につきあう場合、原則的にはまず(一)であろうと思います。よく子どもの目線に立ってとか、子どもに添うてとか言いますが、上から高飛車に命令してはまずついて来ません。この関係は(二)になってしまい、表面上だまっていますがか心服はしていないのです。面従腹背ですね。彼らと常に同じ平面に立つことが基本です。偏差値教育の結果、幼・小・中高を通じて、声を出し、肌をふれあって先生と語りあうことがあまりなくなつたのか、四月に入って来た学生の表情は固いものです。そのころ足立の島根が原に、かつては春の草花

が咲き乱れていましたが、今は家が建ち並んでしまっています。けれどもまだ二、三軒、垣根にあの黄色い連翹の花が咲いています。私の年中行事は、この連翹の花のどろぼうからはじまります。ほんの一枝ですが、必ずちよいと失敬して教室へ持つて来、興味津津たる顔で私をみている学生たちに、まづ新美南吉の話をします。四月から九月まで、実質的には四ヶ月間の「文学」のテキストに10冊ほど文庫本をえらんでありますが、その中に南吉の「牛をつないだ椿の木」があり、解説に連翹の花が出てくるのです。それは昭和七年十九歳の南吉が東京外語に合格し、信玄袋をかついで詩人巽聖歌の家へやってくるところで、いかにも希望を象徴する花です。

カリキュラムの上から、南吉を読むようになるのは六月、そのころには連翹は散ってしまっています。ですから毎年四月に私はそのことを語り、南吉に結びつけておくのです。思えばその星型の黄色い花は、学生たちと私の出会いの花でもあり、私自身マンネリに陥らぬよう自ら襟を正すためのものでもあります。学生たちは私の指先にある小さい黄色い花に、ほっとしたやすらぎを感じてくれるようで、早々から花泥棒をきめこむ私に警戒心をとくのか、卒業してもよく連翹の花のことを書いて来ます。ついですが、新美南吉の名作「ごんぎつね」はこの年の作品です。若者につきあう最初の心得

は、若者の心にまず添うことだと私は考えています。

第二ははじめをつけること。このごろの若い講師にはやけにものわかりのいい人がいて、出席をつけない自由を誇る人がいます。ところが学生の方はそのウワテで、その時間はお使いにいたり、歯医者にいたり、ほとんど出席しないという現象もおこります。あわてて「この席どうしたの」「この人どこへ行ったの」と先生がきく、「そんなこと言うならはじめから出席とりやいのよ」と学生たち。これは(三)の方のつきあいでしょう。義理とは古い表現ですが、まげてことをする必要も世の中にはたくさんあります。理解あるようなふりをして、たがをなくしてしまうと、あとで大きなたがをはめねばならなくなります。いつかも台東区の広報を見ましたら、小学六年生のアンケートで、「好きなお母さん」のナンバーワンは、「叱ってくれるお母さん」とありました。子どもたちが自分で悪いことをしたな、と思っているとき、大人がそれを叱らないと、子どもはひとつ悪のハードルを越え、次に進みます。私の息子もよく言ったものでした。「なんだ、あの先生、なんにも言わないんだ、バカじゃないのか」。

私は年に一二度、刀でも間にあわなくて雷をおとします。私の方から授業放棄を考えてもらいます。その結果、でてくる答はたいいてい同じでした。

「私たち、今までこんなに叱られたことがないので、何をしたいかわからなかったんです」。

そうでしょう。そうでしょう。甘い親、甘い教師、甘いお菓子……。そうしてむしばまれる体と心。あんなにたくさん教科書にもりこんで、あんなにたくさん時間割をつくって、文部大臣殿、「ゆとり」をほんのすこし入れたからってゆだんは禁物。私はあんなゆとりはない方がよい^{【一】}と思っています。それよりは、社会の現場をみたり、労働したり、福祉のボランティアをしたり、たくさんお芝居を見たり、演じたり、詩の朗読をしたり、いろんな発表をしたり、子どもの頭につめこむのでなく、その松明^{たきまつ}に火をつけてやることの方が、よほど大切です。

それは第三の「あそび心」につながります。今の日本には一見あそんでいる人は多くいますが、あそび心のないあそびが多いようです。ものをつくり、創造的に開発してゆく心は、たくさんのおそびを、ゆたかに持った人からでなければ生まれてこないでしょう。情報や素材がいくらあってもあそび心がなければ、あそぶことはできないはずで、私が十年間ここ、みて来たものは結局のところ、このあそび心の開発であつたような気がします。いつも時間が足りなくて、ろくな講義もしてやれなくて、学生には申訳けないと思うのですが、でもおくれればせながら彼や彼女たちが、生きることのすばら

しき、出会いの尊さを私の授業を通じて発見してくれたら
な、とねがうばかりです。

うらをみせおもてをみせて散る紅葉

という良寛の句があります。私たちの若いころは多くのもの
が見えなくて、おもてばかりの人生でした。今の人は生れた
ときからうらばかり見ているようで、多くのものが見えすぎ
ます。それゆえ、肝心のおもてを軽視するところがありま
す。そういう人間が多いとしたら、これはわたしたち大人の
責任です。私は本来、彼らと平等ではありますが、うらばか
り見たがって、正統を無視するとき、彼らに真正面からた
かいを挑みます。そうすることで人生や、生きるということ
の意味を考えてもらうのです。

ごらんなさい。学校でも、ひる日中、さんさんと太陽の光
がさしこんでいるというのに、教室では全部蛍光灯をつけて
います。消して見て下さい。ちゃんと見えます。でも習慣的
に平気で、貴重なエネルギーを浪費しているのです。そうす
ることで一本の鉛筆も影を失いました。昔はいろんな影が人
生にありました。影を失ってあっけらかんと生きている今の
若者たちに、影の部分を語ることも、老いていく私のひとつ
の責任だと思っています。

連翹の花が、私の教師生活の光の部分であるとしたら、も
うひとつの影の部分をなんにたとえるべきでしょうか。いう
までもなく、じつとみつめるにはおそろしいものをその中に
秘めて、時はさかさまには流れることなく、きょうも過ぎて
いきます。別離は哀愁を伴って、私たちの心をふるわす影の
部分なのです。

これから私はできるだけ多くの若者とつきあいたい。そ
してできるだけバカにされされ、彼らの新鮮な感覚に学びた
い。午前八時の太陽には、日没までまだ多くの時がありま
す。ゆたかな経験で、その感覚とめざすところをみとめて、
静かな助言のできることを喜びを大切にしたいものです。

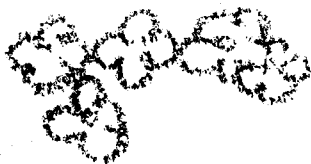
(なかに きみえ・東京都足立高等保育学院講師)



□つきあいを考える□

歌で世界とつきあう

菅原 やすのり



私は、夜空に輝く巨大な花火の渦に目をやりながら、なぜか虚しい気持ちに陥っていた。ここ、ロサンゼルスはたしかにオリンピックムードに酔いしれ、華麗に装っている。しかし、世界の街角で一五年間歌い続けてきた私にとっては、その華やかさが、かえってまぶしかった。

共産圏の国々のボイコットがあったということだけではな

く、こうして、巨大な国が、巨大な施設に、世界中の人々を集め、富と力を競いあうというオリンピックそのもののあり方に、疑問を感じていたからである。

私は、ホテルの窓から夜空をぼんやり見つめながら、隣りに座っている妻の明子に声をかけた。

「なんだか虚しい気がしないか？」

「ほんとにこれで世界が結ばれていくのかしら」

「もしかしたら、こういう熱気がかえって戦争を生み出してきたのかもしれないね」

「やっぱり、生活の中で、一人一人の人間がふれあい、信頼を作り上げていくということが、個人にとっても、国にとっても、なにより必要なんじゃないかしら」

「メダルを競い合うオリンピックじゃなくて、庶民レベルで、世界中の人々の心を歌で結べたら、きっと新しい何かが始まるだろうね」

二人は、昼の疲れと時差のために、ぐっすり眠りこんでいる長男の勇太（六歳）と次男の壮太（四歳）の寝顔をのぞきこんだ。

この子たちの育つていく二一世紀の世界はいつたいどうなっているのだろうか。それを作り出す一人の大人としての責任を考えると、改めて身がひきしまる思いがした。

七月二一日に、アラスカのマツキンレーで、親友植村直巳氏の追悼コンサートを無事に終え、家族とともにアメリカ横断のためにロサンゼルスに立ち寄った私であった。

私の専門は、そもそも都市計画である。環境が人間に与える影響を研究し続けるうちに、私は人間のコミュニケーションの問題にぶつかった。

たしかに、高度な技術や経済力の発展によって、都市は急激に近代化し、合理化された。けれども、ひとたび、人間そのものの存在に目を向けると、むしろ、弱体化し、心の荒廃はとどまるところを知らないのが現実である。

いったい都市の近代化が人間に何をもたらしたというのであろうか。新しい家が次々に建てられていく陰で、次々と家庭が崩壊していく。見事に整備されていくニュータウンで、少年非行が続出していく。

私は、都市を成立させる最も重要な要素は、人間自身であるという素朴な答えに目を向けはじめた。

どんなに環境が整備されようとも、そこに住む人間がふれあいを失い、虚弱化したのでは、なんのための都市計画かわ

からない。あくまでも、都市計画の原点は人間である。

そこで、私は、豊かな心と人と人とのふれあいを、生活の中に作り上げてゆくために、街角や広場に立って歌い始めた。

妻の明子は、生活を営む一人の女性の立場から、食生態学の研究と取り組み、そんな私の活動を側面から支え続けてきてくれた。三人の子供をかかえて、家事と研究をこなしながらの活動は、明子にとって、男性の私にはわからないほどの苦勞を伴ったにちがいない。けれども、八〇年度の難民キャンプ訪問や翌年のニューヨーク国連本部でのリサイタルなどの時にも、ぐち一つこぼさず全面的に協力をし続けてくれた。そして、そうした活動を通して、男と女という関係以上に共に生きる仲間として、夫婦のきずなが強まっていった。

私たち夫婦の共通のテーマは、人間の生活を支える環境や食べ物、地球的レベルで考え、具体的な提案を作り上げていくことである。

人間には数多くの出会いがあるけれども、そこに共通の問題意識やテーマが存在しない限り、その出会いは本質的な意味でのつきあいへと深まっていくことはできない。そうした意味では、学問の分野は違うけれども、こうして私たち夫婦が共通の問題意識とテーマに支えられて、一〇年間活動をもにすることができたということは、ひよっとしたらかけが

えのないことだったような気がする。

ところで、今回、私たちが家族で、このアメリカを訪ねたのは、人間共通の言語である「歌」で世界をつなごう、という呼びかけを、オリンピックにわきたつアメリカの人々に伝えるためであった。

翌朝、勇太も壮太も、昨日の疲れをはねとばすように元気に飛び起きた。大人の我々が、まだ時差疲れがぬけ切らないというのに、なんとという生命力だろう。

まず私たちは、ロサンゼルス郊外にある日系人の老人ホームを訪問することにした。

お昼すぎに、中央にある講堂を訪ねると、一二〇人余りの老人たちが、笑顔と拍手で私たち一家を迎え入れてくれた。どの顔にも、故国を離れて何十年も生き続けてきた苦勞のしわが深々と刻まれていた。

一〇〇歳をこえる老人も数人いる。もはや二度と故国の土を踏むことはないという。私は、心をこめて、「ふるさと」や「影を慕いて」などを歌い続けた。老人たちの眼にうつすらと涙がにじむ。

私は、この世に歌が存在することのすばらしさをしみじみ感じていた。テレビから流れてくるどんなベストテンの曲よりも、本物の歌が歌えたような気がした。

明子が「荒城の月」を歌い始めると、おじいさんやおばあさんたちが、まるで娘でも見るような笑顔で、一緒に歌い始めた。続いて、勇太と壮太が、「僕たちもがんばる」と叫んでステージに飛び出してきた。私は少々あわててしまったが、目を輝かせて拍手する老人たちの姿に、思わず、「それでは、次に子供たちが歌います」と叫んでしまった。

「おじいちゃん、おばあちゃん、元気でがんばってください！」堂々とそう述べると、いつのまに覚えたのか、「上を向いて歩こう」を二人で無伴奏で歌い始めた。

老人たちは、二度と帰ることのないわが家を思い出したのか、感きわまり、割れるような拍手を、二人の子供に送った。それにしても、いつの間にか二人がこの歌を覚えたのだろうか。私たち夫婦が、夜、この歌を練習しているのを聴いて、自分たちで覚えてしまったにちがいない。

どんな言葉よりも、一家が歌で結ばれていることが、大きな力を持つことを知った。

私も、妻の明子も、仕事や研究に追われ、子供たちとゆっくりと時間を作ることでできない立場ではあったけれども、この異国の地で、幼い二人の子供が、私たち二人の生き方を確実に理解しはじめていることを知り、感無量であった。

ダラス、ニューオリンズと出会いをくり返しながら、私た

ちは、アトランタで忘れられない出会いをした。

アトランタは、アメリカの中でも黒人が集中している南部の街であり、「風とともに去りぬ」の舞台にもなったところである。

私たちは、ブラックチャーチ、つまり黒人だけの神秘的な教会に招かれた。この教会は決して白人に足を踏み入れさせないという。もちろん黄色人種でもある。しかし、黒人の一人が私の歌と「歌は地球を結ぶ」という私のメッセージに感動し、私を招待してくれたのである。

はじめは不安でいっぱいだったが、一曲歌い終わると、もう昔からの友達のようなムードができて上がっていた。

彼らにとって音楽は、宗教そのものであり、命だった。アフリカから奴隷として、このアメリカ大陸に連行され、苦難の歴史を生きてきた彼らには、音楽こそが支えだったのである。体にしみ込むような黒人霊歌に包まれながら、私は歌がさらに奥深いところで、人間の魂をつないでいくことを知った。

そう言えば、アメリカでは、どこを訪ねても音楽が満ちあふれていた。そして、「音楽が好き？」と人々に問いかけると「YES」(はい)ではなく「OF COURSE」(もちろん)という答えが返ってきた。

アメリカは、移民の国である。古くはイギリスからメイフ

ラワー号に乗って、この地に流れてきた清教徒たち。そしてフランス、スペイン、イタリア、移民の歴史は続いた。さらに、ロシアやポーランドからの亡命者、ナチスに追われたユダヤ人たちが次々にこの地に流れこんできた。

現在も、アジア、中近東、アフリカからの難民が絶えない。つまり、アメリカは、言葉も文化も異なる多くの移民たちが、涙と汗で創りあげた合衆国なのである。

アメリカを横断し、村々を訪ねながら、私はこれまでのアメリカに対する見方と少し違った視点を強く感じていた。たしかにアメリカは強大な国であり、物質的には世界一豊かな国ではあるけれども、すべてコミュニケーションの上に成立している国なのである。

もし、人々が心を閉ざし、閉鎖的な価値感を持つなら、アメリカという国は、即座に崩壊してしまうのである。アメリカ人が開放的であり、コミュニケーションを大切に考える意味が、改めてよくわかる気がした。そのコミュニケーションの最も重要な手段が歌だったのである。

これまでは、少々アメリカに批判的な私であったが、アメリカに住む庶民の心や歌声にふれて、日本人の私たちが、コミュニケーションという観点から、アメリカ人から学ばなければならないことも、まだまだあるような気がした。

そして、多種多様な民族が共存していかなければならない

二一世紀の地球を考える時、このアメリカでの体験が大きな意味をもってくるような気がした。

最終目的地であるニューヨークで、私は三年ぶりに国連本部を訪れ、アメリカ各地で集めた平和のメッセージを代表に手渡した。代表も、私たちが一家でこうした活動に取り組んだことを、喜んでくれた。

翌日、私たちはハーレムにある「ティーン・エイジ・ママ・スクール」を訪ねた。離婚による家庭崩壊は、結果としてティーン・エイジ・ママ（十代の未婚の母）を増加させている。

十三歳前後の少女たちが、次々と出産してしまい、どう子供を育てていいのか、教えてもらいう家庭すら存在しなくなっている。

以前なら、おばあちゃんや母親に聞けば当然のことすら、彼女たちはわからないのである。そこで、作られたのが、ティーン・エイジ・ママ・スクールであった。子供を抱いて集まったあどけない少女たちの笑顔を見ながら、私は来るかもしれない日本の未来社会に思いをはせていた。

そして、本質的な意味で、男とは何か、女とは何か、そして家族とは何か、考えさせられた。

私は静かに「五木の子守り歌」を歌った。

続いて訪れた「麻薬患者更生施設」は、ハーレムの中でも一番危険な地域にあった。収容人員二百人。ここでも、十代の少年たちの姿が大半を占めた。

繁栄や享楽の陰にひそむ青少年の問題は、もはや全世界的な課題である。二時間歌い続けると、麻薬患者の少年たちの顔つきが輝きはじめた。所長の話によると、これまでいろいろ試みた方法の中で、合唱が彼らに一番効果的だという結果が出たという。

外からどんな押しつけをするよりも、自らの声を発し、心と体を清めることが、何よりも立ち直りに役立つということである。音楽にはまだまだ大きな力があることを、ここでも知らされた。

アメリカ横断を通じて、都市計画家としても、多くの課題を考えさせられた。明子も、アメリカ人の食生活をつぶさに調べて、その精神に与える影響の大きさを痛感したという。「歌で地球を結ぶ」と一口に言っても、簡単なことではないけれども、これからも一家で協力して、地球をかけまわりたいと思う。

（すがはら やすのり・東海大学講師、都市計画家）

□つきあいを考える□

オリンピックとつきあい

—ロサンゼルスで考えたこと—

越村 佳代子



ソ連の不参加、民営方式など、何かと話題の多かったロス五輪を、つきあいという切り口でとらえたら——という編集部からの注文は、なかなかユニークで意外性があった。国際関係といったって、いってみれば、国と国とのつきあいていうことだし……。「うん、おもしろそう」と、二ツ返事で引き受けた。以下、おもしろく書けるかどうかは、神のみぞ

知るといった心境でつづてみたい。

ロス五輪は片肺五輪といわれた。ソ連の不参加が表明されてから、朝日新聞社内でも、特派員を減らそうかという声があがったほどだ。これで、今回の五輪は興味大幅減、といった評価があったのだろう。何となく国内での五輪人気はいまひとつパツとせず、「どれぐらい手応えがあるかな」と感じていた。特派員として現地入りしても、初の本格的国際行事に湧き立った、あの東京五輪のころと比べれば、全くといっていいほど五輪ムードは盛り上がっていないかった（もともと、五輪なんか税金を使われてはたまらないというロス市民の感情からすれば、ごく当然のことなのだが……）。

ところが、ふたをあけてみると、どうだろう。スポーツに興味を持つ人、持たぬ人、などいろいろあり、全部が盛り上がったとはいえないだろうが、大方の予想を裏切って関心は高かったようだ。日本国内では高校野球の入場者数も、五輪期間中は、減少傾向だったときく。現地では、どの会場もほぼ満員の盛況で、ロス五輪組織委員会（LAOOC）が、史上最高の黒字を記録したことが、五輪人気

を証明している。

いってみれば、片肺にすることによって、米国の威厳に傷をつけ（四年前、モスクワ五輪で、ソ連がやられたように）、ひいては、秋に控えた大統領選にダメージを与えるソ連戦略は見事に裏目に出たわけだ。会場で聞かれた、あの「USA」の大合唱。いくどとなく聞かされた米国歌。星条旗がひるがえるたびに、愛国心はいやが上にも燃え上がる風であった。「やられたら、やりかえせ」とは、報復の常套手段である。

モスクワ五輪の派遣記者の話では、自由主義圏から来る選手や観光客を市民あげて歓迎する準備をしていたモスクワ子たち、カーター大統領のボイコット表明に心底がっかりしていたそうだ。ソ連側の恨みは深いだろう。表向きの理由は、警備上の問題にされているが、本当は「米国よ、私と同じ気持ちをもつてみよ」というところではなかったらうか。

だが、この報復手段は、いかにも単純すぎた。人々は（自由主義圏の人々は）五輪に飢えていた。八年ぶりの五輪は、世界記録があまり出なかったとしても、人々の熱い視線の中で、ルイス、ベノイト、ロベスらのスターを生んだ。

これが、もし、ソ連など東欧圏の選手が参加していたらどうだったろう。例えば、水泳など、次々奏でられる東欧の国歌にうんざりして、観客は減ったかもしれない。日本の柔道山下選手にしたって、年金や家など、金メダルに成績のかか

っているソ連選手が出場していたら、足を徹底的にマークされて、金メダルは怪しかったかもしれない。いずれもソ連が参加していたら、との仮定にもとづいてはいるが、米ソ対抗でいやが上にも盛り上がる種目と、ソ連・東欧圏の一方的ペーイスで、全くダメな種目とはっきり分かれたのではなからうか。そうすれば「アメリカ国体」などとかげ口をたたかれる事態には、なりえなかったと思う。報復にもT・P・Oがある、ということか。

会場やプレスセンター、などには、セキユリティー（警備員）やらボランティアがいっぱいいて、目が合えば、ニコツとするのが常だった。英語をペラのべぐらいしか操れない私にとって、このニコニコは、必要欠くべからざるボディランゲージだった。「アメリカにはニコツの習慣がある。なかなかいい」と思っていたら、実は「ハーイ」「ニコ」は自己防衛のためでもあるときいた。

これを教えてくれたのは通訳兼運転手の三世の青年で、彼は十一歳までロスで育ち、以後大学卒業まで日本で過ごし、その後、仕事でロスに住んでいるバイリンガル。体験的な日米文化比較論は、なかなか興味深かったが、この「ハーイ」については、「あっ」と思われた。「ハーイ」を表面的に見ると、愛想の良さである。白色人種の顔は表情に乏しく、ふつうの状態だと極めて対決的であり、その印象を少しでも

柔らかくしようと、ハリー、ニコツとやるのか、と考えていた。

ところがT君の話では、米国は人種のつぼであり、また、クスリにやられている人も多いから、相手が何を考えているかわからない。たまたま目が合って、相手が「こいつは不愉快だ」と思ったら、ピストルで撃たれたり、刃物でブスツとやられることは、大いに予想されることゆえ、それを未然に防ぎ、「私はあなたに害を与えない」ことを自ら証明する動作としての「ハリー、ニコツ」なのだ、というのである。「なるほど」と思わず、うなづいた。日本に帰ってみると、まあ、街を歩く人の不愛想なこと。しかし、これもよく考えてみれば、不愛想でも、突然相手から襲われたりすることのない安全な社会、ということなのだろうか。

愛想の良さに続けて、今度は不愛想の話を書こう。先出したT君と共に、LAOOCのある機関を訪ねた時のことである。LAOOCは、どの部門でも、極めて非効率な役所のような所があった。ある人は「携っている人間がボランティアで素人のせいだ」と言い、また、ある人は「ロサンゼルスタイム（のんびりの意）だ」と解説したが、私が体験したことという、ある日、やつとの思いで（機関の所在地をきくの、LAOOCの本部の三、四カ所タライ回しにされ）機関の本部についた。その責任者の所在を確かめると今はいない

が、もうすぐもどってくるとの返事。

テレビなどを見ながら、ボケーっと待っていると、背の高い黒人青年が部屋に入ってきた。私たちが所在なく過ごしているのに全く一顧だにしない。初めに私たちが会った係の人が耳打ちして、ようやく気がついたらしく、のんびりと（と私には見えた）ひと仕事片付けてから、私たちの方に向いて、ご用件は？ ときた。かくかくしかじかと述べる、それは、LAOOCの報道担当を通して、アポイントメントをとってから来て下さい。これで終わり。目の前にいるのがご本人で、さして忙しそうでもなく、こちらの用件も十五分ぐらいで終わるのに……。『全く、このーッ』と思いながら、日本との違いをつくづく感じた。

T青年にいわせると、米国の役所は、日本の「お役所仕事」などメジヤない、ガチガチで、一日で用事が済むことは、まずない。たいていが二日がかりになるという。従って、市民に最も忌み嫌われているのが、この役所とかかわりのある用事だという。そんなお役所仕事を思い出させる応待ぶりだった。

アポイントメントにこだわるのは、この人が特殊なのではなく、米国全体がそうらしい（五輪で共に仕事をしたニューヨーク支局員の先輩記者も「パーティーでニコニコ顔で話はずんだ人を、あくる朝、雑談でもと思って、オフィスに訪

ねると、『おまえはだれだアポイントメントはあるのか』と全く別人のような顔で問い糾す」と、嘆いていた)。自分の時間を他人によってかき乱されるのを嫌う傾向が激しい。これもまたT君の解説によれば、自分の時間は自分が支配するという個人主義の現れなのだという。時間に象徴される自分の領域に対する私の強さは、日本に生まれ育つと、いささか異常に映る。欧米人の自己主張の明瞭さは、よく賞賛されるけれど、そのもうひとつの側面には、このような、不愛想がひそんでいることを、知った。

私が、今回、朝日新聞社の海外五輪派遣女性記者になった理由は、女子選手村へ入れる、という単純なものだった。今回の五輪では、男子と女子は階数だけ異ならせて、国別に入村していたという事情や、新聞記者は、自由に選手村内をはいかいすることは、ほぼ不可能という警備のきびしさで、当初の派遣理由は意味がなかった。その代わり、というわけではないけれど、「女の五輪」なるキャッチフレーズをこしらえて、女性の新種目を中心に書いた。

日本の女子選手とは十分な接触が保てなかった。体協が「第二の黒岩を出すな」とばかりに、有望な、人気のある選手の周囲のガードを固め、個人的にじっくり話す機会など皆無だったせいもある。まして、六月末から専従になったばかりで、右も左もわからない。負け惜しみを言うわけではない

が、男性のスポーツ記者の目は「男社会」の視点である。フエミニズムの観点で女子種目をとらえた記事はこれまで皆無だったろう。同性としていろいろな悩みを分かち合えることができただろうに、と極めて口惜しい。

一カ月余の特派員生活をささえてくれた家族とのつきあいについても触れておきたい。二年前の夏、甲子園行きをふくめた高校野球の取材で、子どもを一カ月ほど、夫の実家に預けたことがあり、さほど心配ではなかった。長女は五歳、長男は三歳。家を出る時は笑顔で送ってくれた。ふだんの休みは、まめまめしく子どもの面倒を見る夫の存在も大きかった。夏休みをとって父子三人で三泊四日のドライブ旅行へ行ったり、親類の家を泊まり歩いたりした。

私はロスへ旅立つ直前に、子どもの声をテープにとっていた。何ということのない子どもとのやりとり。ロスではホテルがとれずに民家で合宿したため、個室で電話、というわけにいかず、プライベートなやりとりを他人にきかれるのがイヤで十日間ぐらい電話をしなかった。その代わり、毎晩寝る前に、テープをきいた。二度、三度ときいた。

ある晩、同僚が留守家族に電話している甘い声を耳にして、矢も楯もたまらなくなつて、ダイヤルを回した。泣き声

だったら、どうしよう、という不安もあったが、ひと声ききたいという思いが募った。心配は無用だった。「ママ、いま英語でほかの人とお話してるの?」と長女。長男は「元氣だよ」とちよつと甘えたような声。最後に家に来てくれている義母が出て、「佳代子さん、時々電話ちょうだいね。ママ、ママって、寝る時泣いているから」と言った。変に突っ張る必要なかったんだ、と後悔した。それから、三日に一度ぐらいの割合で電話を入れた。「あと、三つ寝たら、ママ帰るからね」が最後の電話だった。子どもたちは指折り数えて待っていたらしい。義母の話では帰国当日の朝は二人ともすごい張り切りようだったという。保育園の先生はもちろん、だれかれなく「きょうママ帰ってくるんだ」と吹聴したらしい。一度もあいさつしたことのない住宅の管理人夫人から「お帰りなさい」といわれて、ドギマギしてしまった。寂しくもあったろう(長女は義姉に「私は英語を勉強したくないの。だって英語勉強するとママみたいに遠くへ行っちゃうでしょ」と打ち明けた)が、それに子どもなりに耐えてたくましくなったと思う。「かわいい子には、その母を旅させよ」である。

最後に自分とのつきあいを書いてみたい。

ロス派遣が決まった後「人選の失敗だ」などとやかみ半分の評価も耳にした。が、私は私でしかないから、必要以上に張り切ることも興奮することもない、と思っていた。高校野球でよく言うことばだが「自分たちの野球をやれば勝てる」と。背伸びしすぎたり、ちちこまったりすることなく等身大でいい、と自分にいいきかせた。取材の中で、選手たちが、それぞれにプレッシャーのはねのけ方を工夫していることを知った。中でも、元金メダリストの米国人による射撃学校で学んだ香西式さんは、そこで学んだ一部を教えてください。自分のプラスイメージを広げることや、成功した時の、あの感じを思い浮かべることなど、など。おおむね、取材は成功し、私なりに思い切りのいい記事が書けたと思う。家事・育児の負担が、なくなり、仕事だけに没頭できれば、これくらいのことはできるのだという自信は、私の財産のひとつになった。これから自分自身とのつきあいは一生続くわけだが、メゲそうになった時は、「ほら、思い出してごらん、ロスのころを」と呼びかけてやろうと思う。

(こしむら かよこ・朝日新聞記者)

地域社会と積極的にかかわろう

——家族と周りの社会——

中 里 清 志

（手力壽と出城をその力カネレ）

我が家の娘は、小学校三年生。夫婦ともども働いているために、平日は、学童保育所で放課後を通っている。三人の指導の先生方のおかげや、異年齢を含む友達集団が気に入っているせいで、毎日、楽しそうに通っている。集団ゲーム、歌、手芸をおぼえたり、外でのドッチボール、すもうなど体をぶつけ合ったりして、のびのび育っている（家にいるよりも……）。

市の学童保育に対する理解は、まだまだ低く、補助金は出ているものの、公立化には、ほど遠く、ほとんどの学童保育が、施設も父母負担で賄ってきている（最近では補助金もけずる傾向にある）。

娘の通っている学童保育も、市の中では古く、創立六年になる。以前は、お寺の境内の一面を借り、プレハブを建てて運営していたが、今は、学校のひと教室を借り

しかし、市や学校側の対応は非協力的で、貸してもらえるのは一つの空き教室だけで、廊下には出られないように出入口がふさがれ、校庭からの出入口のみ使うようになっていた。しかも、トイレや水道は廊下側の直ぐ近くにあって貸してもらえず、遠く裏庭を廻って、外の社会体育用のトイレや、昇降口の水飲み場を使うことになっている。雨の日など、カサをさしてトイレや水飲みに出かけている。さらに、ガスや電話を引くことも認められていないため、緊急連絡では苦労している。父母会でも話し合い、何度も市側に働きかけたが、改善されていない。

こうした状態ではあるが、学童数は増えていて、四十人程になる。年々、共働き家庭や母子・父子家庭が増えている現れでもある。父母会を月一度土曜日の夜開いているが、父母が自分たちで運営していることもあって、参加も多く、施設のこと、市全体の学童保育のこと、子どもたちのこと、家庭のことなど、いろいろ話が出た。父親の参加も多く、時には、場をかえて、アルコールも入って、子育てや職場や仕事のことなど、夜がふけるまで話し込むこともある。

行事も、父母と指導員が協力し合って行う新入所児童歓迎会。夏休みの泊りがけのキャンプでは、一年生も上級生といっしょに、花火大会、スイカ割り、川遊びを楽しみ、煙に目をはらしながら飯ごう炊きを行う。納涼会では、親がおばけに変装して、子どもだけで夜の公園を歩かせる肝だめしがある。

冬には、手作りケーキでクリスマス会、ジャンボカルタでの新春カルタ会、いずれも親子して楽しみながら取り組む。

今や学校教育の場では、失われつつあるものが、ここにはあるように思われる。

先日、秋晴れの日曜日、父母・指導員・子どもたちの親睦を深めるために、ハイキングに出かけた。私の担当で、計画を練り、ピラを作り、県営の「少年自然の家」で、オリエンテリング、プラネタリウム見学を家族ぐるみで楽しんできた。

こうした交流を通じて、子育てについて考えさせられたり、自分の子どもの意外な面を見つけたりすることがある。

オリエンテリングでも、いつもは山登りなどで親に甘えてしまう息子（六歳）も、小学生とのいっしょのグループで、二時間、山の登り降りを歩ききった。

学童保育では、例年どおり、バザーを実施することになっていて、今は品物集めに忙しい。今年も、客寄せ策として映画会を開くことになっている。私の勤務している市の教職員で運営している主任手当拠出金によるフィルム・ライブラリースェンターから、映写機・フィルムを借りてきて、上映することになっている。

我が家は今年、息子の保育園の役員になった。この保育園でも、最近、父母の交流のために、栗ひろい、梨狩りがあった。妻がピラを作り、七〇名ほど集まった。近くの公園に十時に集まり、私が誘導係として、自転車隊列の先頭に立ち、秋の気配の深まる田んぼや畑の中をペダルをこいで走り抜け、農家の梨・栗畑まで案内した。

我が家が近所の家庭と直接かわることに、自治会の班長の仕事がある。班長は、私たちの班十三世帯の世話役である。会費の徴

集、共同募金のお願い、ゴミ袋の配布、自治会主催の運動会、敬老会の参加者を募ること、アメリカ・シロヒトリなど害虫の防除の連絡、自治会の各種回覧物の配布などがある。日ごろ、近所の方々と話す機会もないので、この時にはと考えている。

二年前にできた「水害をなくす会」の集りには、今年はほとんど出られなかった。

今年は、台風らしい台風がこなかったため、被害もなく終わることができた。役員の人たちを中心とした地域住民の熱心な取り組み、行政への働きかけによって、川幅も広がり、護岸工事もすみ、緊急時に川の水を一時的に貯めておく遊水池用の公園も設置されることになった。

地元で生活することが長くなるにつれて（十年になる）、こうした地域の人たちとの結びつきも強くなってきている。地域で、お互いに協力し合って、自分たちの生活を改善していくことは大切なことであろう。

最近では、自治会の回覧をまわしながら、学童保育の署名を一軒一軒お願いして回ったり、バザーのお知らせを回覧にはさんだりして、近所の方に協力してもらっている。

〈授業の中で〉

地域社会との結びつきも、家庭科の授業の中で考えられよう。家族の領域の発展として考えてみた。

一週間の自分の生活時間調べを通して、自分の生活を振り返り、計画的に過ごす生活態度の大切さを理解する。さらに、自分と家族の人たちとのかわりを、家事労働を中心に考え、家族の協力や助

表1 家庭生活と社会とのかかわり 6年2組 J子
(○印は自分で行ったところ)

自分の家	①食べる	②着る	③住む	④楽しむ	⑤学習	⑥その他
店や施設	ケーキ屋 ○	洋服屋 ○	親戚屋 ○	花屋 ○	文芸屋 ○	スーパー ○
	八百屋 ○	クリーニング屋 ○	ふとん屋 ○	ペット屋 ○	本屋 ○	デパート ○
	パン屋 ○	くつ屋 ○	金物屋 ○	レコード屋 ○	図書館 ○	パーラー ○
	さかな屋 ○		電気屋 ○	新聞屋 ○		病院 ○
	酒屋 ○		雑貨屋 ○	本屋 ○		ぎんこう ○
	おかし屋 ○			スポーツ屋 ○		ゆうばり ○
	とうふ屋 ○			お花屋 ○		くすり屋 ○
	米屋 ○			図書館 ○		警さつ ○
	お茶屋 ○			紙体 ○		市役所 ○
	外いけ所 ○			ファミリア ○		公民館 ○

け合いの大切さを理解する(『We』五月号参照)。
次に、自分の家の周りの社会と家庭のかかわりを考えてみることにする。
最近、自分や家族の人たちが行った、利用したりしたお店や施設を一覧表

にしてみよう。家庭のはたらきを衣生活・食生活・住生活・楽しむこと、学習のこと、その他と分け、それぞれの店や施設が、家庭のはたらきのどこに関係しているのかを見てみる。
作業を通して

て、周りの社会が家庭とどのように結びついているのか。家族みんなの生活も、家族の人たちだけではなく、家庭の周りの社会との密接な関係によって成り立っていることを、気づかせたいと考えた。

〈例1〉J子(表1参照)

J子の感想

「食べるための店や、楽しむための店や施設が多かった。住むためのお店が思ったより少ない。公民館などの共同施設もけっこう多かった。

工務店のほかは、だいたい行ったことがある。スーパーやデパートなどの店は、食べる・着る・住む・楽しむ・学習・その他もみんな含んでいて便利だ。

どの店や施設も生活の中で大切だなあ。こんなにたくさんの店も、だいたいはお母さんが行くから、私も手伝いをしなければいけないと思った。

家庭生活と社会は切っても切れない関係である事がわかった。」

〈例2〉Y子(表2参照)

Y子の感想

「調べてみると、いろいろな店や施設があるなと思った。こんな色々な店や施設が私たちの生活にかかせないんだなと思った。

けっこう私は色々な店や施設に行っていておどろいた。特に、食べる事についての店が多かった。

個人↓家族↓社会の全体の学習を調べてみて、社会では、みんな仕事を分担し協力し合っているんだなと思った。」

子どもたちの調べたところによると、食べることに関する欄が一

表2 家庭生活と社会とのかかわり 6年2組 Y子

店 や 施 設	食 べ る	着 る	住 む	楽 し む	学 習	其 他
	スーパー	洋服店	電気屋	本屋	文房具	くすり屋
	豆ふや	くつ屋	石油	デパート	材木屋	デパート
	せあや	スーパー	スーパー	スーパー	スーパー	花屋
	肉や	クリーニング		おもちゃ		とこや
	酒屋			江戸屋		歯科院
	おかし屋					銀行
	パン屋					
	米屋					
	さか屋					
	ケーキ屋					

であろうか。

〈最後に〉

今、大人たちは、大変忙しく生活している。朝早くから、夜遅くまで働き続ける父親。自分たちの家庭を守るのに精いっぱいいる母

番多くなっている。生活の基礎がここにあることを考えることができる。次に、楽しむ欄も多い。子どもたちも、いろいろな店を利用してあるように一般的にレジャーや趣味を楽しむ傾向が強くなっている現れ

親。子どもたちも忙しい生活を送っているように見える。私の家でも、年々、子どもとゆっくり過ごす時間が少なくなってきたのを感じている。

こうした生活の多忙化と、家族の核家族化の進行とによって、地域社会との結びつきは、益々うすれてきていると思われる。家族も、昔の血縁関係や地域社会のしがらみから自由になったかわりに、孤独感や不安感をより一層強くしていると言えないだろうか。孤立している家庭の悲劇は、毎日のように、新聞紙上をにぎわしている。

私たちは、家庭が一つの家庭だけで存在するのではなく、周りの社会に支えられ、密接に結びついて成り立っていることを知ること

も大切であろう。子育てに関しても、家族同士の交流を通じて、多くの家庭の知恵

を見たり、聞いたりしながら、行っていくとよいと思う。家庭科の中でも、家庭内のことだけでなく広く家族と社会のかかわりも教えていけたらと考える。

(上尾市立西小学校)



実践へのアイデア①

三年「絵本づくり」

櫛田 真澄

一、子どもにとって絵本とは

日本の子どもたちは、幼児を含めて一日に三時間以上もの長時間、テレビとつきあっていると言われている。幼児の場合約一〇時間を睡眠時間として、起きている時間の約半がテレビと共に過ごす時間であると考えられる。このような現実が幼児の心身の発達を、またその後の児童期・青少年期の発達をゆがめているのではないかと、という警鐘も多く、教育にたずさわる親も教師もその対策を迫られているのが現在の状況といえる。

幼い子どもは、読み手がない限り絵本に出会うことはできない。子どもは、絵本を読んでもらいながら、遊びや生活の中で経験したことを確かめたり、深めたり、広げたりしている。また子どもは絵本を読んでもらいながら、やさしい人の声や膚のふれあいを通して人間的な交流を楽しんでいるのである。そこには、一方的に流れて

くるテレビの映像や音声からは得ることのできない基本的な信頼関係が生じているとすることができる。絵本は子どもたちの知的な能力を育てるばかりではなく、現代人に切に求められている人間的な心の交流の場を作り、基本的な信頼感を育てる大切な材料でもある点に注目したい。

そこで本校では、共学家庭科の重要な学習として保育学習に力を注いでいるのだが、そのねらいは、

- ・ 自分自身の理解
- ・ 家族との関係の理解
- ・ 幼き者への理解
- ・ 人間性尊重の精神を育てる

の四本の柱だてをし、次のような内容を学習している。

- 1、人間の成長と発達
- 2、子どもの見方や考え方

「幼児と遊ぶ」をテーマに学習
(六月号掲載)

- 3、私の幼少時
- 4、家族史と私の成長

- 5、幼児と環境

- 6、児童福祉

◎7、絵本の作成

- 8、おやつの実習

- 9、幼児食の実習

これらを教師側の一方的な教え込みにならないように注意し、課題発表や制作や実習を含めて立体的に学習が出来るように工夫しているが、本稿では、「絵本の作成」について詳述してみたい。

二、絵本に対する年齢別興味の傾向

一歳児

- ・絵本の中の自分がよく知っているものに注目する
- ・音のひびきのおもしろい、短い韻文に耳を傾ける
- ・歌ってもらうことが好きである

二歳児

- ・あまりこみ入っていない、色の鮮明な、単純な絵を喜ぶ
- ・「コレナアニ」ときいて、おとなに説明してもらったり、絵についておはなしをするのが好きである。またおとなに質問されるのも好む

三歳児

- ・おはなしを聞く時、その興味の持続時間が増してくる
- ・くりかえしや、よく知っている経験話を喜ぶ
- ・自然現象や乗物、現実の人や動物をもとにした空想物語を喜ぶ

四歳児

- ・更に長い時間にわたってお話が聞ける
- ・おはなしの中のおもしろい部分に大喜びをする

五歳児

- ・言葉に強い興味をもつ
- ・かなり複雑なおはなしも理解できるようになる
- ・文字に興味がでてくる

以上のような幼児の絵本に対する興味の傾向を、先輩たちが残してくれた作品を例にとりながら説明する。最初は、幼児の心になじみきれず、現実的で、計算的な傾向の強い生徒たちも、先輩の作品が次々に紹介されるに従って、少しずつ幼児の心や、現実と空想の間をさまようおはなしに興味を持ちはじめてくる。しかし、女子生徒よりも男子生徒の方がメルヘンの世界への同化が難しいので、絵本

の種類をいろいろ示しながら、乗りものの絵本とか、冒険物語の絵本や、科学的な絵本に注目するようアドバイスをしている。先輩たちの作品は強力な動機づけとなる。

絵本の種類には次のようなものがある。

- ① 空想物語の絵本（昔ばなし、メルヘンの世界のおはなし、冒険物語など）
- ② 動物を中心とした物語の絵本（動物を主人公にしたおはなし）
- ③ 乗りものの絵本
- ④ 科学の目を育てるための絵本
- ⑤ 子どもの生活を中心にした絵本
- ⑥ スポーツをテーマにした絵本

導入・動機づけの段階で特に注意し、押えておかねばならぬことがひとつある。絵本をつくるということは、中学生自身の創造性や想像性が問われることで、幼児と心を共にし、空想の世界、想像の世界で遊ぶことなのである。幼児はその特徴として、動物や植物や月、太陽、風などとおはなしができて、心を交流することができ、空想の世界で遊ぶことができる。中学生自身も空想の世界を楽しめないと絵本ができない。「あなた方は、お兄さん、お姉さんとして、幼児のために、彼らの喜ぶ絵本を考えて作ってみよう」と動機つけてゆくのだが、彼ら自身がマンガやテレビの影響を強く受けてしまっているため、「おはなし」を作るときに、暴力・殺人・強盗・セックスなどをテーマにしてしまう傾向があり、想像性の貧しさが現れる。故に、私は、最初の段階でこれらははっきりと禁止することになっているが、それにもかかわらず、絵

コンテを点検してゆくと、必ず何点かあるのが現状である。従って、世の中の美しいもの、純粹なもの、真実なるものに目を向けさせ、単純で素朴な幼児たちのために絵本を作ってみるということ、中学生たちにとって、意義ある学習と考える。

三、絵本作成の順序

幼児の心身の発達及び幼児の絵本に対する興味の傾向などについては、絵本作成全体の導入として扱い、「絵本づくり」を次のような順序とする。

(1) 絵本の構成を考える

- ・ 主題（テーマ）をはっきりさせる。題名を考えてみる
- ・ 登場人物の性格や特徴をはっきり決める
- ・ 物語の背景や場面を設定する
- ・ 物語をつくる（構成）

物語は一般に「発端→展開→解決→終局」というように流れる。幼児向けには、展開の部分があまり複雑にならないように注意する。また、終局の部分は、できるだけハッピーエンドとなるようにすると幼児の気持は落ち着く

この場合、生徒たちのイメージアップのために、先輩たちの作品を例にとりながら説明すると同時に、多くのヒントを与えるようにする。「好き嫌いをなくしましょう」とか、「歯をよくみがきましょう」とか、「けんかをしないようにしましょう」というような道徳的なものとか健康をテーマにしたものがいちも多くなってしまうので、もっと広く、自由にテーマを考えさせたいと思う。

「あなたの幼少時を思い出してそれをテーマにしてみよう」「あな

たの趣味をテーマにしてはどうか（スポーツ、音楽、昆虫、魚、小鳥の世界）」「自然現象もおもしろい（雨や風や雲や太陽など）」などと、男子生徒たちが絵本づくりに抵抗感を持たないで入れるようにすることが大切である。

また、場面設定のためのヒントとしては、海の中、宇宙、離れ小島、ジャングル、森や林の中、土の中、木の幹の中、ほら穴、ミクロの世界、遊び場、家の中など、自由に考えてみるように励ますとよい。

更に、主人公や登場人物を動物や昆虫や魚などにして、決定したテーマを展開するのもおもしろく、やさしくできる。人間の動きや表情を表現するのは、一般的に難しく、よほど手慣れた生徒でなければ、物語のおもしろさが絵でこわれてしまうのが普通である。作者自身がガツカリすることのないように配慮すると同時に、一生懸命取り組んでみることに重点を置きたいものと思っている。

(2) 私の絵本作成プランの記入

ノートまたは別紙を与えて、それにことばと絵で表現させてみる。テーマ、登場人物の性格や人数、場面設定、あらすじ、ページ数、絵本の形、絵本と文字の位置関係、表紙などについて、その計画を表現してみるとイメージが具体的に becoming くる。

この時間は大切で、いろいろな質問が出される。例えば「飛び出す絵本を作ってもいいですか」という生徒が各クラスに必ずいるので「中心になるおはなしをしつかり考えて、ミニ絵本を作った後、ゆつくり工夫しよう」と答えることにしている。一般的に今の中学生たちは、手先が不器用であったり、また飛び出す工夫の方にだけに気持がとらわれて、本来のおはなしの作り方などの学習を忘れ

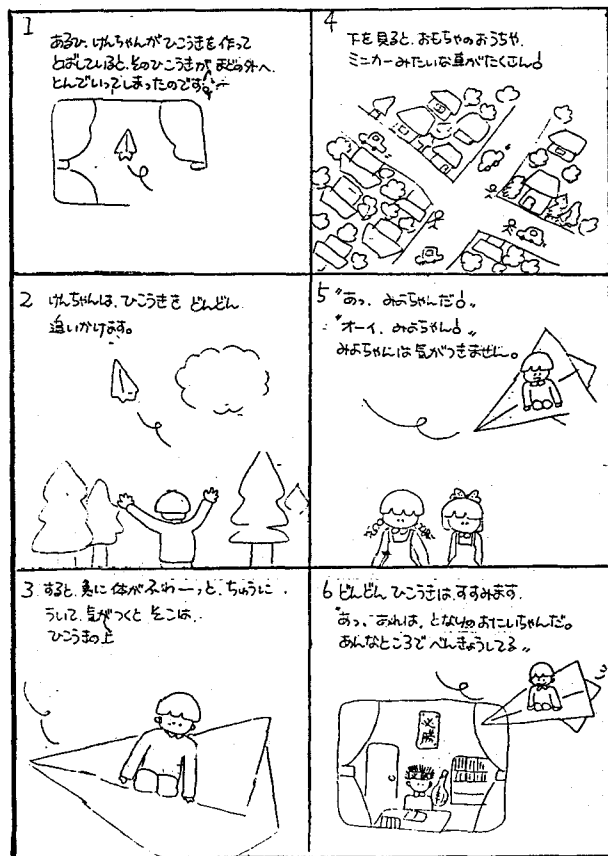
ぼくの ひょうき

管見

たり、アドバイスをしたりして、本物と同じ大きさの絵本に作り直す。この時に飛び出す絵本になれば素晴らしいと考えている。

(3) 絵コンテの作成

絵本作成プランに従って、一枚の紙の表側に少し大きめに絵本の表紙（絵本の題名や作者名も入れる）を表現させ、その裏側に線を引いてコマ数分に区切り、絵と文をかき入れながら絵コンテを作成する（図1を参照）。絵と文の関係や、おはなしの展開などを再検討する。



(36)

4、でもだれもさがしにきてくれません。「おかしいな——」だんだんさみしくなっていたいちゃんはどうとうなさだしてしまいました。「みんなにあいたいよ——っ」。

5、「どうしたの」とどこからか知らないおさかながやってきました。

たいちゃんは、なっていたわけをはなしました。

6、「じゃあ、いっしょにみんなのところへいきましよう」。このおさかなはしらないいちゃんにとでもやさしくしてくれました。なまえはけいちゃんといいました。

7、「あっ、みんながいる、お——い」たいちゃんはさげびました。

「どうもありがとう」とけいちゃんにおれいをいって、けいちゃんとわかれしました。

なんとなくけいちゃんはさみしそうでした。そう、けいちゃんにはおともだちがいなかったのです。

8、それからなんにちかたつたあるひ、けいちゃんがくるしんでいるのをたいちゃんがみつめました。

けいちゃんはつりばりにかかっていたのです。

9、「けいちゃん、だいじょうぶ？」「くるしい。くるしいわ」どんだんとけいちゃんはうえにあがっていきます。「はやく、たすけなきや」たいちゃんはみんなと、いとをきろうとがんばっています。

10、みんなでひっぱりはじめてからすこしたつたとき、「プッン」といのがきました。「バンザ——イ、バンザ——イ」けいちゃんはたすかったのです。

みんなおよろこびです。

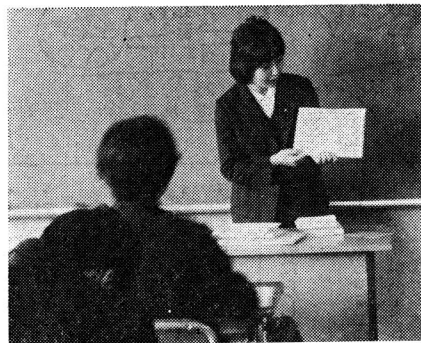
11、けいちゃんは、じぶんにはともだちがいな、ひとりぼっちだとおもっていたのがまちがいだつたことに気づきました。
このあとけいちゃんは、たいちゃんたちとなかよくあそべるいいおともだちになったそうです。
おわり

四、作品発表会

ミニ絵本は全員が作ってみる。作品が出揃ったら、自作の絵本の発表会をする、楽しい雰囲気教室にみなざる。それぞれが苦労して作り上げただけに友達作品には特に興味が湧くのであろう。最後に、「絵本を読み聞かせる意義は何なのだろうか」と質問してみる。夢を育てる、想像力を育てる、ことばを覚えさせる、精神が豊かになる、知能が発達する、道徳性が育つ、などの答が出される

のだが、「それらはみんな正しいのですが、もうひとつ大切な要点があります」と話し、今のこの教室の楽しい雰囲気は、絵本を仲立ちとして読み手と聞き手の間にテレビとは異なるコミュニケーションがなされていることに気付かせる。これこそ大切な人間関係で、幼児たちもこの人間関係を通して信頼感が育つてゆくのだと結ぶ。

(武蔵野市立第四中学校)



新しい家庭科を創るために ☆☆☆ 高等学校では

「住まい手」として 住生活をどう創るか

福島 澄香

新しい出逢いから学んで

今年御殿場のWe夏のフォーラムに参加して「一人暮らしの会」の神崎房子さんと親しくお話することができた。神崎さんとは昨年の江の島夏のフォーラムでもお目にかかっているから、今年は二度目の出逢いではある。

「新しい家庭科で若い人たちに住教育を、きちんとやってほしいおもて、この会に参加した」。家庭科の先生よ、しっかりとくなくはれ」という意味の熱いハツパをかけられたことが、昨年の夏以来ずっと気になっていた。神崎さんが指摘された通り、確かに私が担当している三年生の「家庭一般」四単位の授業の中には住まいの問題が欠落している。

一応授業計画の中には「健康で安全、文化的な住まい」という視点は入っている。しかし「住まいは人間を育て、文化を創る生活の器」であり、「人間の生命やその

再生産の場所」として考え、日本の住まいのひどい現状を、人権の問題としてきちんと取り上げていなかった。私自身、日頃住まいへの不満を持ち「こんな生活は、文化的とは、とても言えないわネ」と言いつつ、家でゆつくり生活する余裕のない、せわしい日常生活を反映して、住まいはネグラ程度の浅い認識しかなかったように思う。

生徒も私も、住まいの狭さ、住居環境の悪さにうんざりしているのだが、金のかかることではあるし、もつとひどい条件で生活している人もあり、生活格差の中で共通な問題にしにくいような思いが強かった。

さらにEC会議で、英国人から「働き蜂」の日本人は「兔小屋」に住んでいて自動車を売りまくり、ECの人たちの生活を圧迫していると聞けば、なるほどその通りだと思っても、ECのどんな住宅事情と比較して「兔小屋」なのか具体的なことになる、はつきりしない。

そこで神崎さんに色々教えていただいたのである。お別れしてからも最近発足した日本住宅会議編の『すまいと人権』という本を送っていただいたり、色々な文献を紹介して下さった(表1)。

日本住宅会議は従来のように建築家だけの集りではなく、法律家・福祉・医学・教育・社会・経済などの研究者と住宅運動にかかわる人、教師、自治体職員、保健婦、一般市民たちが参加して、住まいの問題を色々な角度から基本的な人権の問題としてトータルに考え、「住まい手」の側から住宅政策を提言していこうとしておられる。また今年の『We』二・三月号でも「住むということ」という特集をしている。

表 1

書 名	著者など	出版社
これからの日本の住宅 (第1回研究会の記録)	日本住宅会議編	ドメス出版
住教育(未来へのかけ橋)	住環境教育研究会編	ドメス出版
日本の住宅革命(ウサギ小 屋からの脱出)	早川和男	東洋経済新報社
住宅貧乏物語	早川和男	岩波新書77
新・日本住宅物語	早川和男	朝日選書255
住宅政策の提言(住宅政策 研究1)	下山瑛二 水本浩 早川和男 和田八束	ドメス出版
とびらの外も私たちの住ま い	嵐山ロイヤルハイツイ ・マナー編集委員 会	学芸出版社
福祉一問われる原点	一番ヶ瀬康子	創元新書44
昭和58年住宅統計調査報告	全国版、都道府県別 版	総理府統計局
日本のすまい I, II, III	西山卯三	勁草書房
住居学ノート	西山卯三 他	勁草書房
住生活学	扇田 信	朝倉書店
くらしのための住居学	渡辺光雄 他	学術図書出版
住まいを見直す	西山卯三 他	大月書店
住教育——未来へのかけ橋	田中恒子 他	ドメス出版
新しい住生活	田中恒子 他	連合出版
現代住居論	住田昌二 他	光生館
昭和58年住宅需要実態調査 報告		日本住宅協会
住宅会議双書 1,2,3, (今後とも続行)		ドメス出版

これらに触発された私は、とにかく生徒と一緒に外国の事情と比較しながら日本の住まいと環境の現状を、基本的、人権の視点から考え直し、住まい手として「住生活を身近に、どう創っていったらよいか」というテーマに取り組むことにした。

心地よい住まいの広さ

自分の住まいについて満足している生徒は一人もいなかった(建設省の「住宅需要実態調査」でも満足している人は19%に過ぎな

い)。生徒は「わが家は狭く部屋数が少ないので自分の部屋がない」「台所が狭く隣の風呂場を使うと夏は暑くていられない」「心地良い住まいの広さは、どの位か知りたい」と言う。

住環境教育研究会編『住教育——未来へのかけ橋』(ドメス出版)によると、建設省は国民に保障すべき「居住水準」を「最低居住水準」と「平均居住水準」の二段階に分けている。その内容をモデル化したものを(表2)に示す。建設省は来年度までに、すべての国民が「最低居住水準」を満たし、少なくとも半数の国民が「平均居住水準」に到達できることを政策目標にしている。しかし現状は、住宅に住む世帯三千万のうち約25%の人びとは「最低居住水準」にも達していない。「平均水準」に達していない世帯は約60%の千八百万世帯である。

たとえば家族四人の「最低居住水準」三DKは、居間6・6・4.5と3畳のDK、「平均居住水準」は三LDK。

「居間7・7・7・5と4.5畳のDK、4畳分の板廊下——

これ私の家(家族四人)の間取りだけど、押入れのない5畳にいる娘は小さい机と本棚でふとんがやっと敷ける空間しか残らない。大きい地震が来たら、荷物の下敷になっちゃう狭さなの。」「ぜいたく言うなよ。俺なんか押入れに寝てるんだぞ」と言われてひるむ。

でも表3をみて「日本人は兎小屋に住んでいる」といったイギリスの住宅の広さと日本のと比較してほしい。日本の三室は二DK。イギリスの一寝室は一LDKである。日本の公営・公団などの賃借住宅は二DKが半分と狭いが、イギリスの公共住宅の半分以上は三

表2 居住水準の考え方

(1) 最低居住水準

世帯人員	室構成	居住室面積	住戸専用面積	参考、住宅総面積 (共用部分等を含む)
1人	1K	7.5㎡ (4.5畳)	16㎡	(21㎡)
2人	1DK	17.5㎡ (10.5畳)	29㎡	(36㎡)
3人	2DK	25.0㎡ (15.0畳)	39㎡	(47㎡)
4人	3DK	32.5㎡ (19.5畳)	50㎡	(59㎡)
5人	3DK	37.5㎡ (22.5畳)	56㎡	(65㎡)
6人	4DK	45.0㎡ (27.0畳)	66㎡	(76㎡)
7人	5DK	52.5㎡ (31.5畳)	76㎡	(87㎡)

(2) 平均居住水準

世帯人員	室構成	居住室面積	住戸専用面積	参考、住宅総面積 (共用部分等を含む)
1人	1DK	17.5㎡ (10.5畳)	29㎡	(36㎡)
2人	1LDK	33.0㎡ (20.0畳)	50㎡	(60㎡)
3人	2LDK	43.5㎡ (26.5畳)	69㎡	(81㎡)
4人	3LDK	57.0㎡ (34.5畳)	86㎡	(100㎡)
5人	4LDK	64.5㎡ (39.0畳)	97㎡	(111㎡)
6人	4LDK	69.5㎡ (43.5畳)	107㎡	(122㎡)
7人	5LDK	79.5㎡ (48.0畳)	116㎡	(132㎡)

(注) 『日本の住宅問題』178頁, 179頁)

表3 日本とイギリスの住宅の種類と規模 (%)

		持ち家	公的借家	民間借家
日本	～2室	2.8	21.6	47.6
	3	7.9	52.2	29.5
	4	19.1	25.0	15.8
	5	23.2	1.0	4.4
	6～	47.1	0.2	2.5
イギリス	1寝室	2.0	12.8	22.1
	2	28.1	27.6	34.6
	3	57.5	56.6	35.3
	4	12.4	3.0	7.9

(注) 室の概念は次のとおり

日本: 規定なし。居住室であれば1畳でも1室。板の間部分が3畳以上のDKも1室と数える

イギリス: 1寝室住宅=12㎡以上の寝室+15㎡以上の居間+DK+浴室+便所

(出所) 総理府「住宅統計調査」1978年 イギリス環境省, General Household Survey, 1971

早川和男著『新・日本住宅物語』より

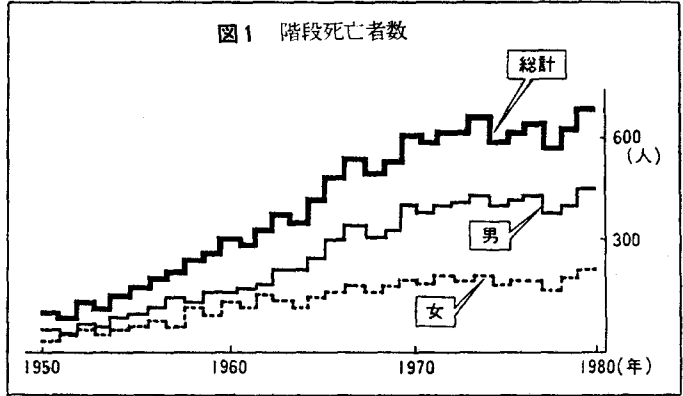
スでは室の広さは内法(うちのり)で測定する。

家庭内災害の負傷者百万人

家の狭さは家の中の災害をふやしている。『We』にも執筆された早川和男先生の『新・日本住宅物語』(朝日選書)によれば、家庭内災害は死亡者年六千人、一万人、負傷者は六〇万、百万人、自動車事故に次ぐ大きさだ。ことに最近階段から落ちて頭を打ったり、足を骨折したりする事故が増え、年間六千人以上が死亡し(図1)、六千人以上がけがをしているという。生徒に聞くと階段のある家に住んだことのある生徒のほとんどは階段から落ちてけがをした経験者だった。「そそっかしいのは私だけじゃあなかったのネ」「うちへ泊りにくる友達はずっと階段から落ちて、どっかがすることになってるんだ。うちの階段急だから、なれないとあぶないんだよ」と物騒なことをいう。

スウェーデンの住宅建築基準は、「家庭内事故防止」という項目

図1 階段死亡者数



労働省産業安全研究所調べ

早川和男著『新・日本住宅物語』より

があり、階段から落下事故を防ぐために、子ども・老人がつかみやすい丸みをおびた手すりを必ずつけないことになっていく（日本では階段の両側に壁またはそれに代わるものがあれば手すりをつけなくてもよいことになっていく）。

乳幼児が窓から転落するのを防ぐために、窓も一気に開かず、開口部のすき間が必ず最大10cm以内で止まり、そこから先は乳幼児では開けることができないようにしなければならぬ。

冷蔵庫・洗濯機など、子どもが中に入ってしまうことが考えられる機器では、扉が子どもの力で中から開けられるような構造とすること。浴室・便所の扉は内側から開かなくなっても外側から開けら

れるように定められている。

スウェーデンでは、「住居はすべて身体障害者の住居に供しうるか、居住できるよう模様がえのできる設計でなければならない」と規定され、階段・通路・扉の幅と形、便所・浴室の広さ・平面などにきびしい規制がある。

「日本のように元気のいい大人のための設計ではなく、欧米では幼児・老人・妊婦・病弱者・身障者も安全に住むことができるような設計上の配慮がされているのネ」

「個人住宅への自治体の点検もきびしく、過密でないか、安全が守られているか、健康な生活条件が整っているか、社会保健婦（パリ）住宅監視員（イギリス）などが調べて、違反していると改善命令を出したり、お金がなければ金銭的な援助をする制度もあるそうヨ」

「ヘー、人権が守られているってわけだ」

陽の入る家がほしい

「近くの原っぱや畑・空地・緑がどんどんなくなっていく」家が狭い上に庭がないので隣りの家が迫ってくる四方家に囲まれているので、何時でも見られているようで落ち着けず、窓が開けられない」「陽があたらず昼間でも暗い」「ふとんも干せない」「風通しが悪く、じめじめと湿気が多い」「せめて隣りの家の影にならない程度の間隔がほしいヨ」「隣りの家が三階建ての家に建て直しちゃったので、全く日があたらなくなった。日照権の問題教えてヨ」「道幅が狭いの車が多くなって危険」「隣りに五階建てのマンションが建ったので、去年まで見えた火花が今年の夏は見えなくなった」

生徒の家は意外に独立家屋が多く（ $\frac{3}{4}$ ）、都市周辺のミニ開発が進

欧米では土地利用の仕方が厳密に決められていて、平屋の独立家屋だけ建てられる地区、二階建てのテラスハウス地区、五階建ての住宅アパート地区などにわけられており、日本のように平屋の隣りに二階建てや高層住宅が建つなどということは起こらない。

欧米では新しい開発や建築の申請が提出されると、自治体は市の広報・掲示・新聞・テレビなどをつうじて地域住民に知らせ、住民代表からなる地区評議会などの機関で審議し、同意を得てはじめて自治体は許可することができる。日本では日照権紛争が全国各地で社会問題化してから、ようやくマンションを建てる時、周辺住民の同意書がなければ建築を許可しないことになって、日照権紛争が少なくなったと言われている。しかし昨年の春、建設省は、住民の同意は必要ないと言いだして問題になっている。

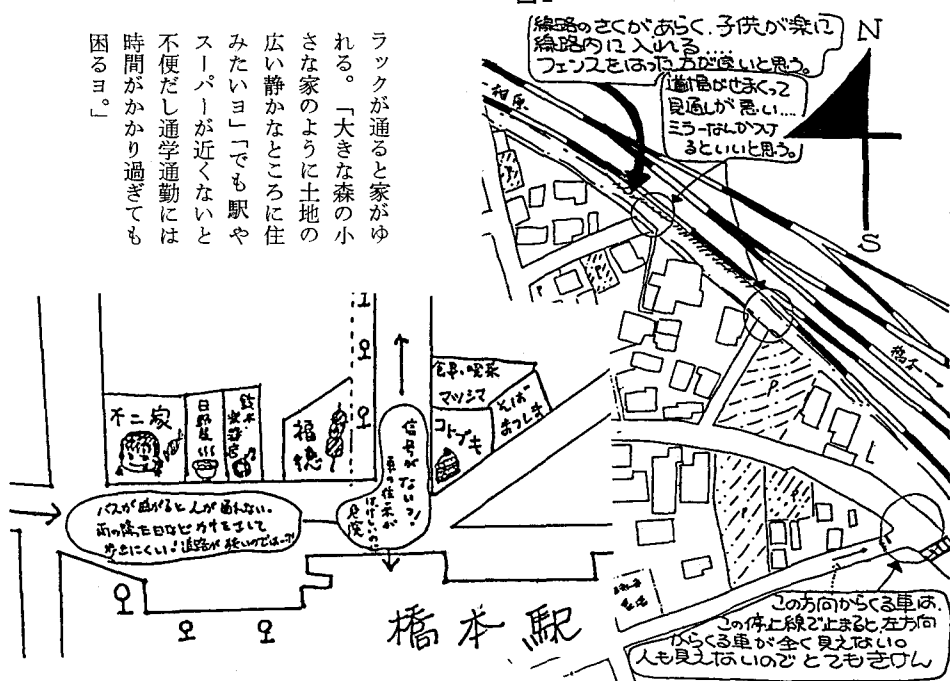
住宅地を開発したり、建築を許可するさいに、欧米のように地域住民が「住まい手」として計画内容を検討し、地域の住居環境を悪くしないよう積極的に発言して行くことは、日照権の問題ばかりでなく、崖崩れ、風水害などの安全対策上からも大切なことだと言われている。

静かな家に住みたい

「隣りから電話・テレビがうるさいと怒られた。隣りのテレビや電話だってうるさいのに」「一度でいいからステレオのボリュームいっぱいにして聞いてみたいヨ」「社宅で大きい声を出す」と親が怒る。兄弟げんかもできない」。

隣の店のカラオケ、厚木基地の飛行機、工場の音、車の音、ト

图 2



生徒が提起した研究テーマ

①都会で周りに緑と公園など広い空間を残しながら静かな落ち着いた生活をするには、どんな町づくりをしたらよいか。色々な実践例を知りたい。外国の例も

②集合住宅の快適な住まい方と管理の方法

③隣り近所の騒音や日照権のトラブルはどう解決したらよいか

④東京で一億円以上もする大きな家が、ロンドンの郊外で二千万円で買えるというが、どうして日本の土地や家は高いのか。イギリスなどの土地・住宅政策はどうなっているのか

⑤「平均居住水準」の家を買うにはどの位の金額が必要か

⑥家を借りるに必要なお金と手続きについて

「男女平等教育……」の

中嶋里美さん

ひと

いつも石けん、タオルを携帯して、わずかの空き時間に、道で見つけた銭湯にとびこむと聞いていた方。この頃はご自宅で入浴なさるそうです。高校三年担任の英語の先生。「小学一、二年の頃から『小学生新聞』に投書したり、思いを外に出すことが好きでしたね。」

⑦住宅ローンが途中で払えなくなったら、どんな救済が得られるか。欧米との比較

⑧居住条件は子どもの成長にどんな影響を与えるか

⑨橋本駅（学校前の駅）の自転車置場の実態調査

⑩自分の部屋を広く使う方法について、など

生徒たちが提起したこれらの問題について彼らは「住み手」としてこれからどんな風に学んで行くのか楽しみである。

以上は文化祭に売る手造りのマドレーヌを焼きながら、学校の周辺を手分けして、地図を片手にグループで「幼児・老人・身障者も安心して歩ける町にするために危険な箇所を調べ、対策を考えるマップ作り」（図2）。校外の実習を含めて六時間ほどの未完の授業報告である。

（神奈川県立相原高等学校）

初めの職場が男女不平等だったので、おかしいことがあれば変えていこうと、誰に教わるわけでもなく、自然にやってきたの」。

男女平等係をつくられたそうですね。

「他のところにはないでしょうね、もう三年目になります。一九八〇年の日教組の全国教研の女子教育部会に出て、離婚、父子家庭、留学、妻の出産・病氣など、つまり健康な女が傍にいない時の男に大きな問題がおこっていると聞いて、それまで女が差別されているとだけ意識していたんだけど、男にも平等教育が必要だと思って」。

現在「行動を起こす会」「家庭科の男女共修をすすめる会」「Weの会」で活躍。「We埼玉の会」は、おまんじゅうづくり、ハ

イキング、七宝焼などプラスαつき。

「みんなですごくこうしようって決まっちゃうんですよ。楽しく持ち味を出し合ってるね」。

ご家族を紹介して下さい。

「籍は一緒じゃないけど、通称アッチャン。この間大ゲンカしてね。家事は私以上にやるし、私の友達にもサービスしてくれるし、問題はないんだけど、彼の言い分は、家で私とつきあいたい。私はもっと運動に加わってよとなるの」。

ケンカの結末は彼がWeのフォーラムにも参加しようということになったのよ」と声のトーンが高くなり、にこやかなお顔。新しい生き方を模索中とのこと、十年、二十年先を楽しみに待っております。

（中野敬子）

教育学部における家政学・家庭科教育

壁谷澤 万里子

カルチャー・ショック

この四月に私は十六年間勤めたカトリック系私立短大から国立大学教員養成学部へ仕事を転じた。家政学や家庭科教育に関係していることでは変わらないのだが、学校の性格や機構、その規模が大きく異なり、学生の質も異なるので一種のカルチャー・ショックを経験し、この半年間はすべて戸惑うことばかりであった。前任校と現在の学校はある意味において両極にあるように思われる。

女性はいノリテイ

この福島大学教育学部の教官数は現在百三十三名で、うち女性性は十一名だからほぼ八%である。前任校は学長が女性であり、しかも長い間日本語を話さないカナダ人であった。教員の過半数が女だったから、それに比べ雰囲気が大分違う。大半が男であってみれば女は男のやり方に合わせざるを得な

い。男社会の真只中でいろいろ学ぶことの多い毎日である。現在、種々論議されている教育上の諸問題に教員養成のあり方が全く無関係とはいえないであろう。したがって未来の先生を養成する大学の責任はまことに重いといえる。家庭科教育の向上はまず、家庭科教師の資質や人間性にかかっているのだからこうした場を与えられたことをとても幸いに思っている。非力ながら努力してよい学生を送り出したいと考えているところである。

教官定数とカリキュラム

しかし、中に入ってみて色々な壁のあることが分かった。そのひとつは、教員養成学部の教員の定員数の少ないことである。本学の中学校教員養成課程家庭科の募集定員は八名であるが、それに対し教官の定員は八名（うち、現在一名欠員）で、小学校課程も担当するため一人で関連科目をいくつも担当しなければならない。専門性を尊重するならば無理ということになる。大学の規模にもよるが、名簿を見ると最低四人で運営されている家庭科もある。家政学系の大学では考えられないことである。したがって現在のスタッフの専門を中心にカリキュラムを組み、専任のいない科目は非常勤講師をあてる。集中講義となれば履修上の問題もなしといえない。実験実習科目に助手・副手がいないことも厳しい条件である。

カリキュラムについては十分な知識をまだ持っていないので具体的なデータを示すことはできないが、免許法の制約を受けており、大学の家政学部と比べると家政の専門科目について格差があり、科目も単位数も少ない。専門科目の能力、とくに技術面で問題はない

のだろうか。限られた時間でのその内容や方法は研究が必要になると思われる。さきに述べた教官の定員増は教大協二部会でも議題に上っており、例えば「住居」とか「家族関係」の専任教官をおくことが要望されている。結局、教員養成学部は免許法の枠によってカリキュラムが組まれるから、望ましいカリキュラムのためには免許法や指導要領の改正方向が重要である。このことから二部会では免許法特別委員会を設け、アンケート調査により各大学の意向を探り研究を続けている。家政学の変化とともに家庭科教育もひとつの転機を迎えているのではないだろうか。

去る九月七日・八日に札幌で行われた日本教育大学協会第二部会第三十一回家庭科部門総会では、分科会の一つに「カリキュラムにおける総合化」の問題が取り上げられ、二つの報告がなされた。このテーマは数年来研究され、今後も継続するという。生活把握における総合化、教育としての総合化は家庭科教育の大きなテーマである。各大学によって総合科目の位置づけ、名称、内容、方法は多様であるが、家政学や生活の総合的理解のためにその効果が注目される。本学では、小学校課程の生活系学生の必修に「生活概論」（一年次二単位、講義及び演習）という総合科目をおいているが、まだ研究不十分で担当教官間の継続的研究が必要と考えている。

教官の審査基準

教官定数の限られていることに加えて、教官採用及び昇格の審査基準は具体的に明文化されているが、第一に業績主義であるから、学問的履歴や論文数が重要な要件となる。これに比べて教育的業績や人物のウエイトは小さい。したがって公募により家政学畑以外の

人を採用する機会がふえている。専門性の高い教育は大いに望ましいが、家政学についての理念が乏しく家庭科教育の認識が低い場合には内部の協力態勢が得られず問題を生じる。他領域の人に共通意識を持ってもらい態勢づくりをすることが家政学プロパーの者の課題らしい。日本の知育偏重教育と人事の審査基準はどこかでつながっているように思える。

学生のイメージ

大学の主役は学生たちである。キャンパスには若い学生が溢れて活気に満ちている。女子学生の中にいる時はそれほど感じなかった自分の年齢を、ここに来て改めて感じさせられている。印象として学生は礼儀正しく、まじめで感じがよい。私が教室で接する学生は今まではせいぜい十五人とか二十人前後の少数だから全体像は掴みにくいが、素直で飾り気がなく、ファッションとも縁遠いのは、教員志望で、地方都市のしかも人里離れた校舎のせいだろうか。大学紛争のころの騒ぎは今は見られず、立看板少々、昼休みというと始まる演説が気になる程度である。ここに来て一番うれしいのは授業態度が熱心で、私語をせず静かにきいてくれることである。授業に反応があるので講義が楽しい。私の分担する家庭科教育法や教材研究についてはまだ出番が少ないので、ここでは家族関係の授業を通してみた学生の印象を述べてみよう。

家族関係学演習（小学校課程専門科目）の授業で、家族構成の機能について講義したあと、「我が人となりし家庭」という題で、自分の家族について自由に書いてもらった。二十人中拮大家族が十一人、核家族九人で、祖父母と同居で育った者が予想以上に多かった

（これは私が文中から家族型を判断したのでどの時点ときめたわけではない）。祖父母に愛されて育ち、自分も将来母や祖父母と同居したいと考えたり、親類とのつき合いを肯定的に考えている学生が大変多い。ある学生は「私の家族は典型的な核家族で祖父母とは一度も一緒に住んでいない」といいつつも、「私は長男ということなので家を継承するため、福島県の教員になるつもりです」と書いて将来は拡大家族を形成するだろうと述べていた。かなりの学生が伝統的な家観念を持つことが読み取れた。性役割の講義に進んだとき、「女性の就業と性役割」について約四人ずつの小グループを作り、自由にディスカッションをさせてみた。このクラスは男女がほぼ同数である。Aグループは男女半数ずつで、女子の方から「実際は無理かもしれないが専業主婦になりたい」「子の出産までは働くかもしれないが子どもが生まれたら子どもの教育のために専業主婦になりたい」、男子は「なつてほしい」で伝統的・古風な考えとして意見が一致した。Bグループも全員が子育て期に一人やめる再就職型、Cグループは、「子どもが生まれたらやめる」「子育てをしなから仕事継続」と二つに分かれている。夫の家事分担にはすべての班が必要性を認めており、「分担は夫対妻Ⅱ四対六ぐらいでやってみたらどうだろう」などいかにも若者らしい具体的な考えを出している。Dグループは、家事分担は、「夫婦同等」が二人、「主として妻」が二人で、夫婦同等組は、固定観念（夫は仕事・女は家事）は捨てるべきを主張しつつも、「しかし簡単に捨てられない」とし、現在、妻も職業をもつ場合が多くなっているが、「夫婦の型に関係してくるのでは」「妻が職をもつと家事が行き届かなくなる」「夫婦の型、生活の仕方によって一番良い方向にもっていくようにする」「話し

合いが大切」「家事分担とはお互いにカバーしあうこと」→家事がどういうものかを理解しなくてはできない、と話が深められた。「家事は大切な仕事である。家事に対する意識をもっと高めるべき。押しつけられてやるものではなく楽しいものにする。女性の意識が低いのでは（家事をバカにして外に出て働きたがる）」など中々興味あるコメントが出された（以上は学生の記録による表現をそのまま用いた）。

このように学生の実態は農村をバックにした地域性や社会通念がかなり明らかで、家庭科教育の方向づけをするうえで参考になる。教員養成という職業教育のコースで専業主婦志向がかなり強いのは全く意外であった。しかし、拡大家族の多いことから当然かもしれない。中高の家庭科男女共修についても、中学校課程の家庭科専攻生はわりなく受け入れているが、小学校課程の学生は賛成しかねる考えの者が多かった。したがって、これから小学校の教材研究を担当する私としては、先輩の先生方の実践例を参考にさせて戴きながら概念形成を試みたいと思っている。

二部会に出席して

さきに述べた二部会に初めて出席の機会を得たのでその一切を報告し、感想を述べることにする。二部会というのは国立大学の教員養成学部の教員の団体で、共通する問題点について調査研究や報告を行い、行政上の提案や陳情をしている。私には今までの状況がよく分からないので十分理解できない部分も多かったが、行政上・教育上の問題点の所在を教えられ有益であった。この会は三十年の歴史を持ち、今年のテーマは「家庭科教員養成の課題とその対応」で

参加者は約百名である。シンポジウムのテーマは「カリキュラム改善についての実施上の課題と対応」で、分科会は第一分科会が前述の「カリキュラムにおける総合化の実施と方法、その結果」、第二が「小学校教員養成課程教科専門科目と教材研究の教育内容・方法」、第三が「教育の今日的動向と家庭科のあり方」である。第三分科会のテーマは家庭科の男女共修が中心で、総会の中では緊急対策特別委員会からも同一問題の報告がなされ、討議がされた。第三分科会に参加しなかったのにくわしく報告できないのが残念である。

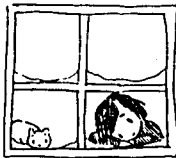
高校家庭一般の履修について会員を対象に行ったアンケートによると、回答数三百二十二人のうち「男女必修案」は六四・〇%、現行の「女子必修案」は一四・六%にすぎない。「女子必修および男女選択案」は八・七%でこれはさらに少ない。男女必修案の中で履修単位数について無記入のものが四八・八%あり、これは男女必修案の七六・二%にあたる。緊急対策委員会のコメントによれば、男女必修案に回答したものの大半は履修単位数より、男女必修そのものに力点があったと考えられるとしている。男女選択案は五・九%、男女選択必修案は五・六%で支持が少ないが、女子必修を主体とする案が約四分の一弱あり、男女必修が過半数ではあるが意見が微妙に分かれている。そのためか、委員長の熱意にみちた報告に対して盛り上がりがいまいとつ足りないように思われた。

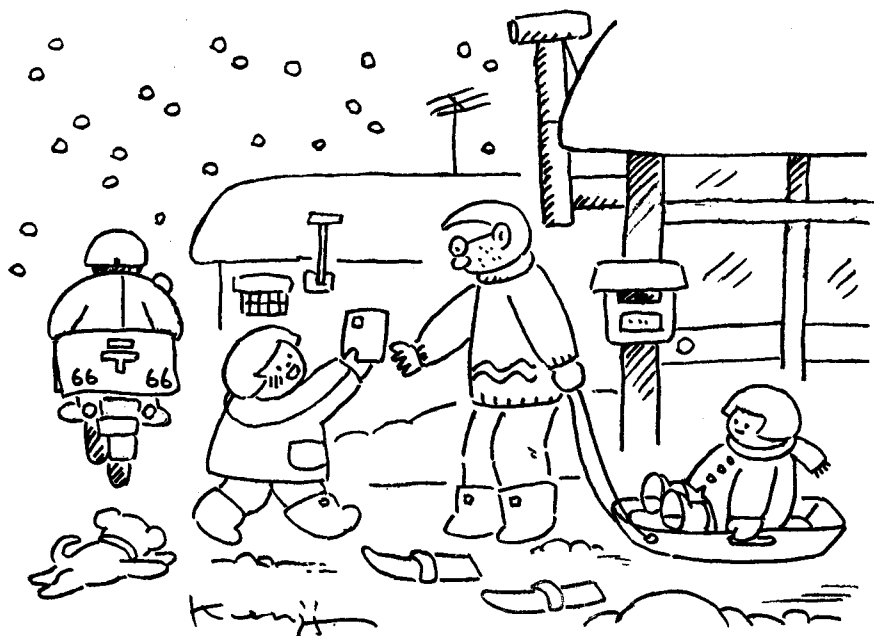
さて、ここで私学と国立の二つを経験した立場から感想を述べたい。家政学・家庭科教育に関する学会・研究会は数多くあり、大学の種別によるものも公立・私立それぞれにある。それらの横の連繋は十分なされていないように思う。学会・研究会は入会すれば情報

が得られるが、国立・私立の相互の情報交流も必要である。例えば、今回のような「高校の家庭一般男女共修」問題に素早く、強力に対応してゆくために相互協力が望まれる。行政的な面だけでなく家庭科教育の研究蓄積という点で効率のよい情報の収集・利用方法が考えられねばならない。

この夏、オスロで開かれた第十五回国際家政学会議に出席したとき、私の参加した少人数の分科会でテーマについて「日本の家政学ではどう考えているのか」コメントを求められた。しかし私たちは国際レベルでの日本の問題点や考えなどを話し合いも、まとめもしないでしまったのでまごついてしまった。どの学校や機関に所属しているかが、あるいはいまいが、学問と教育の立場からみる家政学には変わりがなく、壁を取り払わなければ折角の高い水準の日本の家庭科も外に対しては弱くなってしまう。世論の支持を得なければ家庭科共修も進んでいかないのである。

(かべやざわ まりこ・福島大学)





便り

火の用心
やけどと風邪に
気をつけよ
いつもの末尾の
兄貴の便り

視 点

〈二重性としての学校〉

長谷川 孝



・学校は、こおりのビルディングだ ・つうしんぼは、学校のありじごくだ ・教科書は、ストレスのたまり物だ！ ・学校は、けいむしよだ ・つうしんぼは、そこなしぬまだ ・先生は、子どもをたべるおにだ ・せいせきは、せんそうだ ・きょうかしよは、戦争をよぶ ・学校は、人間を食べるミキサー車だ ・学校は、戦争のようだ ・学校は、人を食べるそうじきだ ・学校は、くものすだ ・学校は、ぼくをひきつけるブラックホールだ ・学校は、人のつたらありじごく ・学校は、人間ホイホイだ

すいこまれる のみこまれる
からめとられる くわれる
自分が自分でなくされていく
自分の顔が学校の顔型に形成されていく
自分が自分を見失ってしまいそう
自分を自分がコントロールできない

—— そんな不安が、アザヤカに
掬いとられている
小学校四年生たちの学校メタファ
するどい、ことば*。

《学校は、子どもたちの生きられない場所になった》と、
学校の状況を射ぬいた発言があつた*。
ほんとに同感だった
だけどね、と、ちよつとちがう見方もしたい
《学校はもともと、「子どもたちの生きる場」
ではない。はじめから「生きられない」場と
してあつたのだ》と。

それでもみんなが生きてきたのは
その学校のなかに
制度としてそそり立つ学校のなかに
自らの「生きる」場としての学校を
つくり出してきていたからにちがいない
二重性としての学校。

生活空間としての学校を
つくり出していくちからを
子どもたちはもっていた
教師たちもまた
その協働者たりえていた
「教えてやる」まえに、まず
生活をともにすることが
ありえていたのかもしれない。
その「生きる」場の学校と
その空間をつくるちからと
教師たちという協働者とを失って
子どもたちは、生き苦しくなつて
学校は「子どもたちの生きられない場所」
となつてきている、とおもうのです。

ひとつひとつの教室に
それぞれの生活のにおいが
あつていいのです
けつこう、そういう教室に出えます
でも、「教育」印の消臭剤が

生活のにおいを消しきったあとの
サワヤカ・トイレのような
そんな教室がふえてきていて。

・生徒は記憶装置の付いている帽子をかぶって
いて印刷されたことを記憶するだけ
・勉強のときは、パソコンでやり、先生はい
ない
・ロボットが先生になって授業を教え
てくれる。わからないところはパソコンが教
えてくれる

・授業中、遊んでいると机から、手が出てき
てきちんとやらせる。しせいが悪ければせな
かをぶつという机を考えました。もつとすこ
いロボットができるかもしれない。こんな学
校で先生をしてみたいな
・くつ箱でくつが
曲がついていると手が出てそろえてくれる。く
つ箱調べは全員○
・上ばきを、かくす人
は、ロボットが注意すればいい
・ろうか
で遊んだり走ったりしたら、ロボットの手が出
て、すぐやめさせる
・校門は八時三十分
になると、自動的に閉まる。ちこくすると、ロ
ボットの声でしかられる

四年生の子たちがつづった
未来の学校の情景

技術文明社会の現在のすがたと

ロボット化した教師たちの行動のようすと
子どもたちが強いられている学校社会が
なんとすなおに反映されていることが
自分たちに不安を強いる学校の状況を
肯定形で告発している。

——やっぱり、それでも

ロボット先生じゃ、いやだもの
ロボットに叱られるなんて、さびしい
だけど、だげどなぜだろう
子どもたちは、教師を
人間としての教師を求めている！
もうあきらめちゃったのか。

《2時間じゅぎょうで、月よう日と水よう日
が、学校にきて、火、木、金、土よう日は、
学校にこなくていい》《ぼくは、休み時間を
いつもの、二倍にすればいいです》

《校庭は木や草がいっぱいしげっていて、ウ
サギがとびはねていたり、鳥が鳴いている。
そしてきれいな花が所々にさいている》《未
来の学校は、動物がたくさんいて、休み時間
は、動物と遊べる楽しい学校だといいな》
《遊びの倉庫があつてその中に、おもしろい
遊びのどう具がある学校がいい》
こんなことは、数少ないのです

ほつとすることばが、なぜ
咲きほこらなかつたのでしょう
そう、現実をとてても正確に
映し出しているからに、ちがいません。

「学校は子どもたちのもの」というけれど
ほんとのところは、おとなたちが
子どもたちを「教育してやる」ために
子どもたちのためのものといつてつくつた
おとなたちのものなのだ

学校で「加工」されるために子らはいる
学校は「教えてやる」ための空間
だから、教育の主人公はおとなたち
なかなかずく、教育専門家たち

そして、学校の主人公は教師たちなのだ。
そんな学校という制度だから
やっぱり、クモの巣だ、人間ホイホイだ
でもさ、

《まなぶ》ものの生活と協働のなかでこそ
生きものとしての学校は発生する

——そういうもので学校はあつてほしい。

* 横浜・日吉南小学校四年三組（一九八四年度）
** 林竹二さんの発言

*** 東京・中野区内の小学校の文集から（一九八
三年度）
（教育評論家）

現場から

「影を認める」その2

児玉 すみ子

影とは

「この子は、自分の影に気づいていない。否、気づきたくないのだ」。言葉の洪水を浴びせかけてくるMに接していて、私が直観的に思ったのは、このことであつた。

ユングは、「影」という語を、次のような意味で使っている。

個人的、並びに、普遍的な理想の反対を表すもの、個人の生活史の中で、個人的な理由から抑圧されねばならなかつたイメージ・フアンタジー・欲動・体験などの総称。

影は、又、自我の理想に破壊的に働きかけるが故に、認めることは不快であり、苦痛であること。

しかし、理想というものは、偽瞞的・一面的なものを含んでおり、理想の実現にあたっては、影を認め、それを統合することが、一つの大きな課題となること。

日影に育つ植物は、丈ばかり高く、ひ弱だが、人間の場合は、日向にばかり強制されて育つならば、却って、たくましさや欠き、ある時期が来るとダウンしてしまうことを、Mのケースは暗示している。「よい子」であり続けるために排除した、と思っていたものが、実は、自分自身の暗闇の中に追いやられ、貯えられていて、その子の自我の成長に、ある時、思わぬしっぺ返しを加えることが、思い

知らされるケースである。

「……すべし」「……すべからず」

Mの父親は、ある宗教団体の要職にある人で、若いころから苦労して鍛え上げた、刻苦勉励型の人である。Mの家は、代々、この宗教の伝道を生業としてきた。

こうした家柄に、長男として育つたMが、生まれてこのかた、「……すべし」「……すべからず」に適合すべく強制されてきたことは、想像するに難くない。

確かに、教育とは、「あるべき人間の姿」という価値観に従って、「……すべし」「……すべからず」という統制・禁止・抑圧を迫るものと思われている。

しかし、ある一つの価値観に疑問を投げかけたり、異議を唱えたりする自由は、必要である。又、子供たちが、子供の世界にだけ通用する価値観をもつことも保障されねばならないし、いろいろな価値観を抱く異なった大人たちに出会って、影響を受けたり、取捨選択しながら、自分自身の価値観を育て上げていく過程が、充分尊重されねばならない。しかも、更に重要なことは、自分の価値観に固執することで、現実認識が歪められてはならないのである。

ところが、Mの場合は、「……すべし」「……すべからず」が、彼の一手一投足を縛り、彼の言葉によれば、「意識して行動させ」、

自然に振舞えなくさせていたのである。

「父と子」

しかも、Mにとって、児童期まで、父は、絶対であった。「偉い父」は、彼の心の拠り所であった。父も又、長く子宝に恵まれぬ後に授かったMを、愛し、期待もかけ、支配下に置きもしたろう。

父の期待通りの人間になろうとする彼の一途な思いは、小学校・中学校の前半ごろまでは彼を光輝く存在にしており、教師たちは、称賛を浴びせ、級友たちも、多少の違和感ももっていたにせよ、一目置いていたであろう。

しかし、高校受験の挫折経験の前後から、日向の上昇坂道一本の彼の歩みに、大きなものが生じ始めた。自分の影を認めざるを得ない土壇場で、彼の身体の故障は、彼をかばって、言い訳をたくさん作ってくれはしたが、もはや、今までの生き方に固執しては、一歩も踏み出せない現実には直面させられたのである。

それは、又、「男は強くあらねばならぬ」と説き続け、息子にひそむ影の部分、その弱さを絶対に認めようとしなかった父からの離脱を意味するのである。

「お父さんの言っていることじゃ、僕は生きていけないんだ！」という心の底からの叫びがほとぼしり出るまで、彼は、いかにもがいたことか。

そして、自分自身の支柱となる礎^{いしづえ}を創り始める仕事は、どんなに苦しいことであつたか。その過程に付き合つた私には、痛い程、感じられたのである。

体験に開かれる

私は、当時、未熟な援助者ではあつたが、この気持を、できるだ

け明確に、彼に伝えようとした。今、もがき、苦しみながら、強力な父からの独立をかちとうとしていた十六歳の青年の歩みこそ、真の強さを育て上げるものではないか。それ故の留年、それ故の挫折、は、決して彼の忌み嫌う弱さではない。

しかし、私は、その気持を、言葉のみで表そうとしなかった。彼は、私の一言、二言で、直ちに私の考えを読みとり、それを自分の中に採り入れ、観念の空回りに組み入れてしまうからである。

又、論じるだけで、すべてを洞察してしまふかにみえる彼に、彼が、真に体験して得た生の気持を深く味わうことの肝要さを身につけてもらいたかつたのである。

つたない私の力の範囲内で、目差しや、表情や、仕草、そして、「フン、フン」と肯くその一つ一つにも、私自身の、彼に対する敬愛の気持を伝えていった。

同時に、防衛の扉のすきまから現れ出る彼の本音^{ほんご}を、あるがままに受容していった。

父に対する攻撃と、父のことは触れたくないとするアンビバレントな気持の葛藤の嵐に私が平静に対していくうちに、彼は、自分の意志で判断し、行動する意欲をみせ、やがて、それに踏み出した。その体験を語る彼の言葉は、彼の全存在の重みのかかる言葉に変わっていた。

体験は、自分の内のさまざまな力動的な諸傾向を顕わにするけれども、「これが、自分なのだ」という確かさは、彼がこれまで味わつたことのない喜びを伴うものであつた。

Mは、自分の影法師を認め、自分の内に統合することに成功したのである。

参考文献『ユング全集』日本教文社

淡
い
夢

霞通信もこれで18回目になります。自宅の六畳の洋間に五年生の女の子たちと安房直子の『きつねの窓』を読むことから始めた私の教室も、そのあいだにずいぶんかわりました。

現在の教室は、「自宅の六畳の洋間」ではなく、私の母親が住む地つづきの裏の家の二階、タテ一間半ヨコ三間半の細ながい板じきの部屋で、四人がけのテーブル二つがタテに並べてあります。片側は天井までの書架が壁をなしていますから、ただでさえ細ながい部屋がますます細ながくみえます。

この部屋は、いまは九州に移った私の弟が手づくりのカヌーを製作するために二階の北側に鉄骨で支えて増築した奇妙な仕事部屋で、書架と反対側の壁の天井ちかくに一艘、天井からも一艘、計二艘のカヌーがいまなお吊り上げられたままになっていますし、私が両手を広げてもおおまるほどに翼を張った大きな鳥のかたちの風もまた（これも弟の手慰みになるものです）、壁にさがっています。入塾を希望しておとずれるはじめての母子は、玄関からすぐに狭い急な階段をあがり、左側の変則的な五畳ほどの洋間をとおり、さ

らにその奥に鉤^{かぎ}の手によこたわるこの部屋にはいると、一瞬、驚いたように立ちどまり、カヌーを見上げ、船底のような細長い部屋のなかをうかがいます。そして母親の多くは「変わったお部屋ですね」といい、子どもの多くは（特に元気のいい小学生は）、「ウワァ、おもしろそう」と歓声をあげます。迷路の先に思いがけずあらわれた魔法の部屋といった趣きのあるこの部屋の、このような偶然の効果も、私はひそかに喜んでいるのですが、窓からは単調な灰色の空しかみえず、まわりの家や近くの団地からも物音ひとつ聞こえない午前などに、カヌーと本の背が鈍く光り、紙と竹でできた鳥だけが黒い目をじっと見開いているこの部屋にひとり居ると（そしてペートーヴェンの弦楽四重奏をきいていたりすると）、私はくらくとめまいのようなものを感じ、その部屋がそのまま一艘の箱舟となって灰色の空に漂い出ていくような不思議な気持、まるで淡い夢をみているような気持になります。

部屋はこのように好もしくかわったのですが、肝腎のなかみのほうは、普通の学習塾とちがったものをと考えて国語教室としたにもかかわらず、「先生、数学も面倒みてもらえませんか」と親から頼まれ、「先生、英語教える気ない？」と子どもたちから言われたりすると、私は、こんな自分でも頼ってくれる人がいるのならと、自分のたてた原則にこだわるのがつまらないことに思われてきて、時間のゆるすかぎり希望に応えてきました。

が、そのように一度原則をくずすと、いまの受験体制下においては当然、「数学だけを教えてほしいのだが」という問い合わせが次々と来て、このままでは肝腎の国語が駆逐されてしまいかねない様相を呈しはじめたので、私はあわてて、「数学を教えてお金をいた

だくのも国語を教えてお金をいただくのもお金にかりはないのですからどうでもいいようなものですが、私にも少し考えがあつて国語中心の塾としてやれるところまでやってみようと思つていますので、いまのところは、国語をとっている生徒の中で希望があれば数学も教えるということにして、数学だけの方は勘弁してもらつています」と、とにかく歯止めをかけてきました。

しかし、そのように受けこたえをししながら私はいつも、電話口の向こうに、「そうですか——」としばらく考えこんでいるらしい見ず知らずの母親の気配を感じ、そうするともう、いま自分の言つたばかりのことを撤回してしまいたくなるような、そして、「わかりました。とにかく一度お子さんとおいでになつてみて下さい」と言つてしまいたくなるような、そんな気持ちにかられます。「小さな国語の教室を」という私の淡い夢など、なんだかずいぶんぜいたくなことのように思われてきてしまうのです。

ですから、ある日、すでに私の教室で国語と数学を受けている中学三年生の二人の男の子のお母さんが連れ立ってこられて、「小学校のときから、勉強だけが大事なのではない、人間性をなによりものばすことだと、こちらのTさんとも成績のよくないわが子にはらはらしながらなぐさめあつてきました。そして、それなりにのびのびと育つてくれてよかつたと思つていますが、中学三年生になつて親子ともどもはじめて受験というものに直面してみると、なかなかそうとばかりも言つておられず、お尻に火がついたような状態でお願ひにあがりました。先生もおいそがしそうですし、英語だけは他の塾へとも考えてみたのですが、なにせうちの子はご存知のような子で、他の塾ではどうもやつていけそうありませんので、

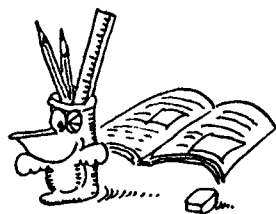
やつぱり先生におすがりするほかないとTさんとも相談の上こうしてあがりました。先生、英語をなんとかお願いできないでしょうか」と話されたとき、私は、とても時間がとれない、いままでもそういつて断つてきてしまつたしするから、とこたえてはみたものの、結局、あくる朝には、「それでは、日曜日の朝八時からということではよろしければ、やってみましょうか」と電話をかけることになつてしまふ——。

こうして現在私は、国語のほかに小学校六年生以上に数学を、中学三年生には英語まで教えるにいたり、当初の、「子どもから大人までを対象とした国語教室」という夢は、はやくも現実に浸蝕されはじめています。

が、しかし、私は、たとえば、「今日学校でやつた数学、ぜんぜんわかんない」と口をとがらせて教室にやつてきた中学一年生の女の子たちが、素人の私のどうということもないはずの説明をきいたあとで一斉に、「ああ、わかつた。そういうことだったのか」と小鳥のように叫び声をあげ、中学三年生の女の子が、「先生、私、はじめて自分だけで応用問題の式がたてられた」と、まるでそんな自分が自分で信じられないというようにしばしうつとりと自分のノートをながめているのをみたりすると、国語教室という俺のちっぽけな純粹など、そこらのだぶへ捨ててしまえ、そんな氣になつたりしてしまうのです。

(つづく)





＊ 学習の主人公たち ＊

いま、私はここにいる

野田 薫

昭和40	50	49	47	46	45	44	52	51
二月十三日、S県F市内のF助産院で誕生。身長50・5センチ体重3・7キロ。父方の祖父母と同居	父の再婚	九月、両親の協議離婚。母との別離 十月、M市の県営住宅に引越し、祖父母と再び同居	四月、市立小学校に入学 四月、G市の教員住宅に引越し、市立小学校の二年生に編入	市内の教員住宅に再び引越す 四月、市立小学校に入学	県内のS市に引越し、祖父母と別居	二月二十六日、弟N誕生	夏、弟を置いて二度の家出 秋、母がN氏と再婚	義妹M誕生
	58	56	55	54	53			
	四月、津田塾大学入学	三月、都立K高校卒業 四月、弟Nも東京に引取られる	四月、都立K高校入学	三月、A市立H中学校卒業 四月、A市立H中学校入学	四月二十七日、義妹M誕生 三月、A市立H中学校卒業	九月二十日、義妹S誕生 M市に義弟T誕生	五月、東京の母の許に引取られる A市立H中学校編入	

私のこれまでの十九年は父親との葛藤に明け暮れた。前半の十二期間は直接的に、後半の七年間は間接的に。

私が両親の離婚の真相を知ったのは中学一年の時だった。当時G市内の県立高校で英語教師をしていた父が、教え子と浮気した上、彼女の卒業後はM市の県営住宅に住まわせたという事実があった。毎晩のように帰宅が遅かったのも道理だ。ひとりの人間が二つの家庭を持っていたのだから。両親の離婚の原因は性格の不一致だとばかり思っていた私には、この事実はかなり衝撃的だった。彼らが暮らした同じ家で、二年半もの間生活したということも二重のショックだった。それに納得のいかないことに、父の再婚相手は彼女ではなく同僚の家庭科教師であった。その上彼女は、父が紹介した（彼の同僚）の数学教師と結婚したという。傍若無人の振舞いで、父は問題教師の烙印を押され、県内の高校をたらい回しにされたが、どこへ行っても長くはもたなかった。そのたびに引越し、転校しなければならなかった。住み慣れた土地、親しい友との別離等、時には辛いこともあったけれど、それが一体どれほどの苦しみになるのか。家族がバラバラになり敵対し合うことに

比べれば。

父は生来落ち着かない人で、休みの日でも家をあけることの方が多かった。珍しく家にいる時も書斎にひきこもりがちだった。瞬間湯沸かし器の典型のような人で、ささいなことでよく怒鳴りもした。私がいまだ感情を外に出さない子供らしくない子供だったのは、父に叱りどばされるきっかけを与えないためだった。普段は手のつけられないやんちゃ坊主の弟も、父の前では借りてきた猫だった。お天気で機嫌のいい時しか私たち姉弟を相手にしてくれなかった。

しかし、不思議なことに家庭では良き父親たり得なかった父も、学校では生徒たちにとって魅力ある教師（人物）だったようだ。文法一本やりで、話せない英語教師の多い中、実践的な授業をし、優等生・つっぱり生徒に分け隔てなく接し、クラブの顧問も一生懸命やるというので生徒たちに人気がある。顔が広くて就職口を世話してくれるというので父母からも一目置かれていた。

それでもあちこちの学校にとばされたというのは、校長や教頭をはじめとする年長の教師に対する余りにも横柄な態度からだだった。目立ちたがり屋で常に強烈に自己主張するタ

イプだったので、私は父と一緒に人前に出るのが恥ずかしかった。血のつながりがあるとはいえ、私には父のやることなすことが理解できなかった。

再婚の時もそうだった。私と弟が東京の母に会いに行つて帰つて来るなり、迎えの車の中で助手席の女性を紹介するという唐突さで、この日から私たちは家族ということになった。義母は、再婚で、しかも両親コブ付きの父との結婚を反対されて、貯金通帳まで取り上げられて着のまゝ父と結婚した。彼女も、幼い頃に母親が病死し、義母に育てられたと言っていた。彼女は当時まだ二十六歳という若さで、母親というより年の離れた姉といった感じだった。

私たち姉弟は父が再婚してからも、月に一度週末を利用して東京の母に会いに行くことをやめなかった。父が許してくれたからだ。いつだったか、父は、私と弟の面倒を見てくれる人が必要だと思つて再婚を決意したと言っていた。義母以外にも複数の女性に求婚したとも。一体全体、結婚というものを、家庭というものをどうとらえているのか。面倒さえ見てくれれば誰でも良かったのだろうか。私たちに必要だったのは、家政婦ではなくて

母親だったというのに。

私は義母と折り合いよくやっていくことができなかった。義妹Mの誕生によつて、私と義母はますます疎遠になった。祖父母は、女の子の私より男の子の弟の方がかわいいうだったし、私も、私と弟を産んだ島に過ぎないと母を軽んじる彼らを好ましく思わなかった。信頼できる大人の相談相手に恵まれず、四面楚歌のような状態に耐えられなくなった私は、ひと夏に二度までも家出した。この二度目の家出で現在の父（N氏）にもめぐり逢えた。混乱するので文章中では義父と記すが、私の父親は彼ひとりである。

義父は私と初めて会つた日に、母の再婚をどう思うかと尋ねた。心の奥底では「これでもう母と暮らす夢は断たれた」と絶望感に打ちひしがれていたが、努めて素気なく「お母さんのことは私には関係ないから」と答えた、喫茶店でのあの場面が今も忘れられない。正直なところ、母には幸福をつかむ権利があると思つたし、幸福であつて欲しかった。たとえ、母子離れ離れになろうと。

二度に及ぶ家出事件で私たち父子の距離は完全に遠のいた。そして秋、予想していた通り母はN氏と再婚した。それからの季節は文

字通り冬だった。母が再婚するまでは、いつかは共に暮らす日が来ると淡い期待を抱いていたから、苦勞を苦勞とも思わなかったが、母の再婚によって私は心の依り所を失ってしまった。

言い知れぬ空虚感をもて余しながら小学校の卒業式を迎えた。ただひとり私だけは父母が参加しなかった。父は仕事、義母は祖母に頼めばいいだろうに赤ん坊の世話だ。父母が形ばかり参列しようがしまいが、それ自体はどうでもいいことだった。帰り道、友達が皆母親と楽しそうにおしゃべりしながら歩いているのを、空っぽの心を抱いたまま後ろからただ眺めるだけなのが悲しかった。自分が場違いな人間のような気がしてどこかへ逃げ出したかった。自分のことしか考えている余裕がないのに、母の幸福のために犠牲になる悲劇の主人公を演じている自分自身に無性に腹を立てていた。そして、このままここで父や義母、祖父母と一緒に生活したら、心を引き裂かれたまま悶悶と一生のうちで最も大切な時期を過ごしてしまうのではないかと、将来に対するぼんやりとした不安を抱き始めた。

どんな環境であろうと、本人の強い意志とやる気さえあればとお叱りになる方もあるだ

ろうが、当時の私には家庭環境の占める比重が非常に大きかった。

中学入学後ほどなくして、私は人生の転機になったとも言える手紙を母から受け取った。「五月になったら東京に來なさい」という言葉を何度も何度も繰り返し読んだ。瞬時にはとても信じられなかった。熱い涙が流れた。ここに来て以来、泣くのはいつでも布団の中でだった。枕に顔を押し当て泣き、声を押し殺して。二年半の間、涙と言えば悔し涙か悲し涙だった。うれし涙というのはなんて透明で塩からくないのだろうか、そう思った。

弟は父の許に残った。経済的なことはもちろんのこと、ただひとりの男子だからという理由であることは容易に想像できた。弟も母と一緒に暮らしたいようだったが、父への遠慮からか、私のように家出という強行手段を取ってまで訴えるようなことはしなかった。

その弟も、義弟が産まれると体よく追い出された。私が引き取られる時は、男子は男親の手で、などと言っていたのに、てのひらを返したように引取って欲しいと泣きついてきた。引取ってくれなければどこかへ養子に出すと言いい、徐々にその内容は脅迫まがい

なものにエスカレートしていった。親の言うことをきかなくなったというのが理由だったが、そんなことでいちいち養子に出していたら、子供はひとりもいなくなるだろうし、あんなにも父を畏れていた弟が父のことをきかないはずがない。義母のいうことをきかなくなったのだ。それにしても、こんな支離滅裂な話があるだろうか。私はこの一件以来父を憎むようになった。

私は両親の離婚によって多くのことを学び、かつ多大な影響を受けた。まず、結婚というものに非常に懷疑になった。母が東京に引越す時、私は段ボール箱に詰め込まれた、父が母に宛てた恋文を垣間見た。母は段ボールごと燃やしてしまった。男女の別れなご日常茶飯の出来事かもしれないが、恋愛感情とはこんなにもろくてはかないものなのかと幼な心に思った。デンマークの女流作家スザンヌ・ブロッガーの説によると、もともと経済・社会的手段だった結婚に、恋愛というロマンチックな概念を持ち込んだのが（西欧の）家庭危機の遠因だという。結婚によって生涯続く情熱を維持するのは無理だし、情熱から出発して堅実な結婚・家庭を考えるこ

とも不可能だ。この矛盾から、西欧の人々は愛も家庭も失う羽目になった、という分析である。(昭和58・11・3朝日新聞より引用)。

女史の説は私にとってひとつの答えである。もっとも私は、彼女のように恋愛まで否定しようとは思わない。ただ、結婚に懷疑的になる以上どうしても恋愛に対してもさめた態度になりがちだ。結婚拒否症とでもいおうか、新しい時代に即した新しい人間結合は、結婚という形式にとらわれなくても模索し得るのではないかと考えている(昭和58・10・26朝日新聞を参考)。

私は多分、一生結婚しないだろう。子供も欲しいとは思わない。確かに、子供を母胎に宿し出産するのは女にしかできない。子供を生み育てることで人間的にも大きく成長できるだろう。しかし私は、親の子供に対する責任の重さを考えると、とても子供を持つ気にはなれない。親の教育、躾、思想、性格が、生まれた時には真白だった子供の心や才能を八割方彫刻して決定的なものにしてしまうからだ。子供は大いに苦労すべきであるが、不幸であるべきではない。このことは私が身をもって痛切に感じていることである。

私の母は韓国生まれの朝鮮人である。私が

この事実を初めて知ったのは小学四年生、九歳の時だった。昭和49年の終戦記念日に朴大統領狙撃事件が起こり、その後しばらくして母は私に一冊の本を与えた。それは『ユンボギの日記』というある朝鮮人の少年によって書かれた書物だった。母の生い立ちについても、一〇歳の時日本にきたこと、ちょうど朝鮮戦争の最中で来日後すぐにS市の收容所に入れられたこと、朝鮮学校卒業後M大学の夜間部で勉強し、昼間はK大使館で働いていたことなどを知った。当時は別に何の感動も衝撃もなかったが、最近になって、特に大学の国際関係学科で学ぶようになってから、ふたつの祖国を持つことに素直に喜びを感じている。私は混血児であって正確には日本人でもあり朝鮮人でもあるのだ。両国は歴史上常に緊張関係にあったが、私にとってはこのふたつの国が等しく原点なのだ。都合の良い時だけ日本人であったり朝鮮人であったりする事は決してしまいたいと思う。差別する側のおごりを反省し、差別される側の痛みを分かち合えるような寛大な心を持つていたい。

私はまだ、将来の青写真のようなものは何ひとつないが、企業の齒車になって何の生きがいも見出せないような就社だけは御免こう

むりたいと思っている。今のところ高校の社会科教師という職に魅力を感じている。学校も今や企業化が進んでいるが、授業を通して様々な問題提起をすることは可能だし、生徒に、思想を強制するのではなくて、何かを考え実践する契機を与えることもできる。教師も親と同様責任重大だが、親ほど決定的な影響は持たない。親は子供に価値観を押しつけ束縛しがちだが、教師は生徒に対して常に価値観を転換する機会を提供するだけである。少なくとも、私は、そんな教師になって、生徒たちにいろいろなことを考えさせることができたらどんなにか素晴らしいだろうと思う。

多くの大学生が理想だと思いつつ実行できずに妥協してしまうようなことを、私はあきらめずにぜひ実現したいと思う。

(のだから・津田塾大学生)

ユネスコと私

押切 郁

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」——ユネスコ憲章——

一九四五年、敗戦による廃墟と虚脱の中から、このユネスコ憲章に心打たれた人びとが、世界の恒久平和と人類共通の福祉実現を願ってユネスコ運動を全国各地で展開していきました。日本におけるユネスコ運動は、民間から起こったことに意義があります。一九四七年、世界で最初の民間ユネスコ団体が、仙台・京都で発足、この運動の高揚により、日本は国際連合のユネスコ加盟を認められたと言われています。

仙台では、東北大学を中心にユネスコ運動が起こり、学生や、一般市民にもひろがっていきました。ちょうどその頃、仙台で学生生活を送っていた私も、ユネスコ精神に賛同する一人として学生ユネスコ会員となったことが、ユネスコとのつきあいはじまりです。女学校四年の時、動員先の工場で敗戦を迎え、多感な時代に、戦争の不条理と平和の尊さを体験した私は、ユネスコ憲章の

一語一句が心にしみこんだのでした。その後、卒業・就職・結婚と時は流れ、花巻に住むようになりました。この町で、ユネスコ設立に出会ったことが一層ユネスコとのつきあいを深めることになったのです。

宮沢賢治は、「世界がぜんたい幸福にならなければ個人の幸福はあり得ない」と書きのこしました。「これこそユネスコ精神であり、宮沢賢治と郷土を共にする私たちにとって、すでにユネスコにすすむ道がひらかれていたことになる……」と、賢治の教え子を中心に、花巻にこそユネスコ運動の灯をかかげようと、志を同じくする人々がつどいました。賢治精神という、より身近な支えが、花巻でのユネスコ運動の推進力となったわけです。会員の一人一人が、自由な個人として平等であること、性や年齢、社会的地位によって差別されない人間関係が自然に生まれたことは、ユネスコ精神と賢治精神という高い理念に支えられていたからでしょう。

「世界がぜんたい幸福にならなければ個人の幸福はあり得ない」。農民芸術概論の中の一節として記されたこの言葉は、現代の世界状勢を考えてみる時、あらたな深い意味をもつも

のとなります。『世界がぜんたい』ということは、人間だけを意味するものではなく、あらゆる生きものすべてを含むものです。環境破壊、飢餓、難民等々の現代の世界の危機は、発展途上国だけの問題ではなく、先進国といわれる国々の繁栄と深いかわりをもって生じたものであることを知る時、半世紀以上も前に記した賢治の言葉に深い洞察力と他者への限らない愛を感じます。

童話『カイロ団長』にもこの精神がはつきり表現されています。平和でつましい雨蛙たちの楽しいくらしを、舶来ウイスキーでかきみだした殿様蛙の横暴振り、搾取的行為を賢治は許すことができず、王様の命令を二回もだして転換をはかります。「すべて、あらゆる生きものは、みんなかわいそうなものである。決して憎んではいけない」と。度々の飢饉に苦しむ農民、町の旦那に買ったたかれる熊射ちの名人小十郎の悲しみ。人の痛みをおのれの痛みとし、仏教に支えられた他者へのいたわりの心、愛他精神は、イーハトーブ理想郷Ⅱ実現への悲願となり、地球上のすべての人類、すべての生きとし生けるものへと広がってゆきます。

今、世界のほとんどすべての人びとは、否応なく相互に関係づけられています。何気なくすごしている私たち

の生活、小さな幸せも、世界的ネットワークのなかで行われている開発や、経済政策と結びついています。地球規模での開発は、一方に富める人々を、一方には今日の食べ物さえも手に入らない人びとをつくりました。「平和」と「開発」をテーマに、仙台で開催された第一回民間ユネスコ世界大会に参加し、世界七十六カ国の人びととの交流の中で、私は賢治の『世界がぜんたい……』の言葉を心の中で繰返し、「すきとほったほんたうのたべもの」に支えられた地球市民の連帯によって、人間らしい平和な生活を一人一人が本当に真剣に求めてゆかなければならないと思いました。

「二十一世紀には、大国も小国もない。地球社会の人間は、皆同じ」とライシャワー教授は述べております。どこの国よりも国際性が必要とされる日本でありながら、最も排他的で国際性に欠ける日本人。二十一世紀に向けて世界市民・地球市民意識の創造、グローバルな考え方が求められています。それは、あたりまえの人間として、痛みを分かち合う心、差別なくつきあうこと。日常の生活の中で、人と人とのつきあ

(おしきり いく)

いじば

私のつきあい方

家庭教育・社会教育で生かされて

安島 里子

.....

去る四月 父芥川長定 八十七歳の高齢をもって天寿を全うし、母をはじめ大勢の子・孫・ひ孫に囲まれながら安らかな温顔を残して他界致しました。

その生涯を貫いた「和顔愛語」のこころを受け継ぎ「観ていてやるよ」のことばを支えに、今後もお、私に与えられた道を精一杯歩み続けて参ります。

.....

のっけから誠に恐縮だが、去年の今頃、私は生まれて初めて喪中のハガキを書き、数行のコトバに思いを托していた。

明治人間の両親は、関東大震災、東京大空襲の試練を受けつつ、年寄りと七人の子を抱え、菓子製造卸業のあきんど（商人）としてマメに働いていた。業界や親戚や隣組の世話役として信頼され、出入りの多いくらしの中で、無意識にせよ示し続けてくれた「人とのつきあい方」は、私自身の生き方の中に根づいている無形の財産

だと、今改めてそう思う。

● 平等観のしつけ

「里子、何て口のきき方するの」兄や弟たちと一緒に、メンコ・ケン玉・竹馬・ベゴマと、負けてはいないオテンバ娘を笑って見ていた母が、ある朝、別人のように私を叱った。「ねえや、靴ノ」ランドセル姿でイライラしながら、私が玄関でどなった時、そこに厳しい眼をした母の顔があった。

「ねえやは、あんたが雇った女中さんかい？ ちがうだろ、忙しいお母さんの代りをしてくれる大事なお人だよ。それに何だい『靴』がどうしたって？ サアちゃんと言ってらん」
「ハイ、私の靴をそろえて下さい」「いえるじゃないか。口不精は失礼だよ。大体自分の靴位自分でお出し、わかったね」
いつの間にかその場にいた父は、追い打ちをかけて叱られるのかと首をすくめる私に、やさしいまなざしでこう言った。
「朝っぱらから何だい。けど、いいこと覚えてよかったな、ねえやもお前も同じ人の子、どんな人にもおこつちやいけねえ、いばつちやいけねえ。させるんじやねえ、してもらうん

だ。自分のことは自分でした上でだ。こりゃあほんとに、大事なこったヨ、忘れんじやねえよ。サ、行つといで」。

●能力開発

女の子に学問は無用という姑の手前、母はせめてもと、私を家政女学校に入れてくれた。だが戦時下のこと、挺身隊として軍需工場へ通い、忠君愛国の精神を叩き込まれていた。

空襲を受け、疎開し、やがて終戦。東京の焼けあとに、バラックの新居を建ててもらって結婚した。当時、ラバウル帰りの夫二十七歳、私は二十歳。昭和二十四年の春だった。

やがて、長女・次女・長男の三児に恵まれ、その成長と共に、PTAにかかわったのが、私の社会参加への第一歩であった。私は何も知らない、わからない。だから、ドキドキしながらも、質問した。まわり中いい人ばかりと安心して、調子よくおしゃべりを楽しんだ。ところがそれはメクラヘビ？ 私は家族以外の「人とのつきあい方」の難しさをイヤというほど教えられた。質問は役員への反抗、ほめれば皮肉にとられる。誤解・曲解の渦の中で、弁解すればするほど、身に覚えのない噂が広

がる。私は人のコトバが恐ろしくなった。

その頃、話し合い学習という婦人学級が、PTAの中に開設され、迷った末に意を決して参加した。

学び合う仲間たちによって、私は自己像を修正され、自分の知らない埋もれた能力とやらを発見され、発掘された。

それは、つらい努力の連続であったが、無学で平凡な家庭の主婦が、人間として開発されるよるこびでもあった。

●平和への道

女性のライフサイクル、高齢化社会、男女平等、婦人の自立と社会参加、組織と運動、集団と人間関係、国際婦人年。すべての学習は、聞き、考え、話す、という対話能力が基盤であった。四十歳の時、話し方への道を選び、そして十五年。

いつしか私への中傷は、暖かい理解と協力に変わり、今や多くの人に支えられ、生かされている毎日である。話の道は生きる道、人と人、国と国との争いを防ぎ、真の平和を拓く唯一の道と信じて歩み続ける私には、今も亡き父の声が聞ける。

「いい仕事見つけやがって。がんばれよナ」と。

(あじま さとこ・社団法人言論科学振興協会)

知縁を求めて

属 静

公民館・児童館共催の婦人学級(保育付)の企画・準備・運営にかかわりはじめて丸六年になった。最初の年は受講生として参加し、講座終了後、話したりない気持ちを抱いた五人ほどが自主的にグループをつくり、読書会・話し合いを重ねるうちに、そこに常に出る話題を次年度の学級の学びのテーマにしたいという切なる願いが、自分たちで講座を準備するきっかけになった。常に出る話題「子育て・私・夫・家庭・女・男」は毎年必ず話し合われるし、「老後・地域・福祉」なども本場に身近な問題で、誰もが胸にもややもした思いを抱いているようだ。

この講座は、講師の話を聞いて終わるのではなく、話を元に問題を自分に引き寄せて考え、それを自分の言葉で自由に話し合うのが特色である。また保育には学級の準備に携わった人が必ず加わり、保育者も学級のテーマに心を寄せつつ子供を預かるという姿勢をとっている。子供を預け・預かりあう関係が、一緒に子供を育ていく関係であってほしいと願っているからだ。

受講生の最大の悩みは「子育て」である。この悩みや

苦しみを語ることは、自分を語り、自分をふり返る第一歩なのである。自分に関係のない話題と感じてても、さてあなたは? と問われる、考える、印象を述べる、そうしていくうちに自分をもう一度考えることになる。自分を解きほぐすことは自分をよく知ってもらおうと同時に、他の人を知ろうとすることにつながって、一緒に学んだ経験を共通の財産として理解し合おうとする関係ができてゆく。軽い気持ちで話し合える関係から出発して、次第に何かにつけて遠距離電話で肉親に相談していたのを、近くにいた親しくなった人に先ず相談してみる。生活経験の多い年代の人の体験や意見を聞くために訪ねるといふふうに、その関係が発展をみせる。血縁から地縁・知縁へと移っていくのである。同じ地域に住んでいることが、同じ講座に出る地縁ならば、知縁は意識的につくり合っていくものなのだ。婦人学級は、この知縁の輪を自らの手で創っていく人をつくり出す。そうであってほしいと願っている。

地域の開拓は、多くの知縁を生み出していく作業の根幹である。寝るだけの地域ならば、緑の多い静かな住環境で充分

だろうが、地域を全生活の場としている子供や老人にと
って、地域は、安心していられて、あたたかいものであ
ってほしいのである。一人暮らしや病氣のある老人も、安
心して落着いて生活できる細かい配慮の届いた地域であ
ってほしいし、また初めての赤ん坊の世話で、心身共に
疲れている新米ママに必要な適切な援助がなされる地域
であってほしい。子供の事を心配しながら働く母親に、
子供の友達の親として、一緒に育てていく気持を配る、
そんな親が一人でも多い地域であってほしい。こういっ
たあたたかい地域に変えていくのは誰？ そう。知縁で
結ばれた私たち一人一人とそのつながりなのです。

小さな生活上の疑問を皆で考えていくと次々に大きな
疑問がわいてくる。それを率直に行政や関係する機関な
どへ問うてみる。このように積極的に行政や社会とかが
わりをもつて生活していくと、いく分なりともどこかが
少しずつでも変わっていくのを実感できる。関心を持つ
ことほど大切なことはない。仕事と多忙を理由に諸事万
端、特に地域に目を向けぬ男たちの無関心が、地方行政
を沈滞させ、住民のためにあることを忘れさせ、足許が
冷えていく状況をつくり出す大きな原因だと思う。

知縁で結ばれた人たちは幸いにも多くの場で、例えば

P T Aで、例えば子供会の組織で、また社会教育の場で、小
さな仲間作りをし、必要とあらば行政にしっかりと物を申す人
々となつて活動してくれている。住みよい地域のためには、
地域のぬくもりを大切に思う人の一人でもふえることが一番
大切なことだ。

学習したことの実践の場として、地域に働く場をつくりた
いと願っている。他人のために働くことの喜びが実感でき
る、そんな仕事の間である。助っ人稼業とでもいおうか、だ
まつて支え合う、そんなことを考えているこのごろだ。

私はつきあいのよい人ではない。しかし、自分を大切に生
きようとすると、どうしても生活の場のこと気がなつて、
地域に目が向いていった。私のエゴからのスタートだった。
今、私は、地域に何者にも代え難い知縁の多くを得てい
る。個をしつかり持った連帯感は、何とも心強いのである。
やがて迎える老いの時の充実のためにも、しっかりと地域にこ
だわつて、良いつきあいを求めて日々を重ねていこうと思
う。

(さっか しずか)

『こんにちわ』——私のつきあい方——

水野 純子

『こんにちわ』と銘打って、私的な通信を発行して二年。隔月発行というスローペースではあるし、稚い内容ではありますが、「内なる熱き想い」につき動かされて、今まで続けてきました。

結婚し、夫の仕事の都合で教師を辞め、初めて団地に住むようになり、子供を産む。それは自分で選んだ道ではありました。けれど、慣れない家事・育児に追われる専業主婦の生活は、思っていた以上に閉鎖的で、没社会的なものでした。外で働きさえすれば即、社会との連帯が保てるというわけでは決まっていけれど、教師をしていた頃の、子供たちとの心弾むような触れ合いや、社会的責任を負って切嗟嘆磨しいながら仕事をする充実感と比べると、小さな子供と過ごす小さな部屋は虫カゴのようで、私は自分がチロチロと鳴く小さな虫になってしまったように思われました。ミルクを飲まない、泣いてばかりいる、など、子育ての悩みに振り回されて……。クラかったなア。

「どっこい私は、ここにいろよ」「今、こんな事考え

て、こんな事やってるよ」——自分の存在を声に出して人に示したい。私のことをわかってほしい——先に書いた「内なる熱き想い」とは、そんな切羽詰まったフラストレーションの爆発だったのでしょう。世の中と、そこに生きている人々とつながっていたい。私にとってその第一歩が『こんにちわ』だったのです。

「目は口ほどに物を言う」のは恋人時代の甘い幻想です。私は、人と人とながつきあうには、まず言葉による働きかけが必要だと思っています。夫婦でも親子でも、地域の人々との交流においても、まず言葉を発して会話してみることから、相互の理解が始まるのでしょうか。私の『こんにちわ』は、直接の会話ではないけれど、私から周囲の人に働きかけるラブ・コールです。そこに回線が結ばれて、心の通い合いが始まります。当初「突然に、何をやり始めたのだろう？」といぶかしがられたものの、号を重ねるごとに、「楽しみにしています」などの感想や励まし、批評をちようだいするとうれしくて、ヤル気モリモリ、鼻歌さえも出ようというものです。

とかく儀礼的な時候の挨拶だけのつきあいに終わらずに、

心に何かを残し合う交流が持てるようになりました。それぞれの家庭が抱える悩み、危機的状況にある学校のこと、男と女のしがらみに揺れ動く友人、生き方を模索しているかつての教え子たち。呆け老人の看護に疲れる人、嫁と姑のすき間風。夫と妻のすれ違い。親と子の断絶。等々、山田太一のドラマのような、ささやかで、したたかな市民生活の温もりを垣間見るような時もあります。

私にとって『こんにちわ』は、人と人とのつきあいの難しさ、楽しさ、不思議さを考えさせてくれる生きた教材になるようです。

そして何よりの収穫は、私の生活への姿勢そのものが変わってきたことでしょう。『こんにちわ』がいくらか私的なものでも、文章化して人に読んでもらうという事は責任が伴います。ノンポリを自認していた私でも、世の中のことに問題意識を持とう、自分なりの意見を持とう、社会を見つめる視点をしっかり確立しようという認識が生まれました。

住む町の婦人セミナーに参加して、婦人を取り巻く問題に目を開かれるような思いを味わい、家庭科の男女共修を主張する「We」に、自分の求めていたものを見つけたように、「うわっ／＼ まさにそうだ、そうだ」と共鳴

したものです。子供の事しか見えなかった眼に、広い果てしない矛盾と、それと情熱を持って闘っている人々が見えてきました。そして、そういう驚きや感動を、一人でも多くの人に知ってほしいと、また通信を書きたくてたまらなくなるのです。

又、予想外のこととして、夫の参加がありました。当初は誤字のチェックをしてもらう程度でしたが、記事の内容についての意見を述べ合ったり、家庭科の問題や役割分担などについて、ある程度の理解を示すようになりました。現在、単身赴任先からの外国だよりは、なかなか好評です。私ひとりのつぶやきから、夫も、子供も友人も、みんなを取りこんで広がっていくのもいいですね。

これからの課題は、私が具体的にどう行動するかということです。『こんにちわ』は最終目的ではなく、目的のための手段であるにとらえたいのです。傍観者として書く立場から、自ら行動する側へとステップしたいと思っています。そして、その際にも「こんにちわ」と言える、人と人とのネットワークこそ、大切にしていきたいものです。

(みずの じゅんこ・主婦)

いろいろ SAY 差別

鈴木みち子

「あんたノ それは性差別だよ」と、いちいちガナツていてはこちらの身が持たない程、そこら辺じゅうに「性差別の種」はころがっている。0歳児から寝たきり老人まで、生きている限り「性差別」の中で暮らしているようなもので。

先日、昔のボーイフレンドの連れ合いが三七歳の若さで、中二の男の子、小六の女の子を残して三途の川を渡っちゃったのね。彼氏はバリバリの営業マンで、朝早く出かけて夜は遅いわけ。とりあえず、大阪から彼氏の母上が助っ人で参上したものの、子供たちは、突然あまりなじみのない「バーちゃん」がやって来て波調が狂っちゃった。おまけに口うるさくて、いちいち「ママはだらしのない育て方をした」とかさ、「ママは何て人だろう。夫と子供を残して行っちゃったなんてねエノ」と例の姑のタメ息を一日中繰り返してね。

姑対子供たちの戦争は、体力的にも能力的にも姑が負けて、「もう知らん!!」と引き上げてしまった。当のオトツチャンはただオロオロするばかりで、何も出来ない。

そうこうしている内に二学期が始まって、子供は二人共学校を休みがちになって、九月の半が終わる頃にはとうとう全面休暇になっちゃったのね。

世の中にはいろんな人がいて、「オレの近所に引っこしておいでよ。オレの家でオレのカミサンに子供の面倒をみさせるからさ」と呼ぶ男がいて、渡りに船のオトツチャンは、そくさと転校届と転居届けを出して引っこしちゃった。

けれども、子供たちは学校へもいかない。オトツチャンの友人の所にもいかない。ただ家の中でボサッノとテレビをみているだけというありさま。今度どうなるかしらね?

ここまではよくある話だと思うのね。

クイズ1・この話の中に性差別はいくつあるでしょう?

生活をしている中で、男のしなくてはいけない事、女のしなくてはいけない事の決まりなぞ一つもないのに、何故か、「オレは男だからそんな事しない」「私は女だからしたくない事もやらされる」と言う人たちが多い。

これは、十代の子供たちにも蔓延していて、その上に「受験だから何もしなくてもいい」というのまでおまけにくつつ

いているわけ。そのまま大人になっちゃうから、何も出
来ない男の子がだらしなく列をつくっていてね。たま
に、マメな男の子がいたりすると「ナンダアイツノ」と
同性で差別するんだよね。女の子はもつと大変で、家の
手伝いもしなくちゃいけない、勉強もおしゃれもしく
てはいけない、とかけずり回る。

家にあそびに来るA子ちゃんは、「やんなっちゃうよ
オノ 夕食がすむと片付けるの手伝えて言われるでし
よ？ 弟とお兄ちゃんはテレビ見ててさ、あたしだけ手
伝わされるのよね。ブチブチ言うと、お嫁にいくんだか
らっていうの。姑さんに嫌われるよ、彼氏にきらわれる
よノ っていうの。そんで片付けが遅いと、早くしないと
受験で落ちるよ、都立に行けないよ。ってオドスの。
それから、火の車の家計のこととか、いろいろウダウダ
いうの。お茶わん上げてやりたいよ」と私にやつ当たり
をして帰っていく。

クイズ2・A子ちゃんの話の中に女性差別はいくつあ
るでしょう？

日常の中で女同士、男同士で差別していることって本
当にきりのない位ころがっているよね。それも案外私た
ち自身言っちゃったりしていることってあるのよね。あ
とで「ヤバイノ」と思って顔赤くしたりしてね。

我が学校解放新聞社内でも、十代の子供たちは何も片付け
はしない。おじさん、おばさんたちがブチブチ言いながら、
時には怒りながら片付けをする。いつか「自分で片付けろノ」
と私は怒っちゃったのね。そしたら男性のAさんが「この子
たちに何でやらせるのだノ」と逆襲して来たの。「家事に男
も女もないノ ましてこの子たちは大変だノ なんて言いわ
けにもなんないノ」と大ゲンカになりましたっけ。「受験地
獄」が親と子をいたぶっている限り、どんなシンポジウムを
開こうが、論をぶとうが大きな変化はないように思えてね。
まず、親が地獄から脱出して子供に対さないと、ロクなこと
にはならないと思うよ。

子供の面倒を全部母親がひきうけてしまうのは、何かやさ
しさのすりかえのように私は思うのであります。ひきうけた
あげくに、子供に「エンピツがけずれない」の「ブリキちよ」
だのというのは何かおかしいことのように私はそういう親に
出会うとクスクスと笑っちゃうんだよね。笑ったあげくに、
「あなたの子、マザコンになるよノ」と言ってるのと、「そう
？」とか言っちゃってうれしそうにニッコリする母親、いっ
ぱいいるのね。案外、性差別のもとを作っているのは、「エ
セ母性」を信じこまされている私たち女だったたりして。

来年あたり、「お母さん、リラックスしましよう」運動を
大々的に始めようかしら？ ね。(フリージャーナリスト)

いかになんでもいおうなんでもきこう

◆十月号の小島さんの実践を読んで、ぼくが思ったことを書いてみたいと思います。

大学共通一次が始まった年、養護学校義務化が実施されたということ、ああ同じ年に始まったのかあと、ぼくの無関心だったことに思いをめぐらししました。「義務化」はともかく、「共通一次」は、もうぼくに直接関係ないから関心を持たなかったのだらうと思います。

幾箇所も、ほんとにそうだ、と思うところがありました。「違う!？」と思ったところを書きます。横浜の「浮浪者」殺傷事件を起こした少年たちを、特別な少年だったとはどう

しても思えない、というところですね。たまにこういう言い方をする人の話を聞くのですが、あの少年たちは特別な少年ですよ。

十人のうち七、八人は確か片親です。もう、それだけで、少年全体の中で少数派です（地域差がだいぶあるそうですが）。そして片親でも、死別と生別では全然違うでしょうし、経済状態によっても、また違うでしょう。これら三つを考え合わせただけでも、最悪の状況にある片親家庭の少年というのは、少数派の少年であり、特別な少年たちです。

このごろ、クラスの子どもたちを見ていて思うのは、家の経済が「学力」に比例しているということです。相対的に貧しい家の子で「学力」が高いという子は皆無です。ぼくが子どものころ、ぼくの住んでた寮には、相対的に貧しい家庭が多かったと思うのですが、「学力」は高いという子が何人かいました。でも、今は、どうして

貧しい家庭の子で「学力」が高いという子がいないのか、不思議です。

今、ぼくのクラスには、片親の子が二人います。二人とも人前では大きい声が出ません。Kくんはお父さんが詐欺でつかまりました。この二月から、行方不明だったそうですが。Sさんは、この夏休み「お母さんの所へ行く」「転校するかも」なんて言っていました、行かなかったようです。Sさんにはおばあさんがいて、五月の家庭訪問の時、Sさんのいる前で「お母さん、出てっちゃったんだもんね」なんて言っていました。Sさんイヤな顔してるのに……。そして二人とも授業には集中しません。当たりまえといえ、当たりまえだと思います。「学力」低くなるのも、これまた当たりまえです。

「人間が共同生活をしていく上で最も必要なやさしさや悲しみや人々を、思う」という基本的なものが学べず、弱い者を疎外していくことの中に快楽を求めてきたとしか思えない」と小島さんは書いています。

やさしさについて。周囲からバカ扱いされ、低学力者として疎外されて来たものが、憎しみや反抗心を学ぶことしかできなかったのは当然と思う。やさしさなど学ぼうにも、少年たちの周囲には、そんなもの存在しなかったんだから学べっこない。

悲しみについて。十分すぎるほど学んでたと思う。楽しかったら、全く学べていなかったら。人々を、思うについて。このへんは難しい。あの少年たちだって、やさしく接した人もいたと思う。田中だって、中曽根だって、子とか孫とか、家族のことは思うだろうし、やさしくするだらうし、でもあいつらには、やさしさがないとぼくは思うし……。

「中学校では(略)『主要五科目』を中心にテストし、テストに現れる力をその子の『能力』として序

列をつけることが何の疑いもなく
やられている」。ひどいなあ。

「そして子どもたちも親たちも、
みんな一つの方向を向き、少しで
もよい点数をとること、少しでも
順位を上げることに向かって進ん
でいる」。やだなあ。

「そんな中で、子どもたちは、も
のに感動したり、自分をみつめた
り、友人を思ったりするようなこ
とは、全くといってよいほどなく
なってしまうている。これは、人
間の教育の場といえるのであろう
か」。このへんのところはよくわ

からないけど、学校は教育の場じ
やないなあと思うことが、よくあ
ります。
(横浜・鈴木正美)

◆本を読むことが不得手な私にと
って、Weを読むのはかなり疲れま
す。ナナメ読みながら、内容が重
いのと、私自身「家庭科」にあま
り興味がないのとあいまって、す
ぐに目がショボショボしてしまう
からです。しかし、今「真面目」
がうとまれ「軽薄」がもてはやさ

れる時代にあって、根が真面目だ
と思う私にとって、貴重な一冊で
もあります。チラチラッとでも見
ておきたいな、と感じるのです。

家庭科は必修が当然だし、各家
庭で男女区別なく家事の手伝いを
させるべきだと思います。が、学
校だけの問題ではない、と考えま
す。社会全体のかかわりの中で考
えることが必要ではないでしょう
か。私がどうも「家庭科授業」の
ページをとばし読みしてしまうの
も、こうした私のつたない思いに
起因していると思います。

(東京・藤谷純子)

◆県高教組婦人部の学習会に出席
して発言してきました。「家庭科の
男女共修は家庭科だけの問題でな
く、婦人問題であるから、全婦人
が取り組むべきである。ことに家
庭科の先生は、当事者中の当事者
だから、明日にでも全県会議を開
いて、共修運動に取り組んでほし
い」と。賛成して下さる方が多く
別の方からの提案もあり、高教組

婦人部が動くことに決定しまし
た。そして、家庭科検討会議に、
婦人部からは要請文を、私たちは
委員一人一人にはがきを書いて送
ることになりました。

それにしても、家庭科の男女共
修をすすめる会の全国交流会が開
かれた時の大阪の福本美紀子さん
たちの発言は、私の目を開かせて
下さったことを思います。「家庭科
の男女共修は、私たちにとって他
教科の問題か？」です。

We 十月号は、私にとって大変興

味深いテーマでした。ずっと以前
の「家庭科教育」に載っていた藤
田鶴子さんの文に感動して、藤さ
んのことを知ったかったのですが
最近「神への告発」と「他者への
旅」を読み、「うーん」とその生き
方のすごさに、唸ってしまいました
た。それから「生命の手紙」も読
みました。千葉教子さんも藤さん
も「普通の人」から見れば「極端
な生き方」をされているようにい
て、それ故、私が生きる上に示唆

されるものが多かったのです。現
実に重荷を背負い行動している方
の文は、確実に私たちの心に響く
ものがあります。

私から見れば、人間の幸福、み
んなの幸福という山を、東
西南北の壁から登ろうとしている
登山家の心がWeに載っていると
思います。私はWeを通して、さま
ざまな人の心に触れることがうれ
しいのです。(七尾・古田励子)

◆十月号福島澄香さんの「NC9

と……」を読んで。私もあのテレビ
見てまして、家庭科の実習風景に
苦苦しく思ったものの一人です。
でも、平均的世間の目はこんなこ
とでしょうか。かつて教育実習校
を訪問した時、ある校長が今の父
母の態度を嘆いた後「彼らも私た
ちが育てたかつての生徒です」と
言われたのが耳に残っています。
戦後三十年余、そんなにしか家庭
科を育てられなかったこと、外に
主張を怠ったことを反省すべきだ
と思いました。(奈良・藤本艶子)



女の人生・男の人生 《老人介護と夫婦の危機》

増本

敏子



老人介護をめぐる中年夫婦のトラブルがふえている。先日十年ぶりで知人夫婦の来訪を受けた。お子さん二人とも成人して就職し結婚されたとのこと。これからはゆつくりできますねとあいさつしたところ、実は離婚することになりましたとの言葉にびっくり。誰にも相談せず二人で結論を出したのだけれど、奥さんの方がどうしても誰かに胸のうちを打ちあげたくて、しかも一方的な話はいしたくないので夫婦一緒にきたのだという。まず離婚したいという夫の気持を聞いてやって下さいと、奥さんが冷静に切りだした。

二人は教師夫婦だった。夫の親をめぐるいざこざが兄弟間で長年つづいた末、数年前、妻が二十年以上勤務した学校を退職して病身の夫の父親をひきとった。夫は妻に感謝すると共に、なりゆきが心配で不安であった。二年後、妻は看病にあぐれ気がめいっていたところへ、非常勤講師の仕事を頼まれ、近所に住むことになった息子の妻がアルバイトとして老人の世話をしてくれるというので、週四日昼間だけ働くことにした。真面目で神経の細かい夫にとってこれは妻の想像以上に辛いことであった。年若い息子の嫁には自分たちが将来世話になりたいので、今父親の世話は弟たちに約束したとおり自分の妻にみてほしい。その一年後に弟夫婦がみかねて父をひきとり、更に半年後に父親は弟の家で亡くなってしまった。

長男としての親への責任がこのような形で終わったことが残念で、長い間大目に見てきた妻の欠点のすべてが許せなくなつたと夫は語る。朝夜は老父につくしてくれただけで、妻のやり方はいつも

一人よがりである夫の気持をふみにじるものだった。子供が病後なのに研修旅行に行つてしまった過去のこととも思い出される。細かな心くばりのない行動をみるたび腹が立ちノイローゼになつてしまう。子供たちが独立したのを機に一刻も早く別れたい。夫のこの申し出に妻は最初は驚き、その身勝手さにあきれて非難したり、わが身を反省して謝つたりした。でもこれほど嫌われてしまつては、平安な老後をこの人と一緒に送ることはできないとあきらめ、別れる決心がついたという。夫の気持にもっと早く気付かなかつた自分が悪かつたのだと彼女は言う。

争いの静まつた後かもしれないけれど、二人で来訪して相手の言い分に黙つて耳を傾ける彼女の強さに私はびっくりした。そして十年以上前だけれど、彼女の卒直さ、快活さを称賛し、自分たちは性格は反対だけれど合性の良いのだと語つていた彼を思い出した。私はついに、心に生じた疑問を口にした。「もしや先生は、他の誰かと比較して奥さんの欠点を厳しく採点しすぎていらつしやるんじゃないませんか」。彼はじつと考えこんだまま黙して語らず。「主人には結婚したいと思つている女性がいます。私は知っていますが、それを言うあまりにみじめで——夫を尊敬したままで別れたいので、自分が悪かつたのだと思ひこもうとしたのです。でも毎日とても苦しくて胸が痛むので、こうしておうかがひしたのです」。

彼女の瞳からはじめて涙がとどめなく流れた。

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそのかの母も吾を待つらむぞ
(三三七)

子泣くらむ 山上憶良。この名と共にまず私の唇に浮かぶのはこの歌です。食べる物も読む本もなくただ働いただけだった戦争末期の学徒動員の日に、心をこめて萬葉の歌を教え賜うた師が、この歌に節をつけて朗々と歌われたのを、つい先日のことのように憶えているからです。

当時は、例えば「紫の匂へる妹を憎くくあらば人妻故にわれ恋ひめやも」などという歌は間違っても教えてもらえない時勢でした。が、この師、実はそんな歌が教えたくてたまらない人でした。

やがてわが師は三たび応召で出陣しました。今度こそ大砲の下に生命を捧げるだろうという言葉を残して。こたびこそ火砲のもとにたまきはるいのち散らむと笑みしわが師はも。これは、駅頭での別れの時、私とその師にそっと捧げた拙詠です。幸い、その師は今も健在です。憶良の面影はいまでもその師の村夫子然とした顔とダブリます。

そのかの母も 閑話休題。萬葉集の中で山上憶良は特異なポーズをして立っています。彼は、貧を嘆き「子」をいとおしんだ歌人です。「子」と書いたのは、子供・童児の意味を表すためです。集中、子、児という言葉はよく出て来ますが、それは殆んど、愛する女性のことです。憶良は文字どおり、子供を愛し哀しみそのために涙を流しています。

冒頭の歌は、私はもうおいとまします。家では子が泣いているでしょうし、その子の母も私を待っておりましようから、というのです。妻が待っているといわず「そのかの母」といつているところが何ともシャイな感じで好感がもてます。

この歌は筑前守として九州の太宰府で詠んだものです。このあとに大伴旅人の有名な「讃酒歌」十三首が続きます。子煩悩な憶良が帰ったあと、彼のことも肴にして賑やかな宴が続いたのでしょうか。

瓜食めば 憶良の子の歌で一番有名なのは次の歌でしょう。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲ばゆ 何処より来りしものを 眼交に もとなかりて 安眠し寝さむ

反歌

銀も金も玉も何せむに勝れる宝子にしかめやも(八〇二—三)「もとなかりて」はわけもなく目の前にかかって、という意味。その他は訳をつける必要もないでしょう。何とも素直な愛情です。そのほか、古日という男の子が死んだ時の切々たる歌があります。その反歌に

若ければ道行き知らじ幣はせむ黄泉の使負ひて通らせ(九〇五)——幼い身だから道行くこともできないだろう。贈物はするから、黄泉の使よ、背負うて通っておくれ、というのがあります。

人生歌人憶良は、天平五年(七三三年)ころ七十四歳で没しましたが、その名は「子」と共にいつまでも輝いています。



萬葉の男たち・女たち

《人生歌人は》

井田 邦弘



風に向かって ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

こそだてと さべつ

渡辺 文恵

わたしには、11にんの おいや めいが います。
その こどもたちにおやが ごはんを のこすと めがつぶれて しまうからと
しかっていますが それを きいて なんだか すごく むなしくなるのです。
では、ほんとうの しょうがいをもったひとが ものを そまつに しているの
でしょうか。

このことを いった ほんにんも それを しんじては、いません。ただ ものを そ
まつにしたり、こどもが いうことを きかないときだけ、どうして しょうがいの あ
るものを ひきあいに だすのか。

あたらしい こどもへの ふれあいを かんがえたとき こどもも ひとりの にんげ
んなんだと いうことを あたまにいれて しげんの もんだい たべものや きるもの
について はなして ほしい。

わたしも あねの こを じぶんの こせきに いれた いちおう ははなのだが わ
たしの びょうめいは のうせいまひである。

なにを やるにも ひとの てを かりなければ ならないので しせつに いまは、
はいっているが でんわと てがみは まいにちの ように おうふくしている。そのめ
いの はは は、おさんの ねつと いくじ のいうぜとに かかり そのほか いき
る うえで あかが こころに たまったのだろう うつびょうから せいしんびょうに
なってしまった。

でも はは は、ははなのだと おもう。なにも わからないような しぐさは、する
が こどもの なまえを よばせると ねんねん ころりよ おころりよと うたいます。
ほかの ことでは こんなに はやく はんのうしないが こどもの なまえには びん
かなな きもちが ははとして のこって いるらしい。きぶんの よいときは おにん
ぎょうに おむつをかえたり おっぱいを ふくませる まねを する。おんなどは、な
んと ははの ぼじょうが つよいのかと、そばで なみだを ながすこともある。

そのこも、いまでは、ちゅうがく 2年となった、いよいよ じぶんの ははが どう
いきるかを みをもって しる じきが やってきたのだと いうことを、まわりの に
んげんが もくにんしなければ ならないが てあしの きかない しょうがいと じぶ
んが いしきできない しょうがいを どう あのこの こころのなかに うつしていく
のか。

ともかく このよには いろんな かたちの しょうがいしゃと よばれている ひと
が いるんだと いうことを おぼえて ほしい。

そして じぶんの おやに まなぶものが なくとも じぶんに あった よのなかの
せんばいの いきるすがたを めすみとれと わたしは ひごろから いい きかしてる
ことばがある。それは、おやを そだてていくのも あなたなのよと。

あなたを そだてるのも わたしたち しんじることは ふあんなこと でも じめん
の きよりが いくら はなれていても あなたは だれの ぎせいにも ならない わ
たしもほかの おとなたちも みんな じぶんの じんせいしか いきられないの き
っと、いまに ひとりだち するときに あなたの あたらしい かていが どんな ち
いさな さべつも なくせるような かていを あなた みずからも かいたくしてい
かなければね。



男女平等教育すすめてますか

We の夏のフォーラムは私にすばらしい出会いを与えてくれた。そしてその人の実践は私に教師としてのあり方をもう一度点検させてくれた。

フォーラム最終日、芦谷薫さん司会の「家庭科は今」では、共修を実現させるにはどうしたらよいのかをめぐって具体的な提案が飛びかった。私はその中の発言の一つで、「おいしい味噌汁も作れないで、ただ一生懸命働いているのは何故か淋しいと自分のことを感じたことがある……」という話を話した。いいお味噌汁に出会っていないせいか、満足出来る味噌汁の味がなかなか出せないでいた。

フォーラムが終わって二、三日たってから、「お味噌汁を送ります」という電話をいただいた。静岡の望月一枝さんからだった。私のあの時の発言を覚えていて下さり、御自分が使っているものを取寄せて送って下さるという。私は自分が本当に思っていることを言っただけだった。こんなやさしさを与えてもらえるととはなんてうれしいことかと感じた。

お味噌汁は赤い磁瑯引きの器に入れられて私の所に届いた。お礼状と一緒に私の書いたものを同封した。彼女の方から彼女の自己紹介の文や、性教育の実践、新しいクラスの生徒とのかわりを追った文が送られてきた。ちょうど私の方は文化祭の準備の時期で毎日帰りがおそい日だった。

彼女の実践記録を読み始めたのはそんな日の夜十時頃だった。疲れていたのに読み進むうちにだんだん疲れがぬけてい

くような気がした。生徒との激しく、しかも心の通ったやりとりにはぐいぐいと引込まれていった。性教育の実践の中には、私が十代の頃一人悶々としていたことがちゃんと生徒との話し合いの中で出されているではないか。

私は彼女のこんな実践が是非本にまとめられることを願った。そして彼女とは一体どんな人なのかとても知りたくなった。翌朝、私は次の連休はあいているのであなたと話をしたいが、都合はどうですかと手紙を書いた。彼女の学校はその連休が文化祭と体育祭だった。私は体育祭を見せてもらい、そのあと彼女のクラスの生徒の前で話をする機会を光栄にも与えられた。彼女の同僚とも、短時間だったが喫茶店で話し合うことも出来た。

その夜は食事の後ゆっくり二人で語った。彼女の生立ちや結婚に至るまでの過程や、その後の結婚生活についても話をうかがった。大家族の中で「嫁」として働かざるを得なかった彼女が再び職業を持ち、子供を生み、夫との関係を作りなおしていった様子はとても感動的であった。一体何が彼女にこうした不屈の精神を作りあげていったのか、私は彼女との話の中で少しわかった気がした。

彼女の両親は夫婦喧嘩をした時でも、それをすべて子供たちに話し、それについて自由に意見を交わさせたと言う。ある時、子供たちの意見が、「お父さんが悪い」ということで一致した。そうしたらそのお父さんが、「こんな家には居られない」と家を出をしたこともあったそうだ。

意見を闘わせ、お互いの存在を大切なものと認めあってきた中で、彼女の他者への勇気ある働きかけは育ってきたのではないかと。

味噌汁と友情

中嶋里美

シネマ



「暗闇でどつきり」

遠藤 由紀 (カットも)

「映画が見たい」と突然思いたったとき、どうするか。高校生だった頃の私は、テレビで映画を捜し、あくどいカットに泣いていた。高校は家から自転車七分、イナカだったので私の行動半径はせいぜい二㎞。実に地味な高校生活で、映画館との御縁はまずなかった。高校を卒業すると都内に通うようになったので、完全な受身的状態から脱出し、「ぴあ」で見たい映画の目星をつけて、映画館に足を運ぶようになった。けれどそれですぐに映画を見ることができるといふと、さにあらず。もう一段階ふまなければならぬ。

当時は純情なうら若き少女だったので一人で映画館に行くことなど、こわくてできなかった。そこで一緒に映画館に行ってくれる友

人を見つけないければならなかったのだ。

今だって一人で行くのが「こわくない」とは言えないけれど、「こわい」状況を未然に防ぐ方法を覚えた(「こわい」というのは言うまでもなく、言うのとはばかる「チカン」)。まず、第一に見る映画を選ぶ。

私たちが見たいと思う映画はそれほどあやしい映画ではないけれど、敵はどこにでもいるのだ。友達はずいぶん映画を見に行つて遭遇し、映画館を出たあとくっついてきたというおそろしい経験話を語ってくれた。

あまり確実性はないけれど、少なくともポルノ映画館よりは少ないのではないかという期待でもって、一般映画を選びましょう。

映画を選んだならば、映画館を選ぶ。初めての映画館が不安だったらずは友人と行く。二回目から比較的緊張しなくてすむ。毎回同じお客さんがくるわけではないので、こんなことは意味がないと言われそうだけれども、映画館には雰囲気というものがありますしよ。

それほど映画館めぐりをしたわけではないけれど、二番館映画館ではテアトル吉祥寺が好きだ。女子大が近いせいか女子が多く、しかも一人で見に来ている。心強いのだ。

雰囲気を確かめてから行くことはかなりチカン防御には有効だと思う。

けれど考えてみれば、こんなようにいろいろ考えてこわがりながら映画館に行くなど、とても腹立たしい。「こわい」のが当然というのはどうにかしてほしい。

くわしくは知らないがどこかのロードショー館には女性席が設けられているそう。なんとなくシルバースhirtめいていて実は少しも解決にはなっていないのだけれど、少なくとも安心して映画を見ることができると。

それだけでもうれしい。腹立ちついでにもう一つ。ロードショー館格差もどうにかならないだろうか。

同じ料金とるくせに椅子の座り具合、スクリーンの大きさ、音響等々、いい映画館とどうしようもないのとは月とスッポンである。歌舞伎町に「七時すぎますと館内がゆれま

すが地震ではありませんので御安心下さい」とかかれた映画館がある。なぜかというところ「上階にデイスコがございます」(?!)

この映画館で私の大好きな映画「ディーバ」が上映されたのだ。最近、テアトルで再映されたのでこれについて書くかと思っていたのに。ああもう紙面が……。



ほん

『共産国でたのしく暮らす方法』

小田亜佐子

ひよんなことからポーランドへ旅行することにしたのが七月の初め。

OLの海外旅行、なんて恥ずかしくてまさか自分がその側に回るとは！ けれど行先がポーランドのボズナニという(やや田舎?)町と聞いてがぜん気が変わってしまいました。「九月の初めに十日ほど休暇をとるんですけれど」「えっ、海外旅行? どこどこハワイ?」「えーと、いちおうポーランドなんですけど」「えーっ!! ヨーロッパ、すごーいっ、いいわねえ!!!」(お金持ねえ。こんなやりとりを何回したっけ? 独身貴族なんて偏見は今すぐ捨てて下さい、要は用途の問題であって、その分日常生活が貧しいということです。

ポーランドの歴史は、日本なんかとは対照

的に他国の侵略・支配と抵抗・蜂起、人口の流出の繰り返し。現在のワルシャワとくに旧市街広場の中世さながらの古く美しい街並はとても印象的なものでしたが、これも実は第二次大戦後復興したものだそうです。ワルシャワ市民の蜂起に対する報復として、ドイツ兵が建物を爆破したり、丹念に街中を焼いて回るさまを、私も「歴史博物館」で上映される記録映画で見て来ました。

戦禍を記録する執念は大変なもので、あの悪名高きアウシュビッツ収容所も、現在は博物館として公開されています。残念ながら行く時間がありませんでした。

「連帯」の活動も、こうした抵抗の歴史とたぶん無関係ではないんだろうと思います。

「自由と平和」何よりポーランドの人々が求めているもの、とワルシャワで出会った日本人技術者(彼は三カ月ポーランドで働いたそうです)は語っていました。

さて、尽きぬ興味を抱いて行く気になったまではよかったです。

戒厳令後、観光サービスがストップしていて、出かける前に予約できたのは往復の飛行機とボズナニのホテルのみ。ちゃんと列車は時間通り動くのかなど、具体的な情報が得ら

れずひどく不安でした。その上、『共産国でたのしく暮らす方法』なんてひどい本を読んできましたので、出発前は戦々兢兢。ポーランドでの暮しの場面を紹介してくれるのはありがたいのですが、一体どこまで本当の話やら。

商店においていかにふるまうべきか。その心得は、客のほうこそ、①おずおずと下手に出、②決してねばらず、さっぱりとあきらめが大切、③買うほうが悪いのだと自覚すること。それだけの心がけさえあれば、店員から「ないよ」(ポーランド語で「ニエマ」とそっけなく言われようと、足どりもかるやかに店をあつとすることができ、んですって。

あきらめの境地、かつかたしないこと、が共産国でたのしく暮らす最良の方法である……と、以下ホテル、レストラン、タクシー、電話等々について、いかにトラブルが多く苛立つかを皮肉たっぷりに教えて下さるのです。

最初読んだ時は電車の中でひっひつと笑い出し、隣の人からにらまれたりしましたが、自分がこれからその当事者に、と思うとゾツとして青ざめましたよ。(つづく) / フェドロヴィッチ・工藤幸雄『共産国でたのしく暮らす方法』新潮選書、八八〇円

四年目を飛躍の年に！

読者参加の増刊号（夏）を企画

あなたも、Weのつくり手に……

石の上にも三年——このごろ「Weなればこそ」「それがWe」「やっぱりWe」というような声を聞きます。Weのイメージがつくられつつあるということでしょう。Weの輪を広げ、名前通り「私たち」の雑誌にしたい。その願いをこめて……

◆読者参加の増刊号（夏）をつくりまします。読者の方の「こんなテーマをぜひ」とのご要望を編集部で検討し、毎年夏の増刊号として世に送ります（A5判・一二二頁）。

読者参加の増刊号を、という企画自体、一読者の提案をきっかけに生まれました。

例月号のテーマも読者の方々との反響をもとに立てていますが、これこそ読者参加号。あなたのお力を拝借したいのです。フォーラムの全記録、冬の増刊号は従来通りです。

◆例月号のテーマを早めに予告します。「発言」欄に活発にご投稿下さい。

◆より一層「Weらしく」するための企画にご期待の上、引き続きご購入下さるよう、願います。本号から巻末に振替用紙をとり込みます。2・3月号で契約切れの方たち、

どうぞ今すぐ四年目のご予約を！ お友達もお誘い下さい

◆誌代は、昨年と同じく、例月号10冊、増刊号（冬）1冊で六千円です。新増刊号（夏）は、予価七百元。夏冬の増刊号を含めれば六千七百円です。振替用紙の裏にご明記を。

〈投稿募集〉

◆'85夏の増刊号は『働きつつけるために……子育て・くらし方エトセトラ……』です。いま働いている方はもちろん、働こうと準備中の方にも役立つ、子育て、食生活、近所づきあいetc、お役に立つ具体的なあの手、この手を満載いたします。

(1) 働きつつけるために障害となること、悩み

(2) 働きつつけるために、あなたの工夫、アイデア

をはがきでお寄せ下さい。

(1)(2)いずれか一方でもかまいません。ご意見をお寄せ下さった方に、大室君子さんの「野の花をたずねて」絵はがきをさし上げます。〆切りは'84年十二月三十一日です

◆四月号のテーマは「性をどう語るか」です。「発言」欄にぜひご投稿下さい。(1)二千字以内、縦書き、趣旨を変えずに直すことがあります。(2)住所、氏名、職業を明記のこ
と、匿名は原則として採用できません。(3)他誌・他欄との
二重投稿はご遠慮下さい。(4)原稿返却はいたしかねます。
(5)〆切りは十二月五日。(6)掲載分には薄謝を送ります。

今、私の目に入るものは暗い車窓に映る街の灯と自分の顔。本当に観ているのは今日出会った中学生たちの顔です。

シラケの中学生っていいですよ。学校生活の中でも教師の権力にどうかして対抗しようと試みる年代。困ったこととして今や大問題のように論議されていますけど、私には中学生の気持が何だかわかるような気がしてくるので。少なくとも今日の授業中に限っては、生徒たちの心はきつと満たされていたのではないでしょう。

今日見学したのは技術・家庭科の家庭領域最後としての調理実習でした。「何を作ってもよい」ということで、準備段階から各班は大いに燃えたようでした。聞くところによると安売りを目当てに開店間際のスーパーへ買物に行ったとか。

パターの香りを学校中にまき散らし、大きなボールいっぱいのも

ットケーキの種を全部焼いて、他の班にも配ったり……。私も真っ先にいただいたそれを片手に調理台巡ります。

いつもは賑やかそうな男生徒が黙々と卵白を泡立てています。

一体何人分作るつもりなのかサンドイッチ用のパンのみみ落としをする子。そのみみを油で揚げて「パンの完全利用や」という子。焼きうどん用の人参を刻む子。

オーブンの中のケーキ型からはみ出すのを心配する子。

魚のわたを出して串を打つ子。わたの中から浮袋を見付けて触れてみる子。魚に大小があるの尋ねると、「昨日な、皆で釣に行ったんや、タダや」。そして「この魚はな、こうやってあぶり焼きにせんと身がグチャグチャになるんや」。

「どうぞ」の声に振り返ると、茶碗蒸しを持った子、「いや、おおきに」と私。

御飯を炊くところから焼飯を作った班。

森先生も「何もいうてへんのによややるわ、負けた」。

とにかく種類も多いが量も多いこと！各班の分だけというところはないのです。全部が出来上がるまでの間、お裾分けの味見だ

のと班交流の盛んなこと。実は私には班員の区別がはっきりしない程でした。

実習に期待する課題は多いと思いますが、

今日の授業のように、手のあいた生徒を見かけなかったこと、リーダーらしい子が見られなかったこと、自分の持っている技術や知恵や体験を出して、各々が自分で自分の持ち場を見つけて行動し、人や仕事が孤立しないで全体として一つのことをやる、やれる。今の教科割の中でそれが出来るのは男女共修の家庭科だけではないでしょうか。

行動にも技術にも全く性別分業を感じなかった今日は、男生徒が、女生徒がなどと報告は書けません。男と女を分けて授業をすることを考える人が私はますます理解できなくなりました。

参観前にうかがった校長先生のお話の中に、高槻市では地域を大切にし、平等をすすめるためにも地元高校に進学しようという呼び掛けがあるそうです。

今日の授業風景と思ひ合わせるとき、何年か先、学歴や性別や出身にこだわらない地域社会で、心豊かに生きる姿と逢えるのでは、と想ってみるのです。

(高槻市立第四中学校を訪ねて)

三鷹・武蔵野地域は、企業や行政機関、住民も参加して、九月二日よりINSモデル実験期間に入った。INSとは、高度情報システム (Information Network System) の略で、経済的効率が高く高品質な通信をめざし、超LSI、光ファイバケーブル、デジタル交換機、衛星通信などを導入してつくったデジタルネットワークである。超LSIは六平方ミリの薄い板に四万字記憶できる。光ファイバケーブルは今までの銅線ケーブルに比べ、驚くほど細くて軽量。そして情報をデジタル化する (符号の組み合わせに変える) ことによって、このシステムが可能になった。

実験推進の主役は来年四月から民営になるという電電公社。

わが家から五百メートルのところに落成したばかりの三鷹電電ビルでも、いくつかの端末器が公開されるというので、早速見学に行った。メタリック仕上げの超モダ

な建物。

音声と同時に手書き文字や図形を送ることのできるデジタルスケッチホンは、聴覚障害の方に朗報だろう。ファクシミリも超高速で安くなる。テレビ電話では会議ができる。モニターになった知人は、家庭にいながら買物・医療情報の取得、銀行振込ができるデジタルキャプテンに期待している。

ところがその夜、NHKTVで「あなたはここまで知られている」を見ていたら、直接関係はないと思うものの、昼間見たものが恐怖になってきた。クイズに答えた一枚のハガキ、どこかでやったアンケート、ピアノや自動車を買った時に記入した住所氏名、その他もろもろの個人情報、誰かがどこかで収集・蓄積している。そしてその結果は、一人の個人の生活の仕方までも浮かび上がる仕掛け。番組では「丸裸」という表現をしていたが、まさに実感!!

私が消費する人間として、どこかで管理されているのだらうとは想像できるのだが、なんとも不快である。

先日出たばかりの三鷹市の基本計画案はまだ粗案ながら、INSべったりの感、その理由の一つは、これが国家的事業だからだそう

な。

それにしても、学校だけはネットワークの中に入れたくないと思う。

社会的に見れば、企業間競争は激化し、独占寡占がより進む。労働現場には雇用不安や新しい職業病。労働の意味の問い直しもやらないければならないだろう。

技術面でもまだまだ、需要も不明、功罪も未知数といいつつ、乗り遅れまいと必死な企業人に対して、私は何をしたらいいのだろう。

INSを体験してみてはいかがでしょう。休業日もあり、時間にも制限がありますのであらかじめお問い合わせ下さい。

〈INSショールーム〉

テレコムプラザ新宿 (03) 348-9030
電電日比谷サービスーション

(03) 501-5000
電電展示センター (03) 580-4096
丸の内電電ショールーム

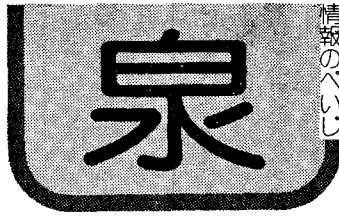
(03) 240-6888
電気通信科学館 (03) 241-8080
テレコムプラザ吉祥寺

(0422) 21-8030

◆いかがですか―「憲法フロシキ」

日本国憲法の前文が、世界の人々へ高く掲げる「平和への理念」を、より多くの国、より多くの人々に伝えるため、「日本国憲法前文」を世界へ伝える仙台市民・大プロシキの会が、英・和文で印刷されたフロシキをつくりました。「平和を包み結ぶ」ものとして軽いので海外旅行の際

情報のべいじ



の「日本みやげ」や贈りもの、壁かけ、ネツカチーフなど様々に利用できます。ナイロン製。

・価格 5枚入―五百円 10枚入―千円

・問合せ先 「日本国憲法(前文)」を

世界へ伝える仙台市民・大プロシキの会
事務局世話人 瀬川満夫(仙台市一番町1の12の20) ☎0232-27-6347)

◆調査―着用しなくなった衣服は?

横浜コンシューマーズ・クラブでは、秋の消費者団体活動発表会「暮らしを見直す」のテーマに向けて、主婦がどのくらい衣服を着

ないまま収納しているか、着なくなった理由等、主婦を対象にアンケート調査を実施(回収数 百三十人)。

その結果、手持ち数のうち34・2%の品が押し入れなどに死蔵されており、これらの処理について47・7%の人がゴミに出すと回答。着なくなった理由としては、「デザイン・色が気に入らない」「サイズが合わない」が多かったが、10%の人が「洗たくによる変化」をあげました。「考えていたよりしまい込んでいた数が多く、びっくりしている」「衝動買いが多く、値段の安さにつられてつい……」「もつとりフォームするなど皆で研究しなくては」との反省も出て、是非、この機会に衣類を再点検して、ムダを省いていくようではありませんか、と。(Y・C・C・ニュースより)

・問合せ先 横浜コンシューマーズ・クラブ(横浜磯子区磯子5の6の4の501レインボーハイツ 忠内方) ☎045-750-0763)

◆研究発表―80年代「I&YOU食生活」

・日時 11月17日(土)P.M.1時30分～4時40分
・内容 高校生による食生活をテーマとした研究発表。高校生が、まず自分の食生活に目を向け、それから自分以外の人の食生活に目を向けていく。いま、農と食の見直し

と日本型食生活の正しい認識を目的に研究推進校で独自に研究、そのうちの5校が発表。

・所 日本青年館 中ホール(国電信濃町又は千駄ヶ谷下車) ☎03-401-0101)

・問合せ先 (社)栄養改善普及会(中央区日本橋兜町15の6 製粉会館7階) ☎03-661-1951)

◆公開授業・研究会

・日時 11月22日(木)A.M.10時40分～

・所 藤沢市立村岡小学校(藤沢駅下車)

・授業内容 ①「男のくせに・女のくせに」(名取弘文) ②「奄美大島風チマキを作る」

③「ひき裂かれた家族」(林郁)

・参加費 五百円(資料代)

・問合せ先 藤沢市弥勒寺1の16 村岡小学校 名取弘文(ハガキか手紙で)

◆集会―「女性障害者問題を考える」

・日時 11月23日(金)P.M.2時～4時

・内容 女性障害者の抱えている様々な問題を、結婚、子育て、仕事とテーマ別に考えていく。樋口恵子

・所 問合せ先 東京都障害者福祉会館(港区芝5の18の2) ☎03-455-6321)

・参加費 無料

酒井章一著

『息子へ』

内ゲバから逃れた青春に』

新潮社刊 価一、〇〇〇円

酒井氏とは、七十年代に、ある放送番組の企画委員会でおつきあいがある。そのころ学生運動に情熱を傾けている息子さんについて、ふと洩らされる愛惜に、私も息をのみ、たたずむのだった。昨年五月、この本の出版を新聞の広告で見つけ、書店に走った。

青春の光芒が私を射た。

「パパは、佐藤首相の訪米は間違っている、という。ならなぜ、止めに行こうとしないの」と息子さんが初めてデモに出かけてから十年。獄中生活をへて、いま海外を転々とする日々。だが、手紙を通して父と子が交わし合った世界の広さ・深さ。息子が命がけでやって来たろうことは、何ひとつ知らないけれど息子の手紙に読みとれる心の起伏を、なんと私の若い日のそれとよく似ていることだろ

うとみる父の、哀しみと誇り。そして異境にある息子に「真直ぐにからだを起せ、その顔をあげて生きよ」と声をかける父の、その心を思う時、私のペンは、止まってしまふ。

高見澤たか子著

『子どもがわからなくなる日』

—体験的・男の子の育て方—

主婦の友社刊 価九八〇円

青春を駆け抜けていく子どもたちの行く手を阻むものは、実は親たち自身ではないか。高見澤氏の言葉を、私も噛みしめる。平凡な「普通の」娘と思ってきたが、どうしてもわからない時があるのに、「男の子」とは、母親に、娘と全く違う体験をさせる存在らしい。

「古典的ワンパク坊主そのものの」の息子さんが、おだやかな教養人であるご両親の目を丸くさせるような行動を重ねる度に、両親で考え、誠意を尽くして語り、道を模索する姿が、気取りもてらいいはったりもなく描かれる。その率直な筆致の中に、鋭い人間洞察が、あ

たたかさ・やさしさが溢れる。

高見澤さんは、書きかけの原稿を手渡し、息子さんの同意を得てから書き進めたとのこと。難しい時代、難しい年齢の少年とのつきあいに悩む人に、心からお褒めしたい大人の本だ。読後、私は久々にさわやかだった。

天野寛子著

『親子で家庭をどう育てるか』

汐文社刊 価一、二〇〇円

具体的な生活の中で親として何をしているか、何を考えているか、どんな親であるかを自覚したくはない面を含めて凝視した、シビアでだれの心にもしみいる本だ。

「子どものゆがみ」が指摘されるとすれば、「生活していく人間」としてのゆがみということ。「親子の関係」のゆがみと偏りも、「親と子」という部分だけを切りとり、クローズアップすることではなく、その人の生活の中で問われなければならない——この天野さん

の指摘に、全面的に共感する。

「人格と人格とが結びつき、夫と妻が人間として豊かになり、文化的・社会的に豊かなものを共有していくことで互いの人生を豊かにしよう」という発想が、日本に本来にあったのでしょうか」「人間としての深い悩みを夫と共有できないとしたら、『夫と妻』とはいったい何なのでしょう」「大人自身が自らの『人間らしさ』に向けて努力し生きていないならば、どうして子どもたちに『人間らしさ』を、また人間的な関係を期待することができのでしょうか」。

天野さんは問いかける。

斎藤次郎著

『子どもへの加担』

簡井書房刊 価一、六〇〇円

「家庭とは家族がそれぞれ個性にふさわしく生きる磁場であって、それ以上でも以下でもない」。これが、次郎さん（こうお呼びすることお許し下さい）の思いだ。それぞれの間に意識される「遠さ」を相互に認めた上で、一つ屋根の下で共に生きる意味を絶えず問い

直さねばならないということも。

その「遠さ」の自覚にたった共棲の単位としての家族の実力を確かめたくて、一家はインドを旅する。中学生になったお嬢さんは、インドの人たちと話すのに、英語力よりもっと確かな方法があるのに気づいた。それは「思い」である。こうしてほしいとか、こうしようとか、しっかりと心に思うこと。それを伝えようとする熱意。これさえあれば、敵意のない人には気持は通じる、と。

子どもへの加担、という書名をきめる際、次郎さんにはためらいがあった。でも、「加担」とは、次郎さんにとって「思い」なのだ。信用されたら、ともかく信用だけは裏切らないようにしよう、というのが加担の始まりだ、と。

次郎さんの熱い「思い」に胸を熱くする。

学校解放新聞編集委員会編

『学校解放宣言』

少年社発行 雪溪書房発売

価一、二〇〇円

あらゆるメディアが「教育」を語り、「学校の歪み」を憂えて見せている中で、虚妄な

「教育論議」の土俵を思いっきり蹴つとばそうとする人たちがいる。人権も憲法もクソもないという国家の暴力性が、壮大な実験を十代に課しているのだ、という認識に立って、反学校、脱学校、いや超学校を提唱する人たちが。

ひとつ、学校を解放すること。

ひとつ、学校から解放されること。

こうして生まれた「学校解放新聞」創刊より一年を経て、84年鑑としてまとめたもの。若い人たちの新しい文化がここに確実に芽生えた。

「元氣印」の旗よ、へんぼんと翻れ。

10・19の朝日新聞「天声人語」は、五人の女性記者を温い筆で伝えた。同社々説百五年の歴史に初めて登場した大熊由紀子氏、『自由と自立への歩み』を書いた佐藤洋子氏、いずれも一児の母だ。いまは二人の子を持つ女性記者も出てきたと紹介されたのが、ロス五輪特派員になった、この号の越村佳代子記者。朝日新聞本社には七十人を越える女性記者がおり、活躍の舞台はこの十年で急速に広まった。 「天声人語」氏の友情がうれしくて……。



やわらかなつきあい

—飛鳥を旅して—

半田 たつ子

「大津を偲び大伯の哀しみを胸に、この十月、私たちはまた二上山に登ります。」

「萬葉の男たち・女たち、井田邦弘氏の十一月号の結びの言葉のように、今私たちは二上山に登ってきたところだ。快い疲れを電車に乗せれば、雄岳と雌岳が、夕日をバックにくつきりと姿を現す。去り難い別れを告げる時、

金鳥きんこう西舎さいしゃに臨らひ 鼓声こせい短命たんめいを催もよほす

泉路賓主無し 此の夕家を離はなりて向かふ
大津皇子の辞世の詩が測々と胸に迫った。

山頂東端にぐいと張り出した崖っぷちにある大津の墳墓。非業の死を遂げた皇子の無念を思い、ぐるりと回れば飛鳥の里が——

秋なのに春のような静けさとやさしさ。やわらかい風にさわられて雲になり、緑の丘、黄色の田の上を漂いたい。タイムスリップして、古代のドラマがたちのぼると思うから。

井田邦弘氏を囲む「萬葉集を読もう会」のメンバー十九名の小さな旅のテーマは「大津と草壁にあつい想いを……」。

一日目、霧雨にそぼ濡れてめぐる飛鳥も、しっとり歴史を味わうのにふさわしかったけれど、二日目は抜けるような秋空。私たちは、晴れ晴れと歓声を挙げた。

午前中は、飛鳥川をみなかみへ、みなかみへ。皇極・持統両女帝や中大兄皇子・藤原鎌足も歩いたであろう道をたどる。頑丈なつくりの民家に目を向ければ「飛鳥村塾」の額がかかっている。かつて村の青年たちが、夜を徹して明日香保存を語り合った道場とか。

山裾にかたまる集落、栢森で飛鳥川にかけた女綱を見る。すぐ下の稲淵では男綱をかけるのだが、それは見当たらなかった。子孫繁栄、五穀豊稔の願いをこめ、男女のシンボルを形づくるというあたり、素朴で底抜けに明るかった古代の民衆を思う。毎年正月十一日にかけかえるというが、女綱だけ残っているのは「やっぱり女性が強いの、何よりの証拠」と、井田氏の学説だ。

このまま、道を歩めば吉野とか。ああ、吉野まで歩きたい。方角を一転、西へ。近鉄当麻寺で下車。しつかり腹ごしらえをし、いよいよあこがれの二上山に、私たちは登ったのだった。

その夜、杯を傾けながらの歓談のフィナーレは、古代史に限りない情熱をかき立てていらつしやる柴野八洲子さんのよく響くアルト。わが夫子ふしを大和へ遣ると さ夜更けて

曉露あきつゆに わが立ち濡れし

二人行けど 行き過ぎがたき秋山を
いかにか君が ひとり越ゆらむ

邦弘氏は「大津よ！ もって戻すべし！」と絶叫。

三日目は草壁を、まず宮内庁認定の岡宮天皇眞弓岡陵に訪う。ついで、今年五月、発掘されてこちらこそ真に皇子の墓と、騒然たる話題をかもした東明神古墳を尋ねる。

悲運の皇子 草壁 享年二十八歳

悲劇の皇子 大津 享年二十四歳

石川郎女をめぐる恋も、あでやかな色を添え、私の古代幻想曲は、終章を奏で始めた。

飛鳥は一冊の本。いえ、古墳は一冊の本。寺院・寺跡は一冊の本。宮跡は一冊の本。石造遺物は一冊の本。基礎的教養に乏しい私には、到底この豊かな、幸せな旅の全貌を書き切ることにはできない。また、それを記すことが、この小文の目的でもない。

今回の参加者の男性は七名。うち弁護士五名。司法修習生一名。

それにNHK大阪の報道部次長の座間味朝雄氏（今年二月放映の「飛鳥への道」製作者）が、多忙な日程をさいて一日だけ参加。女性には、井田恵子・増本敏子両弁護士と、法律事務所働く若い方の他は、さまざまの立場の人が集まった。そのどの方も、一人一人が、やわらかくつきあえる、すてきなおとなだった。

この会に集うようになって、弁護士さんのイメージが変わった。くだけて自由な方ばかり、とブライダル・コンサルタントの柴野さん。私も同感する。

どうしてこんなおつきあいができるのか。

人と人との関係を、こよなく大切にしたいと願うゆえに、傷つけられること・落胆させられることもまた、余りにも多い私にとって、このやわらかなつきあいは、救いだ。

井田恵子氏とおつきあいは、三年前の二月二日、日本弁護士連合会が「高等学校家庭科の女子のみ必修」についての意見書

を提出した以前にさかのぼる。そのころ同氏は、日弁連の「女性の権利に関する特別委員会」の委員長をつとめておられ、二年間にわたり、綿密な調査研究を重ねていらした。その折に、資料を提供させていただいたことからだ。

井田氏を「家庭科の男女共修をすすめる会」例会にお招びした時に、増本敏子氏とお会いし、We創刊の際、あたたかな支援をいただいた。その増本氏から「井田萬葉集」のおうわさを聞いたことが、門下生（おこがましい！）の末席に加えていただくきっかけになった。

豪放で繊細な井田氏の名講義と、おおらかで緻密なお人柄にひかれて集う人々は、井田氏にいざなわれて、わが祖先萬葉びととつきあう故に、俗界から飛翔できるのかもしれない。

旅の中で生まれた井田校長先生の尊称。名コンビ中西克夫・頭先生は柔和そのもの。教務主任格は機敏な金子光邦氏か。かつて「女性ジャーナル」の編集者で、今ガラス工芸に打ち込む川上正子さんとは、来夏、国連婦人の十年終幕の世界会議が開かれるアフリカに「一緒に行こうね」と固い約束を交わした。……お一人お一人紹介しきれなくてごめんなさい。

晴れやかに、田は黄金の波を打っていた。そこを黄色い蝶が舞っていた。飛鳥寺には、黄色いもみじが鮮やかだった。

飛鳥には、黄色がよく似合う。

経もなく、緯も定めず少女らが

織れる黄葉に 霜な降りそね 大津皇子

この号が出るころ、飛鳥には 霜が降りているだろうか。



〈We群馬の会〉

◆高崎市主催福祉セミナーの一回目（十月六日）の講師が、半田たつ子さんと知った時のうれしさ！ いつも読みつばなしのWeに後ろめたい思いをしていただけに、何かできることはないかな、これを機会にWeの会つくれなにかしら、講読している人は何人位いるのだろうか。ためらいながらウイ書房に問い合わせる。

送っていただいた名簿をみると、私をいれて十八人。Weの会これでは無理です、とつても集まらないもの、できっこない、すみません。当日Weの本だけ売ることによって下さい。売れ残ると困るから（ああ何ということだったのでしょう。全部売れました！）少しだけ送って下さい、と電話をしたのが講演の三日前。電話にでられた半田さんは「いいじゃありませんか何人だって、せっかく行くんですもの、話し合いましょう」。時間がいくらかあっても足りない程忙しさに違いない半

田さんが、一面識もない私に、サラリとおっしゃるのだ。受話器を握ったまま私はただもう頭を下げるのみ、エライことになった、とうろたえながら。

当日講演終了後集まってくれた有志は、前橋よりWeの読者一人、高崎より家庭科の先生四人、Weの表紙でおなじみの加藤さんも、何と太田から応援に来てくれた。元校長、取材をお願いした朝日新聞の記者、あすなる会（憲法の勉強会、私も入ってます）から三人、合計十一人が半田さんを囲んでフリートーク、カーツと上がりつばなしで、收拾のつかない私にかわって半田さんがしっかりと話を進めて下さいました。翌日の朝日新聞群馬版には講演や座談会のことを読み応えのある記事になって大きく載っておりました（本田記者さんありがとう）。

あすなる会で勉強している憲法の人権尊重や平等の理念が、生活の中に根を下ろし心の壁に入ってくるような運動体がWeなのだ、と私は独り合点の再確認。本当にありがとうございまして。

（林田初恵） 〈We愛知の会〉

◆家庭科教科書調べが一段落したこともあり七月例会は「今年前半の反省とこれから」。

検討会議に向けて①共修家庭科でどんなことを学ぶかという教科内容（項目）を提出する②より多くの人から共修を！の声を届けるためにハガキつきのリーフレットを作ることで、が提案されました。そして、これが、かの有名な名古屋の猛暑と共に私たちを悩ませる夏休みの宿題となったのでした。……四苦八苦の結果、九月初めに①を提出、②も「高校の家庭科の男女共学必修を実現させるために」というA4サイズ、ハガキの厚さのリーフレットを発行してしまっただけです（なお、男女共修とか共学必修とかの言い方ですが、私たちは男女共学必修という言葉を使おうということになりました）。ハガキなんか出しても読んでももらえないんじゃないか、かえって悪い印象を与えてしまうのでは……という心配や疑問もありますが、「やらないで後悔するよりは、やって後悔するほうがまし」なのだ（と信じたのです）。

九月例会では、教科書調べの中で出た意見を出版社に出してみようということ、また、各分野別に小・中・高の関連を調べることが提案され、十月からこれに取り組みます。

今回は久しぶりにWeの特集のテーマについての話し合いをしたのですが、「支え合い

つひとり立つ」まで迫りきれず時間切れになりました。

(岡本のりこ)

〈We 武蔵野の会〉

◆九月八日(日)は薄曇り。いつもの御殿山コミュニティセンターの小さな和室。膝つき合わせて今日は八人。藤武さんチの美鈴ちゃん、ホールのソファで本を読んでは、時々、私たちをのぞきに來ます。

会の中心メンバーの長谷川公一さんが、十月一日付で仙台へ赴任なさるとのこと。『最後のお勤めに司会を』満場一致でお願いして(押しつけて?)会の始まり、始まり。

まず、五月号『今、家庭科は?』を中心に長谷川さんから、「家庭科の男女共修問題もそうだが、日本は外庄によってしか変わらない。今日はそこから話を始めたい」と問題提起。半田さんから家庭科検討会議の報告。

鹿児島で開かれた全国高校P連での決議文(家庭科の女子必修の履修形態を守れなどの内容が抜きうち採択)に憤ったり。家庭科の共修問題一つをとってみても、政治、官界のやり方、日本の思想風土、あらゆることにつながっていて、話題がどんどん広がります。多摩北の家庭科部会でとったアンケートでは男女共修を肯定する男子が半数弱あるとのこ

と、底流から少しずつ意識は変わってきているのだ! 私たちの小さな集まりもそうした流れを作り出す一助になっているのかも!

武蔵野の会は、二カ月に一回という、ゆったりテンポ。今回のようにテーマにそってまじめにという日もあれば、脱線のしつ放しでついにという日もあって、その日の気分で楽しみ倍増。各人の立場と個性があいまって、問題が出され、広がり、ほぐされ、じっくり聞き、考え、話す。参加者全員ハーモニーもっと広げたいなあ。いろんな方の参加を待っています。気楽にのぞいてみて下さい。冷やかしも歓迎。

(山田則子)

〈We 江東の会〉

◆ひょんなことで松本法子さんと知り合い、日頃抱いているウツプンをブツツケ、その対応が誠にしなやかで人柄に魅力を感じた。その彼女が夢中になっている「We」。名は知っていたが「新しい家庭科」にはほとんど興味を持てなかった。前日、土曜の夜の予定が空き、好奇心の虫がムズムズ——のぞいてみよう! と相成った。いつも和室で開かれるのかな、座って輪になるとくつろぎますね。

「あ! 来た来た、和田さんよ、この人!」座布団、お茶、おやつまで出してもらえば居

心地の悪いはずはない。あとは会員の方々のおだやかな微笑み、ウレシ……!

本当の所を見つめている人々との会話は安らぎと力を与えてくれる。そして、集まっている一人一人が、とても魅力的な方たち。

長沢さん、迷つてるところに主婦の原点がありますね。共感多々。菊池さん、すばらしくきつく本当のところに迫ってる方ですね。

鈴木さん、さすが! 迫力ある。いつも仕事もって生き生きしている方にはコンプレックスもつてしまう……。稲色さん、仕事始めるとやはり疲れる。仕事持っている母親と子どもの関係って……(そこそこ! もっとお話をうかがいたかった)。武末さん、短く切る言葉に含蓄あるものを感じました。

おとなが話している間、子どもたち五人が押入れに入ったり、しばしば聞き取りにくくなってきた時は、小宮山さんと川鍋さんとがさあーと皆を外へ連れ出し、一階のガレージで思いっきり遊ばせてくれました。

あちらこちらのグループやサークルとWe江東の会はどこが違うのか。あの魅力ある人々が何を求めてここに集まっているのか。しばらく見せてほしいなと思いつつ帰宅した。

(和田順子)



◆私の好きな言葉の一つに、「大切なものを大切に」というのがあります。仕事や家事に追われる日々の中で、「今日自分は一番大切な事を忘れてはいなかっただろうか」と省みることが、一日の労苦に引きずられている状態から解放させてくれるのです。

私がこのようなことを考え始めたのは、中学校一年生の頃でした。住まいの関係で転校した私は、初めて登校した日の帰り道、偶然同級のA君と一緒に、いろいろな話をしました。A君は新入生の私に、学校への近道や、学校の事を親切に教えてくれ、転校

という大事件で不安だった私は、とても安心したのを覚えています。しかし、A君との楽しい語らいはそれが最初で最後でした。翌日のクラスの中に、A君の姿はなかったのです。A君のことを尋ねると級友は「奴はキ印なのさ。一年に一週間も学校に来ないんだよ。一言もしやべらないし、何も食べない変な奴なんだ。お前も近づかない方がいいよ。うつるから」と言い、何が何だかわからなくなっていました。A君が「気狂い」!? そんなはずはない、だってA君はあんなに楽しそうに話していたんだ……どうしてみんなは、そんなひどい事を言うのだろう? 幾つもの疑問が、頭にこびりついたように離れませんでした。あれから十数年。思えば、A君との出会いは、私と「登校拒否」との初めての出会いでもあり、心理学という迷路に足を突っ込む大きなきつかけとなったのです。難解な用語が頭の中を駆け回って

いる今の私は、登校拒否という行動を、自我の防衛システムとして語り、彼の緘黙と拒食を、母子関係の不全として得々と説明するようになりました。ようするに、彼は育ち損いであり、そういった自分を守るために、恐ろしくコストの高い方法を使うしかなかったんだ、人生のやり直しが必要なんだと。

でも、あの時A君に連れられて歩いていた転校生は、そんな説明ではまだ納得していません。学校が悪かったのを彼をそうさせたんだ、ということも何の説明にもなっていません。A君は、何を守ろうとして、生徒にとって生活の代名詞でもある学校を拒否し、生活そのものである食べるという行為を拒否したのか? 何が、人間らしさの最たる言語を自ら封じさせてしまったのか?

A君は、衣食住より大切なものがこの世にあることを教えてくれました。大切なのは、衣食住とい

う形ではなく、それが奏でる調べなのだ。A君の「たいせつな何か」を、学校も、友人も、親も守ることはできなかった。A君にとつては、学校へも行かず、一人部屋に閉じ籠っていることが、彼にとっての真実の生活だったのでしよう。

どんなに素晴らしい生活であっても、たとえそれが、大心理学者の御墨付きの、健康な身体と自我とところを育てる最善の方法であったとしても、その調べが「たいせつな何か」を守れなかった時、一瞬にして、無味乾燥な巨大な壁として自分の前に立ちはだかるのです。どんなに不合理で、おそまつであろうと、たとえ狂気の烙印を押されるような代物であったとしても、それが「たいせつな何か」を守り、育む時、自分の真実となるのではないか。素晴らしい生活の「形」ではなく、手作りの生活を作り出す「ところ」こそ捜すべきものではないかと思えます。そ

して、手作りの生活を互いに認め合い、支え合うことが真の連帯なのではないでしょうか。

自分の「たいせつな何か」を守れなかった時、それを改善すべく病は始まり、集団が個人の「たいせつな何か」を守ろうとしなくなった時、腐り切った本当の病へと変質していく。

A君の「何か」もわからず、自分の「何か」も見つけられないまま、今日もなんとか生きています。でも、明日は今日より、「たいせつな何か」を大切にできる自分でありたい。人の「たいせつな何か」を少しでも守れる自分に育てていきたい。そして、「たいせつな何か」を大切にしていきたいと願う仲間の輪を広げていきたいと心から思うのです。

(東京・内村章一郎)

◆九月二十九日「かながわ女性プランの進捗状況をきく会」で、福島澄香さんにお会いしました。県

職員(教育委員会も含む)四十一人と、女性会議会員六十三人の話し合いでしたが、質疑応答の時間に、福島さんが、県に設置されている「家庭科男女共修推進研究会」「高等学校教育課程開発研究校」などについて、質問されました。

神奈川県の教育委員会は、五十九年末に「男女平等教育研究会」の報告書が提出されるので、それを持って……など、お茶を濁していました。その研究会も、開催は年三回、どのような報告書が提出されることでしょうか。でも、機会をとらえては、息ながく突っこまなければ……と二人で話し合ったことでした。

かながわ女性会議は「フェスティバル、女性がつくる老後の文化」への協力で、大部分エネルギーを吸い取られました。婦人総合センター開館二周年'84年江の島会議に「男女雇用平等法」討議を自主運営しなければならず、また、タバタと落ちつかぬ日々を迎えそ

うです。

(横浜・皆川鎮枝)

(匿名希望)

◆私の学校は〇〇県高等学校家庭部会長を引き受けていて、〇〇県女子必修を守る会」を作り、女子必修を守らなければ、仲間のくびを切ることになる、県下の音頭取りをしています。国会議員をはじめとして、一人五通ずつの手紙作戦をとり、県選出議員を〇〇女子高校に招いて研究授業をし、女子必修の大切さを力説しているような状況です。主任から「We」という雑誌をとっているでしょう。どういう考えがあるのか。人はそれぞれ考えがあるだろうけれど、へんな考えは持たないように……」などと言われました。

県立高校が男女別学というような状況なので、「家庭科男女共修」を言えば、必ず選択となつて、教師の定員が削減されるということと、男子校ではどうしようもないだろうというのが、彼女たちの理論(ともいえないが)なのです。

◆十月号の「ジョン物語」読みました。犬の共存する仕事場についてですが、猫もいたほうがよいですけれど、読んでいて『犬になりたくなかった犬』を思い出していました。図書館の司書机の下にもぐり込んで、夏の暑さを避けている犬。司書が犬を連れて出勤していることを誰も怪しまず、咎めだてしない町の人々——そんな社会だったら、赤ん坊の泣き声がうるさいってどなる夫もいないのかナ(ベットと赤ん坊は別カナ)。

今、私の地域に、スーパー経営のOグループが病院を開設しようとしています。商業地域の中、保育園・小学校に隣接した場所に、「救急・老人病院」というのです。私たちは「北区の医療を考えたい会」をスタートさせることにしました。関心を持つ方ご参加下さい。(東京・大村和子)

情報1 全高P連大会決議に、女子必修を校長会家庭部会が提案していた

十一月号の「情報3」に「全国高等学校PTA連合会、驚愕の大会決議」を載せたが、このほど入手した資料で、全国高等学校校長会家庭部会理事長が、全国大会の席上、『家庭一般』女子必修の堅持について「提案をしたことがわかった。このときのお話したいへんよかったためと、またいろいろな方のお力添えで、大会決議に女子必修堅持が盛り込まれました」ということである。

家庭部会の高井利夫理事長は、「戦前は、『家事・裁縫』という教科名で呼ばれ、家事技術という実科的な教養が重視され、日本古来の家庭制度を支えるための婦徳の涵養を目的として、良妻賢母を育てる女子教育の中心的な教科であったものが、戦後は、学制改革に伴い『家庭科』という教科名になり、家庭の民主化を目指し、夫婦を中心とした家庭の経営のあり方を学ぶ教科として再出発した」と説明。それなのに「女子の特性に応ずる教育ということが強調されて、原則として女子必修にな」ったことを、「その時々国民のコンセンサスを得ながら今日に至っている」と受

けとめ、「条約批准ということで、一方的に曲げられてよいものかどうか、はなはだ疑問に思わざるを得ない」と言っている。

家庭科の「男女ともに必修というのは、はるかに遠い将来なら別であります、いくつかの理由で、当面、実現不可能であろうというのが、私どもの判断」だそうで、その理由とは、①中学校の技術・家庭科の履修内容が男女差が大きいということ ②男子高校における施設・設備や教員の確保が当面むずかしいということ ③男子全員に家庭科をというのは、賛否両論あつて、国民のコンセンサスを得にくいということ。中でも③がより根本的なのだそうで「母性教育の重要性を考えれば、女性こそ家庭科教育が必要なのであつて男子必修は、時期尚早であるとか、絶対に反対であるとかの意見も根強いところでありまして、国民のコンセンサスは仲々得にくい」という。

五月二九日の校長会の総会で「現行の女子必修、男子選択という履修形態は、わが国の実情に基づく教育的配慮によるもので高く評価できる。よって少なくとも、女子に対しては必修を堅持すべきである」と意志統一をした。どうか、PTAの皆さんとしても、わた

しども校長会の『家庭一般』の女子必修堅持すなわち、現状維持についての切なる願いに深いご理解を賜り、ご支援くださるよう心からお願いを申し上げ、その結果が、決議に盛り込まれたのである。

**情報2 家庭科の男女共修は必要と
臨教審委員 木村治美氏**

臨時教育審議会委員の一人、木村治美氏は日本経済新聞(10・14)で「女のロマン」と題し、旅の体験を柔い筆致で記した後次のように述べている。

「私は臨時教育審議会の委員の一人として、21世紀の教育を考える役目をいただきました。検討したい問題はたくさんありますが、その一つに、男と女の関係を、教育の場でとらえなおすことがあります。たとえば男女雇用機会均等法は、教育問題そのものです。女性が家事を一手に引き受けなければならないのであれば、雇用の平等が自然な形で実現するはずがありますまい。また相手の立場を尊重する気持がはぐくまなければならないません。そのためにも、家庭科の男女共修は必要です。家庭科といういい方に抵抗があるなら基本的な生活教育といったらよいでしょうか」。

情報3 家庭科共修問題、テレビで

〈YOUで〉

森 幸枝

今にして思えば、もつと有効な演出の方法はいくらもあったと臆を咬む思いである。「家庭科見直し」についてのNC9の放映が、余りにも低次元であったことが、心ある家庭科関係者の怒りを呼び、抗議や要求が出されていた。それが、本来、若者対象の「楽しいお笑いにほんの少しの教養（教育ではない）」を入れる番組「YOUに、不可能に近い期待を寄せる結果となったと思う。今回の製作は大阪、すぐ隣に全府下で十年間も男女共修を懸命に続けて来た京都がある。とにかく取材を、といういきさつから粗上に登った。特に現時点での共修の必然性と重要性を思い、それを願う全国の方たちの熱い眼差しを痛感して、声をかけた他校も先生も遠慮されてしまった。

一時間の中で田辺高校二分半、私は四分足らずという出番。良心的なディレクターN氏の苦慮とゲストに助けられてやっと「あれだけ」であった。つるべ氏をはじめとする家庭科・料理・裁縫のイメージは固い。

〈朝のニュースワイドで〉

半田たつ子

「家庭科は男女にも必要だと思う人。えっ、ほとんどだね。長野県立須坂高校を取材した斎藤記者の言葉で始まった10月26日朝のNHKニュースワイド（ローカル）。須坂の他、明星学園（生活科として共修）の授業風景も映し、中島・大平両教諭は、きちんと家庭科観を語られた。須坂の生徒いわく「おもしろい。自分の生活に関することだから・受験勉強の合間にくつろげていい」（男子）、「男子とやったほうがいい・男の子のためになる」（女子）。「女っぽくてつまらない」は一人。僅か七分の番組枠で、私については「生きる営みを学び、男女で家庭をつくり、男女で子供を育てるのだから当然」の部分しか流さなかったが、校長会の真意は出た。日本の家庭は女でもっている。共修といえど選択、選択になれば男どころか女もとらなくなる。女子必修をやめるなんてトンデモナイ」（桜井隆道氏）。10月20日の行動を起こす会の集会（96頁参照）、22日の検討会議の様子を映し、「まだまだ論議しなければならぬことが残されている」と斎藤記者は結んだ。6月のNC9に比し、良心的な報道だった。

（須坂高校のレポートは11月号80頁参照）

情報4 活気あふれた「男たちも訴える」集会

「家庭科の男女共修をすすめる会」は、「男たちも訴える、実現させよう家庭科男女共修！10・27集会」を開いた。中学校長退職後「新しい男性の創造」を志して主夫業。現在は、保育専門学校教師として仕事と家事の両立をはかっている荒木敦氏。共働きの中で過労からおつれあいが倒れたのに、自分は食事の支度もできなかった悔いから、料理教室に通った丹原恒則氏。共にご自身の生活を語る中で男も家庭科をと訴え、感銘深かった。

川越高校の男子生徒が最前列にずらり。代々木高校（定時制）で共修家庭科を学んだ船越進君は、食品添加物や農薬の問題が身に沁みた。調理実習は楽しかったし、保育では性教育で男女双方の意見をきけてよかった。と。瑞雲中学で家庭科をやったけど、結婚してかやればいいと思うと卒直な金井清太君の疑問に、丹原氏がこんなこと語りかけた。

いよいよ正念場。家庭科教育に関する検討会議委員へハガキを、全国高校PTA連合大会に抗議し、マスコミに働きかけようなど運動の提案があり、集会は盛り上がった。

十字路

★千葉「不当だ許せない」

成田用水

成田空港の騒音対策へ
の見返りとして県が進め
ていた農業用のかんがい
・ほ場整備事業「成田用
水事業」のうち、三里塚
・芝山連合空港反対同盟
の農民らの抵抗により大幅に工事が遅れてい
た山武郡芝山町の菱田工区が二十五日着工さ
れた。この日、反対派とその支援グループ約
八百六十人は集会やデモを繰り広げた。一
方、県警は過激派のゲリラ活動に備えて約六
千人の機動隊員で空港への立ち入り制限をす
る警戒態勢を取った。このため、作業は予定
通り運び、二十七日にはブルドーザーなどの
建設機材を水田に持ち込みほ場整備にかか
る。

(毎日、9・26)

着工三日目の二十七日はバックホウを搬入
して排水路を掘る作業に着手した。重機の持
ち込みに「体で阻止する」と叫ぶ反対派の座
り込み戦術を、機動隊が実力で排除、二十四
人を逮捕した。反対派同盟の北原事務局長は
「自分たちの田んぼを守ろうとしただけで不
当逮捕するのは許せない」と厳しい警備に怒

りをぶつける。

(毎日、9・28)

・三世代の交流始めよう

祖父母、親、子の三世代が読書を通じ心の
交流を深めようというユニークな読書会が開
かれる。「市川子どもの本の会」が敬老の日
を前に企画した。同会は今後、子供たちが老
人ホームに出かけ、自分たちの作った童話や
劇を老人たちと一緒に楽しむことも計画した
いとしている。

(毎日、9・8)

・行徳の昔話追い続けて5年

市川市の主婦グループ「行徳昔話の会」が
今秋満五歳になった。地区のお年寄りを訪ね
て集めた昔話や民話の機関紙も二十号に。現
代の老人問題に触れたり、会活動と共に井戸
端会議の効用も大きいとは若い会員の弁。

「行徳昔語り」の年間購読料千円。市川市富
浜二の一の一同会事務局へ。

(毎日、9・14、木田直子)

★新潟・障害者の青年学級開講

障害者の社会教育が取り残されている現在
長岡市では、二〇―三〇歳の障害者のうち、
肢体障害者学級と聴覚障害者学級の二コース
を開講した。内容は「男女のあり方、性と心
理」「暮らしの中のルール」「ふるさと再発見」
など十回。(新潟日報、9・14、山口久子)

★群馬・高崎市福祉セミナー始まる

第一回は家庭科の男女共修運動など「平等
教育」に取り組んでいる半田たつ子・日本女
子大講師が講演。「家庭が学校の下請けにな
ってはならない、親の意見を学校に反映させ
る勇気を持つて」と訴えた。

(朝日、10・7、加藤由美子)

★埼玉・県の行政情報システム化構想

統計情報など各種行政情報の整備、提供を
内容とする行政情報のシステム化を構想して
いる県は、まず、人口、商工業などの統計情
報を県民に提供するとともに、各種情報を蓄
積、加工分析して科学的な政策決定に役立て
るための県統計情報システムを六一年度末を
メドに発足させる。

(読売、9・25)

・交流実感ノ 車イスの旅

「読売ふれあいの詩基金」から資金援助を受
けた「熊谷住みよいまちづくり運動グルー
プ」は、車イス使用者十九人とボランティア、
父母ら計三十八人で小諸市へ研修旅行した。
グループ討論では「障害者の自立」に話が進
んだ。数十段の階段を一般観光客が何人も車
イスをかつぎ上げる「コマもあり、「こうい
うふれあいがいうれしい」と会員たち。

(読売、9・29、村上悦子)

★東京・おとしより公社——台東区

六五歳以上の老人の求めに応じて家事で奉仕しておけば、自分の老後にその分のサービスが受けられるという全国でも初めての制度「おとしより公社」が十一月から開始される。他区に比べ、老人比率が高く、二世代、三世代同居の多い下町では、不動産担保の武蔵野方式はなじまないと。

(毎日、8・29)

・「育児時間」男子職員にも

田無市は、これまで女子職員にだけ認めていた育児時間を男子職員にも認めることを決めた。満一歳までの乳幼児を持つ夫婦とも市職員の場合で、夫か妻のどちらかに一日二回各三十分間。国家・地方公務員ともに初めてのケース。現在恩恵を受けられるのは二人。同市職組では「男女平等からいって時代にそぐわない条例は改めていくことが必要」と評価している。

(朝日・毎日、9・11)

・優しくしてくれないが離婚理由

「病身いたわらない、対話ない」と「くれない族」夫人が起こした離婚請求訴訟の控訴審で東京高裁民事十一部は離婚を認める判決を言い渡した。勝訴したのは多摩地区の華道教授A子さん(53)。人見康子・慶大教授は、「夫婦間の不作為が認められたのは初めて、

今後はこの種の離婚が増えるかも知れない」と。

(毎日、10・11)

・校長の処分権に押

都教育庁が「学校の管理運営に関する規則」の中に「児童・生徒の出席停止」条項を盛り込むよう指示していたが、中野区教育委員会では校長の処分権に枠をはめた独自のものに決めた。それは校長の出席停止処分権について「緊急の場合は委員会の指示を受けることなく命ずることができるとする都教育庁案のただし書きを削除するなど児童・生徒の保護を強く打ち出している。

(毎日、10・13、三橋典子)

★神奈川・増えてます 老人の結婚願望

川崎市結婚相談室には、結婚したいという六〇歳以上の訪問客が増えた。五十六・八年にかけて九人、十一人、十二人。登録者全体からみれば少ないが十年前は五〇歳どまりだった。結婚希望者は身の回りの世話を望む男性が多い。しかし、実際は家族の反対が強く、ゴールインは少数。

(朝日、9・14)

・本名名乗れる学校づくりを

川崎市教委は、市立学校に学ぶ在日韓国・朝鮮人の児童・生徒が本名を名乗っても差別されない環境づくりに取り組んでいる。目

下、現場教師の理解を深めるための研修会を開催中。また教師用の手引書づくりにも取り組む。

第二回民族差別と闘う関東交流集会は二四日、川崎市の教職員互助会館で開かれるが、実行委員会によると今回は行政関係者が積極的と。連絡先・川崎区桜本一―八―二二、社会福祉法人青丘社(〇四四―二八八―二九九七)

(朝日、9・20、山口里子)

★兵庫・公立普通高に「演劇科」

県教委は来年四月から公立普通科高校に「演劇科」を新設する。計画によると宝塚区に開設される県立普通科高校に一クラス(男女共学)。県下全域から推薦制。県高教組は多様化方針にたいして「基礎的な力をつけるのではない、偏った教育」と批判している。

(赤旗、9・18)

・神戸ミセスは社会派です

神戸・大阪・京都の三市は主婦を対象に共同で実施した「教育・余暇サービスの需要動向調査」の結果をまとめた。それによると、大阪は庶民派、京都は芸術派、神戸は講演会やサークル活動に参加する人が両市より一二%も多く、社会奉仕にも熱心で社会派といえる、と。

(神戸、9・20、由良サダコ)

★日教組、独自の教育改革検討★

日教組（田中一郎委員長）が第12回中央委員会に提出する秋期、年末闘争方針案によると、首相の諮問機関である臨時教育審議会に対抗して、各界の代表で構成する教育改革を検討するための協議会を各地に設置し、教育改革大綱を作成する、としている。（朝日、10・2付）

★「小・中学校でコンピューター授業を」

通産省は、10年後の高度情報化社会で予想されるコンピューター・ソフトウェア技術者の不足に対処するため小、中学校段階からのコンピューター教育を重視、文部省に対し初等・中等教育制度の中にコンピューター学習の機会を本格的にとり組むよう要請する。

通産省では少なくとも向こう5年間に1校当たり1クラス分（40台程度）のコンピューターを設置、幅広いソフトウェア技術者を供給する基盤をつくらなければ新しい時代に対応できないとするため。

（毎日、9・27付）

★高校定時制・通信制教育検討会議発足★

生徒の減少、多様化などで様変わりが進む定時制、通信制高校教育のあり方を検討するため、文部省は、学識経験者や現場の教師ら14人で構成する「高校定時制・通信制教育検討会議」を発足させ、9月28日、初会合。

定時制は、ピーク時の1953年に3190校、56万7000人（全高校生の22.7%）在籍、'84年は1114校、13万7000人（同2.6%）。通信制は現在12万8000人。

実態に対し、関係者から①生涯教育的観点を導入し、例えば美術、書道、建築、簿記など短期間コースの設置②一度高校を出た人に対して、職場の技術革新に対応する技術を教える「専修コース」の設置③勤労青少年は必ずしも夜の時間が空いているとは限らず、学習しやすいカリキュラムの弾

力化一などの意見が出ている。（9・28付）

★「効率悪い学校給食」???★

9月21日、総務庁の行政監察で“非効率”な学校給食の実態が明らかになった。後藤田総務庁長官は22日、監督官庁の文部、農水両省に給食行政の見直し、改善を勧告。

学校給食は'83年5月1日現在、全国で小学校24,537校（98%）、中学校9,407校（85.9%）で実施され、費用は1兆395億円（'82年度推計）。

昨年10月から3ヵ月間実施された今回の監察によると、民間委託の実施状況は、調理業務3.4%、食器洗浄2.9%、給食物資の購入・管理5%など。文部省が'71年体育局長通知で「学校給食は原則として直営で」と指示、これが現在でも市町村で民間委託に踏み切れない最大の原因とされる。

1食当たりの調理経費は、直営が116円、民間委託76円と40円の格差。

共同方式は単独方式に比べ1食6円程度安く仕上がることから、同庁は共同化の推進も求めている。

直営方式のコストを押し上げている最大の要因は人件費。調理職員は全国82,696人で常勤は74,740人（90%）。常勤者の調理義務は、長期休暇などがあり年間190日。このため、休暇中、プールの監視や調理場の清掃などで実働日数を増やしているのが実情。常勤配置の必要性がほとんど認められない、と、同庁はパートタイム職員の活用なども勧告。（毎日、9・22付）

★「婦人に関する世論調査」★

総理府広報室は9月23日「婦人に関する世論調査」を発表。同調査は結婚・離婚観、男女の地位に対する考え方などを明らかにする目的で今年5月、全国から無作為抽出した20歳以上の男女1万人を対象に、面接聴取方式で実施した。

〈結婚観〉「女性結婚の方がよい」72.4%、「一人立ちできればあえて結婚しなくて

もよい」19.9%、「結婚は女性の自由を束縛するから一生結婚しない方がよい」0.5%。女性の回答者のみについては「しなくてもよい」「しない方がよい」が5年前より1.5%アップの24.6%。

〈離婚観〉「結婚しても相手に満足できない時はいつでも離婚すればよい」に「共鳴できる」3.7%、「ある程度理解できる」26.6%で計30.3%が肯定的。「あまり賛成できない」48.8%、「全く反対である」16.7%で計65.5%が否定的。

肯定派は男性26.8%（前回21.7%）、女性33.1%（同23.6%）。

〈男女の地位〉「男女の地位が平等になっていると思うか」の問いに「平等になっていない」73.9%、「平等になっている」16.9%。「平等になっていない」とする男性69.4%、女性77.5%。（毎日、9・24付）

★'84年版「婦人労働白書」★

労働省は'84年版「婦人労働白書」を10月20日まとめた。'83年の就業者と完全失業者とを合わせた女子労働力人口は2324万人（前年比3.2%増）で、労働力人口全体に占める割合は39.5%（同0.5%増）。

このうち就業者は2263万人（同2.9%増）で女子雇用者は1486万人（同4.8%増）。主婦を中心とする家事専業者は1517万人でほぼ同数。

女子の雇用者中、中高年齢層の割合が高まり、35歳以上は55.9%。女子の新規学卒者の中で短大・大学卒の割合は33.5%（'60年3.5%）と高学歴化。勤続年数も長期化し、平均勤続6.3年、勤続10年以上は22%。

女子の賃金の伸びは2.2%増（男3.3%増）で、平均給与は月18万3989円（男35万2537円）。

パートタイマー（1週35時間未満）は、306万人で、女子雇用者全体の21.1%。平均41.7歳、平均勤続3.6年、平均賃金時給560円。（毎日、10・21付）

★女子大生就職率、20年ぶりで70%突破★

10月16日、文部省のまとめた'84年度学校基本調査速報によると、今春大学を卒業

した女子の就職率は70.7%（男子は78.7%で昨年と同じ）と、'64年の71.0%以来20年ぶりに70%を越え、短大卒女子は79.7%（前年比1.3%増）と過去最高を記録。

（毎日、10・17付）

★「売春春と性差別撤廃条約」のシンポジウム★

来月7月の差別撤廃条約批准に向けての国内法の整備が行われている中、「女性の人権の原点である売春春の問題が取り上げられないのはおかしい」と、9月29日、東京・婦人会館で「売春春と性差別撤廃条約」のシンポジウムが開かれた。主催は「売春問題ととりくむ会」。

新宿区の婦人相談員、兼松佐知子氏が現状を報告し、「現在の売春春の原因はサラ金、孤独感、疎外感などと多様化している」と指摘。観光売春春問題について、日本キリスト教協議会の山口明子氏は、「アジアの女性たちが日本に来る“国内版観光売春”が増えた」と。

これらの実態をふまえ、売春春そのものが罰せられない売春防止法の問題と共に、差別撤廃条約の考え方を現行法制にどう生かすか話し合われた。（毎日、10・4付）

★子ども文庫、全国に4500以上も★

子ども文庫の実態調査が、(社)図書館協会の日本子ども文庫調査実行委員会でもめられた。図書館情報短大の竹内愼氏や、実際に文庫を開いて活動している10人が委員となってアンケートをし、まとめるまで3年かかったもの。

4557文庫に問い合わせ回答は1878文庫。文庫の数は東京221が最高で、文庫のない県は0。子供の会員は推定22万人。利用者は1日平均21～50人が28.7%と最も多い。

場所は「個人宅」44.4%と最も多く、町内集会所などの「公共施設」を合わせると86%。運営は「個人」34.9%、「有志グループ」37.2%、「町内会」6.4%。

年間経費は「5万円以上」が最も多く38.7%。次が「10万円以内」「1万円以内」と続き、1年間の平均経費は84,000円前後。

（毎日、9・26付）

かつては友人（恋人）とかかわり合いの代名詞。いつの間にか主語が（例えば）隣近所に変わりました。このあたり、私もいっちょまえの主婦に！と、実に感慨深いものがあるんでありますが、サテ何がむつかしいって隣近所とのつきあい程むつかしいものはありませぬ。望まないのでにややこしい話のまん真中へ立たされたりすると、「私は貝になりたい」との心境も度々。エ!? こういう時使うんじゃないかなかったっけ!? このドラマの題名。

★Weバックナンバーのご案内★

〈vol.1〉創刊号いでたちね、いま

6月号共に生きる

7月号新しい家庭科とは

8・9月号反戦とは、平和とは

11月号家事労働を問う

12月号家庭・家族

1月号新しい男と女のかかわりを

〈vol.2〉4月号教師は、今こそ声を

6月号はたらくことをめぐって

7月号コミュニケーション

8・9月号老いを考える

10月号今、教科書問題を問う

11月号食えるということ

12月号着るということ

増刊号学校はよみがえり得るか

1月号「1984年」

2・3月号住むということ

〈vol.3〉4月号PTAって何

5月号いまこそ、家庭科を問う

6月号地域に生きる

7月号少年・少女たち

8・9月号「遊ぶ」ということ

10月号支え合いつつひとり立つ

11月号「病む」ということ

す。こんな風景を通して、Weはお手許に届けられていま

（青木）

しかったです。この雑誌」という言葉もうれ

（中野）

の批准は来年7月。（馬場）

は」です。（半田）

◆毎月の発送作業は、近くの公会堂での一日仕事。袋詰めから糊づけ、梱包と、手分けをしての流れ作業。お手伝いにかけてくださるWeの会、読者の方々と手を動かしながらの楽しい会話。誌面批評や各地の情報、身近な話題から、思わず手も止まる重たい話まで……。

◆午前中に速達、お昼ごろ普通便。読者の方からのお手紙を私たちは首を長くして待っております。

◆長岡市の金森順子さんが「WeとI」の論文に添えて既刊の特集と実践を筆者名とともに一覧表にして下さいました。細かい字で七枚もびっしり書かれているのを見たら感激してしまいました。読者にとっても自分の雑誌」という言葉もうれ

◆「家庭科男女共修をやるうとしないうちで作られる平等法はダメ！」10月20日、八丁堀の勤労福祉会館で、行動を起こす会主催の「進むも止まるもあなたにしたい——共修と平等法は車の両輪——集会での会場発言だ。ほんとうにそう思う。♣家庭科教育の検討会議はあと11月、12月の2回で実質的な報告。均等法」は12月から審議再開。差別撤廃条約の批准は来年7月。（馬場）

新しい家庭科—

発行所／（有）ワイ書房

Vol. 3 No. 8 1984年11月20日発行
〒530（年間購読料・増刊号含¥6000）
編集兼発行人／半田たつ子

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎03(326)1380 振替 東京6—59867
印刷所／（有）岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

旭	川	富貴堂	えいがさい<葛飾>宏精堂、	豊	橋	文教書店	海	南	佳岡書店ジャスコ
	川	京栄堂書店	中村書店<世田谷>やまべ	豊	岡	耕文堂	田	辺	多屋孫書店
砂	川	いわた書店	書店、江崎書店<練馬>か	豊	岡	鈴書書店	神	戸	流泉書房
	松	野書店	じか書店、平形書房<北	岡	崎	カマクラ文庫			ヒカリ書店
島	松	神田書店	愛京堂<墨田>業平堂<江	尾	張	活人堂			日進堂
	館	成田本店	東>文俊堂<品川>シグマ	瀬	戸	三浦書店			明文館
青	森	東山堂	図書<吉祥寺>ウニタ書	碧	南	ケイコウ書林			文進堂書店
	岡	みみずく書房	店<目黒>中川書店<三鷹>	愛	知	日進書房	西	宮	文進堂書房
盛		信栄書店	第九書房、たべもの村<調	刈	都	酒井日進堂	尼	崎	イカロス書房
		誠山房	布>みづほ書房<武蔵野>	谷	谷	宝島	姫	路	宣文堂書房
花	巻	松田書店	中森書店、<小金井>かこ	岐	新	栗山書店	明	石	姫路九善
	沢	こどもの本の店	や書店<府中>国府書店会	新	湯	万松堂	岡	山	学友書房
水	台	プーの家	<国分寺>青野書店<国立>	小	千	島谷書店	米	子	弘栄堂
		八重洲書房	増田書店富士見台店<立川>	三	谷	新湯書房			今井MC本店
仙		ボラン	石井書店、オリオン書房、	長	条	覚振書店	出	雲	今井書店
		萩書房	泰明堂<小平>和中書店、	上	越	春陽館	広	島	武田書店
泉		高山書店	松明堂<八王子>くまざわ	柄	尾	稲豊書店			やまびこ書店
		金港堂	南口<清瀬>マルオカ書店、	富	山	清明堂書店			いづみ書店
秋		ホビット館	飯田書店<町田>久美堂	岡	岡	清文堂			アサヒ書店
		加賀屋書店	<多摩>くまざわ永山店	松	谷	イソップ屋	竹	原	草間書店
酒	田	八文字屋	横 浜 文教堂	飯	本	笠原書店	福	山	岡田書店
	形	高陽堂書店	有隣堂	金	山	新光堂書店	松	口	白藤書店
山	島	岩瀬書店	蓬萊堂		沢	牧野書店	観	山	去来社
		西沢書店	中央堂			うつのみや	音	寺	タカハシ書店
郡	山	松文堂	北野書店	福	井	セールスセンター	徳	島	雄徳堂徳野書店
	岡	川島朝日堂	早川書店			北国書林			ブックスエミール
藤	橋	アルプス社	ブックス上溝			じまわり書店	土	山	依光書店
	生	近江書店	中村書房			じっぷじっぷ	佐	田	北九州書店
前	沼	至誠堂書店	たらは書房			吉川隆文堂	北	九	白石書店
	戸	ツルやB.C	大船書房			春江書店			黒崎ひとりわB.C
田	城	太陽堂、	相模書房			品川書店	福	岡	金文堂
	和	岩淵書店	豊元書店			勝木書店			積文館
水		須原屋	東松堂	敦	賀	海光堂			金進堂
		新井書店	内田屋書房	奈	良	海老山書店	二	日	丸山スコレ店
結	口	ブックスサトウ	藤美堂	尾	鷲	尚古堂	久	留	江頭書店
		温古堂書店	ワコー書店	松	阪	中村書店			菊竹金文堂
滯	喜	日野屋書店	みどり書店	大		旭屋書店本店	唐	津	日新堂
	谷	もり書店	榎本書店			紀伊國屋書店	佐	賀	金華堂
久		比企文化社	文泉堂			ユーゴー書店	長	崎	文光堂
	松	山屋	伊勢治書店			樋口書籍			好文堂
東	山	楓書房	太洋堂			米原十六堂	佐	世	紅屋書店
	光	前原かつぱ	百町森書店			藤川書店	熊	保	高校生協
和	橋	元山書店	吉見書店			学友			三章文庫
	戸	大和屋書店	童心堂	東	大	西坂書店	大	分	今村書店
津	沼	多田屋	宮崎書店	阪		ヒバリヤ			幡磨屋書店
	谷	大田書店	あつみ書店			栗林書房	志	布	スズキ書店
鎌	原	多杉書店	北松屋書店			かつらぎ	大	志	帯広畜産大学、東北大学、
	川	千里堂	遠州堂	和	泉	昌文堂	学	協	山形大学、福島大学、新潟大
佐	安	原勝書店	マルサン書店	豊	中	なにてに書店			学、群馬大学、宇都宮大学、
	京	<千代田>ビビ、	文正堂書店	藤	井	コーベックス			茨城大学、埼玉大学、日本女
市		日成堂、書肆アクセス、	資然堂書店	高	槻	西武			子大学、東京大学、東京家政
		三省堂本店、書泉グラン	ウニタ書店、	京	都	松香堂書店			大学、成蹊大学、愛知教育大
浦		デ東京堂<豊島>池袋書店、	ボランの広場、日比野泰			オデッサ書房			学、大阪市立大学、法政大
		野上書店、紀文堂書店	文堂、谷口正文館書店、	宇	治	中島書院			学、立命館大学、宮崎大学、高知
東		<杉並>木風舎、新愛書店、	稲沢文光堂、白樺書房西			大久保京都書院			学、琉球大学
		ブラサード書店、たつみ	店、白楊書店、竹中書店、			井田書店			
		書房、みどり書房<新宿>	中目書房、きたやま書店、	長	岡	恵文社神足店			
		紀伊國屋書店、模索舎、	丸内書店	岡	岡	亀岡書店			
		ブックスミヤ、伊野屋書	江 南 青雲堂	和	歌	宇治書店			
		店、ジョッキ<渋谷>すべー							

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。

お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。